
そして、始まる

大平麻由理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして、始まる

【ZZコード】

N8783E

【作者名】

大平麻由理

【あらすじ】

美術教師の鷺野凜香さきのりんかはひよんな事から音楽室でピアノの指導をするはめに。音楽教師の鶴本広海ひづみとは、どうも過去に何かがあつたような怪しい雰囲気。過去の秘密とはいつたまでも、そして二人の恋の行方は……。旧タイトル『クライスレリアーナ』はショーマンのピアノ曲のタイトルです。

1・夏の田江（前書き）

そして、始まる（旧タイトル、クライスレリアーナ）にお越しい
ただき、ありがとうございます。

ただいま、全編にわたり、加筆修正中です。

今までお寄せくださいました皆様の「意見」「感想」を参考にさせていた
だき、改稿に励みたいと思っています。

尚、旧クライスレリアーナの内容と大筋であまり変わりはありませんが、新しいエピソードも加わっていますので、話数は以前より
増えています。

こちらに掲載中のものは、すべて改稿済みになっています。

以前掲載していました番外編も、本編に組み込んでいく予定です。

窓の外には真夏の陽射しがじりじりと照りつけるグラウンドが見える。

空はどこまでも青く、遙か遠くに立ち昇る積乱雲は、きっと見知らぬ大地に恵みの雨をもたらしているに違いない。

気温はとうに三十五度を超えているのに、陸上部と野球部のメンバーたちはいつもと変わりなく大きな掛け声を響かせて、所狭しと走り回る。

野球部との交代を待つサッカー部の長髪イケメンが、木陰で飽きることなくリフティングを繰り返しているのも口課のようなものだ。

グラウンド横のフェンスの向こうにはテニス部の女子生徒がボールを追つてコートを駆け回っている。

バイザーの下にのぞく焼けた肌とは対照的に浮き立つ白い歯が、彼女たちの濁りのない真っ直ぐな心を映し出しているようだ。

日焼けはこの女の敵だというのに、太陽の下、躊躇することなくラケットを握るその姿は、まさしく青春真っ只中と呼ぶにふさわしい。

さきのりんか
鷺野凜香は窓から顔を離し、黒板の上に並んだ大音楽家達の肖像画をぼんやりと眺める。

バッハにベートーヴェン、モーツアルトにブルームス。
あれがシユーマンか……などとつぶやきながら、再び窓の外に視線を落とした。

防音設備が整い、冷暖房完備の音楽室の窓から見下ろす光景は、

とてもこの世のものとは思えなかつた。

ガラス一枚を隔てただけで、そこには天国と地獄の差が生まれる。もう一度黒板の上をざつと見渡してみると……。残念ながら、オーフェンバックの肖像画は見当たらなかつた。

もちろん、窓の内側が天国で、外側が地獄だ。

彼らが熱中症にならなければいいのだがとせめてもの温情を示した後、凛香は肩に手をやり首を回しながら、ピアノの前に向かつた。

外にいる生徒達には大変申し訳ないと思う。

幸か不幸か、誰よりも暑がりのこここの主のおかげで、音楽室の温度は二十八度を大きく下回つてゐるはずだった。

と言つことは……。必然的に、ここにいる凛香もこの学校の生徒なのかと問われるだろう。

が、しかし、音楽室にいるからと言つて、必ずしも生徒であるとは限らない。

では、生徒でないとすれば、いつたい何者なのか。答えは簡単だ。

教師だ。

真夏の午後、音楽室にいる鷺野凛香は、どういふわけかこの高校の美術教師……らしい。

凛香は、この県立東高等学校、略して東高に勤めて今年で一年目になる。

以前の勤務先と合わせると、教師歴は五年。大学院を出て職歴五年ということは……。

足し算をすればすぐに答えは出てくる。

卒業した年から正規職員として県の教員として採用されているので、年齢は二十九歳。

アラサーと言われる域に十分到達している年齢だ。

昨年までは堂々と自分の歳を言えたはずなのに、今年になつて急に年齢を口にしなくなつた。

というか、いつの間にか誰にも年齢を聞かれなくなつたので、えて言う必要もなくなつたというのが正しい。

凛香は最近、二十九という年齢に、微妙な気分を味わつてもいた。

生徒達がおもしろおかしく噂しているのも知つていて。

あの先生が結婚なんて出来るわけないよね、だって男みたいだもの……ヒ。

かと思えば、鷺野先生ってまだ独身なんだ、婚活がんばらないと間に合わないよなどと、本人を前に、あからさまに声を掛けってきたりもする。

いつたい、何が間に合わないんだ。独身でどこが悪い。

人生には様々な選択肢があるということを、今のうちからきつちりと学んでおいた方がいいぞ……といつそり毒づくのだが、決して生徒の前でそれを堂々と言ふする勇気はない。

だからと書いて、彼らの言ひことをいちいち真に受けしていくは身が持たない。

長くこの仕事を続けるための秘訣は、そういうプライベートに関する噂を右から左へ受け流すことだと、凛香は最近身を持つて学んだばかりだった。

では、絵筆とベレー帽が似合つはずの凛香が、なぜ冷暖房完備の音楽室にいるのか？

夏休みだというのに、学校に出勤してきてイライラを募らせた挙句、仕事をサボるためにここに涼みに来ているとでも？

あるいは何か用事があつて、たまたまこの一時だけ音楽室に滞在していた……という可能性もなくはない。

だが、どちらも全くのハズレではないにしろ不正解だ。

凛香ともあらう人物が、そのようなありきたりの理由で音楽室で羽を伸ばすなど、あつてはならないことだから。

真面目一徹、首尾一貫。品行方正で生徒の信頼も厚い。仕事をサボるなんて言葉が凛香の辞書にあるはずもなく。絵筆を楽譜に持ち替え、イーゼルならぬ、グランドピアノに向かう姿は、もはやここに主すらも近寄ることをためらひへり。毅然としたオーラを立ち上らせていた。

そう……。凛香がここにいる理由は、教育系の学部や学科への進学を目指す生徒に、ピアノと声楽の指導をするためなのだ。

進学先によつては、入試に実技課題を出すところもある。楽譜も読めない、ピアノを弾いたことはおろか、触つたことすらないという生徒のために、特別に開講している補習講座を受け持つているのだ。

凛香はテキストにしているバイエルという教則本をペラペラとめくつて、ため息をつく。

まずはト音記号とヘ音記号の違いから説明しなくてはならない。
そして音符の長さや休符の数え方も懇切丁寧に指導する。

あれもこれもと指導内容をシユミレーションするだけで、気が滅入つてくる。

早くこの拷問のような補習講座を終えて、本来のポジションである美術室に帰りたいと願つも、時計の針は少しも動かない。残念ながらまだ数時間、ここに停留しなければならない。

それにしても遅い。指定の時刻を十分も過ぎていているといふのに、生徒が来ないのだ。

凛香は立ち上がり、また窓際に立つて、グラウンドに視線を彷徨わせた。

ちょうど窓の真下をキャンバスを抱えた女子生徒が通りかかる。美術部員だ。

Fの五十号だらうか。いや六十号かもしれない。

小柄な彼女が持つと、キャンバスが一人で歩いているように見える。

秋の学園祭に向けて、着々と準備が進んでいくようだ。

おつと、つまずいた。彼女がよろめき、キャンバスが大きく揺れる。

思わず鍵に手を掛け、窓を開けて彼女の名前を叫びそうになつたが、次に繰り広げられる光景にその手を止めた。

あれは確か、生徒会執行部の男子生徒ではないだらうか。

咄嗟に彼女に近寄り、その大きな手で事もなげにキャンバスをつかむ。

もう一方の手はつまずきかけた彼女の腕をつかんでいた。

大丈夫？ とでも訊ねたのだろうか。男子生徒が彼女を覗き込みながら、心配そうな顔をしている。

するとどうだろ？。ここから見てもほつきひとつわかるくらい、見るみる彼女の顔が赤くなつていいく。

それを見た彼が、彼女をつかんだままの手を慌てて離し、これまた負けないくらい赤い顔をして、目を逸らした。

なんだ、そういうことだったのかと目を細め、ふふんと鼻を鳴らす。

凛香は窓にもたれかかり、今の彼らに重ね合わせるようにして高校時代の自分を思い出していた。

2・イエロー・オーカーのうねり

「鷺野、ホワイト貸してくれ」

「チタニウムならありますけど」

「ああ、それでいい。ついでにイエロー・オーカーも」

「はい……」

凛香は絵の具を渡しながら、後悔の念が次々と込み上げてくる。どうして宇治の隣に陣取ってしまったのだろうと。

授業で使われていない第一美術室の中央のテーブルに、白い布が置かれていた。

自然に見えるよう工夫して皺を作り、その上にビンや果物、古いランプなどが無造作に並べられている。

そしてそれを取り囲むように美術部員がイーゼルを立てて、キャンバスに油絵を描いているのだ。

どうしてもこの位置でランプを描きたかったため、周囲を確認せずに場所取りをしたところ、後になつて取り返しのつかないことをしてしまったと氣付くのがもう遅い。

凛香のすぐ近くに先輩である宇治が絵の具まみれのシャツをまとめて、キャンバスを睨みつけていたのだ。

三年生なのに引退することもなく始終部活に顔を出し、凄まじいスピードで油絵を描いている宇治は、凛香にとって、あまり好ましい先輩ではなかった。

技術面では学ぶところは多いのだが、その性格がどうせ好きになれなかつたのだ。

まあ別に同じ部活の先輩だからと云つて好きにならなければいけない義務があるわけでもなく、適当に距離を取つて差し障りのない後輩を演じていればそれでいい。

それでいいのだが……。

年々縮小ぎみ傾向にある美術部において、少人数であればあるほど、先輩後輩の繋がりも親密になる。

凛香のどこが気に入ったのか、はたまた、ただ単に一風変わった後輩としてちよつかいをかけているだけなのかはわからないが、とにかく頻繁に凛香の領域に侵入してくる宇治がうつとおじくてならなかつた。

一年になつてからはますますひどくなり、凛香の絵の具はほとんどこの隣の男に使われてしまつたと言つても過言ではないくらい、悲惨な状況が続いている。

小学校の時に使つていた水彩絵の具と違つて、油絵の具は値段も張る。

そうそう何度も親にねだるわけにもいかず、もらつたばかりの今月の小遣いも、ついに残り数百円といつところまで来てしまつた。

同じ静物画を描いていれば、必然的に色も同じものを使う場合が多くなる。

チタニウムホワイトもイエローーカーもまだ必要なのに、宇治に貸したが最後、全部使われてしまうのも覚悟しなければならない。

そうすると、いつまでたつても自分の絵が完成しないといつこと

になる。何という悪循環。

宇治の絵の具の消費量は、普通では考えられないほど莫大だ。今も聞こえているが、ペインティングナイフでガシガシペタペタと描く技法は、宇治の手にかかるべ、信じられないほど多量の絵の具を必要とするのだ。

ほほ同じ時間をかけて描いているといふのに、横から見る宇治の作品の絵の具の厚みは尋常じやない。

イエローーカーが山脈のようにうねり、背景にまで見事な表情を生み出す。

嫌いではないのだ。

偶然が生み出す産物なのかもしけないが、宇治の描き出す世界は凛香の魂をも揺さぶる。

ただし。その絵の具のほとんどが凛香から奪つたものであるとうのも事実。

そう考えるだけで凛香のはらわたがぐつぐつと煮えくり返つてくれる。もう我慢もここまでだ。

ガシガシ、ガシガシ。

ペタペタ、ペタペタ……。

そんな凛香の思いなどいつこつに気付かないまま、ひたすら絵の具を盛つて描き続ける宇治に、彼女はついに切れた。

「先輩。私が貸した絵の具、全部返して下さい。耳をそろえて、全部！ 先輩だと思って黙っていたけど、もう我慢出来ない。返せつ

「返してくれないのなら、今までのあなたの油絵の作品、差し押さえるだ。」

他の部員が一斉に凛香に向田してくるにかかわらず黙々としている。

こんな非常識な先輩など、どうなつてもいい。退部も覚悟で今までの不満をすべてぶちまける。

「貸してだと？　たったの一度も返してくれたことがないくせに。よくも言えたものだな。後輩を困らせるのがそんなに楽しいのか。おい、黙つてないでなんとか言え！　あんたの技術のすばらしさに免じて今まで大目に見てきたが、もう我慢ならない。早く、早く返せ！　私の絵の具。全部返せよ、おこ、じりつ！」

ラ行を巻き舌しながら、血漫のロングヘアを振り乱し、鬼の形相で宇治につかみかかる。

歳の近い弟がいる凛香にとつて、取つ組み合ひのけんかなど珍しくもなんともない。

最近暴れてなかつたことも手伝つて、じりじりとばかりに凛香の魂にスイッチに入る。

学年女子一番の高身長を誇る凛香は、男子平均身長の宇治に全く引けを取らない。

襟首をつかまれた宇治は自分の手を下に垂らしたまま、凛香とこらみ合づ形になる。

女子には手出しましないことでも立つのだらつか。

そんなものこの場では何の意味もなさない。凛香はますます復讐の炎を燃え上がらせ、じぶしを振りかざした時だった。

それまでなすがままだった宇治が、こぶしを掲げた凛香の手首を
いとも簡単につかみ、襟首をわしづかみにしているもう一方の手も
ふりほどいたのだ。

「鷺野……。わかった。俺の絵、おまえにやる。あさつての日曜、
画材店に行くから、おまえも来い」

つかまれていた手首が凛香の頭上でふいに自由になる。
田の前の男は何もなかつたかのように再びイーゼルの前に腰を下
ろし、キャンバスに向かつてペインティングナイフを操り始めるの
だ。

他の部員から安堵のため息が漏れる。

凛香も怒りが冷めていくにつれて、今度は反対に恥ずかしさが
募っていく。

そう……。これが凛香の唯一の欠点なのだ。

理不尽なことが起きると、激昂して周りが見えなくなる。おまけ
に言葉遣いも悪い。

小さい頃の遊び相手が弟とその友人たちだったせいもあるのだろうか。

いつしかこうなってしまった自分が時々情けなくなるのだ。

そしてやつて来た日曜日。凛香は宇治に言われた待ち合わせ場所
に出かけて行くのだが、あのけんか以来、まともに口を利いていな
い。

あの日の帰り間際に待ち合わせ場所を告げてきたきり、昨日の土

曜日は全く顔を合わせていないのだ。

凛香はためらいながらも、去年買った少しレースのついたブラウスとチームのスカートという微妙な服装で、五分前には待ち合わせ場所に着くように家を出た。

「画材店ということは、きっと絵の具を買って返してくれるということなのだろう。」

新品の絵の具を貸したわけではないので、あつかましいと思われないかと今度は別の次元で気を遣い落ち着かない。

でもこれも仕方ない。絵の具を返せと言つたのは、自分なのだ。
そして、うそかまことか、絵もくれると言つた。

物につられるわけではないが、今日一日をやり過げれば、宇治とてこれ以上凛香にかまつてこなくなるだらうと思つていた。

一昨日の凛香の失態を見れば、誰だってそんな激情型の女と距離をおじうと思つて決まっている。
そうだ。 そうに違いない。

凛香は自分自身を奮い立たせると、背筋をピンと伸ばして、駅に向かつて颯爽と歩き始めた。

3・恋の第一段階

「よおー。」

駅前の時計の下で、宇治が今までに見せたことのないような笑顔を貼り付けて手を振っていた。

「ど、どいつも……」

こいつもの無愛想で高慢な宇治とはあまりにも違いますため、返事に困った凜香はガラガラもなく俯き、口ひ聿ひをつてしまつ。

凜香の家と高校のちょうど中間にあるこの駅は、特急電車も停車する乗降客の多いところで、老舗デパートをはじめ商店街も常に賑わいを見せている。

ファーストフードの店も一通り揃っているので、学校帰りの学生にも人気のスポットだ。

「まあ、行くぞ」

そう言つて差し出されたのは……。宇治の手だった。

あちこちに絵の具がついている手。

凜香とあまり大きさの変わらない、だけど、じつはしつした手。

彼の手がさも当然のように凜香の手をつかまえる。

「せ、せ、先輩！ なんで。なんでこいつなるんですか？」

繋がつた手を見ておろおろする凜香の疑問などこいつを気にせず、宇治がぐんぐん歩き始める。

凛香は生まれて初めての出来事に田を白黒させていた。

たとえ部活の仲間ではあっても、男の人と待ち合わせをしたのも初めてならば、手を繋いだのも初めてだ。

道行く人が全員こっちを見ているような気がして、顔を上げて歩くのが辛い。

「画材店に入つてからもレジで精算をする時以外は、ずっと手はつながれたままだった。」

うかつにも横を向こうるものなら、親ですら近年そこまで至近距離で見たことが無いといふくらい近くに宇治の顔がある。

基本的に、同じ背格好の一人なものだから、目が合つた時の気まずさといったらない。

出来るだけ横を向かないように首を前向きにしつかりと固定した。

買い物のあと、宇治のお気に入りだという丼物の専門店に連れて行かれ、生まれて初めて親子丼なるものを食べた。

もしかしたら子どもの頃、当時まだ生きていた祖母に作つてもらつたことがあったのかもしれないが、今となつてはそれも定かではない。

母親は父親と共に四六時中働いているため、丼物のように個別に作る料理は基本的に食卓に登場しないのが鷺野家の日常だった。

カレーにおでん、シチューに豚汁。大なべに三日分くらいの分量を作るのが彼女の母親の定番料理なのだ。

でもその店では、調理場を囲むようにして設置してあるカウンタ

ーに客が座るため、作っている過程が丸見えたつた。

親子丼などきっと手間がかかって上級の料理テクニックを必要とするものだとばかり思っていたが、実際はそれほどでもないと知り驚く。

鶏肉とネギを散らした薄くて小さな片手鍋に甘辛醤油の煮汁を入れ、くつぐつ煮立つたら卵でどじ、熱々のご飯に載せて、はい、出来上がりとなる。ものの数分の調理時間だ。

凛香はその工程を穴が開くほど眺め続けたおかげで、親子丼の作り方をおぼろげながらも理解できた。

これなら自分にも出来るかもしない。家事全般は概ね苦手な凛香だが、弟に作ってやればきっと喜ぶだろ?などと思いつきを巡らせる。と言つて頭を下げた。

そして帰り道。今日の目的も果たし、凛香のカバンは返してもらった絵の具の重みですしつと沈み込む。

まだ手は繫がれたままだが、もうこれ以上一緒にいる理由も見つからない今、駅で即刻別れるものだとばかり思つていた凛香は、宇治の予想だにしない行動に首を傾げる。

そのまま駅構内を通り抜け、北側にある道を上がって行こうとするのだ。

「あ、あの。どこに行くんですか? 私、電車に乗らないと帰れな

いんですが……

凛香はさも困ったような顔をして、宇治に訴える。

「まだいいだろ？ セっかくのデートだつていうのに、こんなに早くおまえを帰すわけにはいかないよ。もう少し……一緒にいたいんだ」

凛香は耳を疑うような宇治の言葉にびっくりしそうで、開いた口が塞がらない。

で、で、デート？ この状況は、デートなのか？

凛香は慌てて、本日の自分の行動を振り返つてみる。

宇治と手を繋ぎ、一緒に買い物や食事をして、拳句、別れを惜しまれた……。

これはやつぱり……。間違いない。正真正銘、デートなるものだ。誰がなんと言おうとデートに違いない。

先日見たテレビドラマで主人公が彼女と過ごしていた休日と全く同じ行程だ。

凛香は初めてのデートなるものに、胸をときめかせる。が、しかし。

普通、愛しい相手と一緒にだからこそ胸が高鳴るはずなのに、凛香の脳裏には一切その部分が抜け落ちていた。

純粹にデートそのものの響きに舞い上がっていたのだ。

ドラマでは、デートの締めくくりは、主人公の一人暮らしのマンションに彼女を招き入れる場面になっていた。

ただし、世間話をしただけで、すぐに帰つて行くところまらなり

い設定だつたはずだ。

確か宇治の家は「この近辺だと聞いている。ところども、つまりこの後宇治も、やはりドラマと同じ手段を用いる可能性は……非常に高い。

「なあ、鷺野。今から、俺の家に来ないか？」

ほらほらほら。やつぱりそう来たか。

凛香は自分の妄想が現実のものになつたことに満足感を覚えほくそ笑む。

でも宇治の家に行つてどうするのだろう。家族に紹介されるのだろうか。

それとも誰もいない部屋で、一人きり……。

凛香はよからぬ妄想が脳裏に渦巻くのを必死の思いで打ち消す。ないない。絶対にそんなことなどありえるはずもなく。

一昨日には危うく取つ組み合いのけんかになるところだったのだ。そんな凶暴な女を相手に、宇治が本気になるわけなんかない。

ついにうつかり、「デート」という言葉に騙されるとこだつた。

宇治はきっと深い意味もなく口走つただけなのだろう。だって女同士で遊んでも「デート」と言つたりするじゃないか。

凛香は何も危険はないと判断し、うんと頷いた。

宇治の家に行くことをあっさり了解してしまつたのだ。

「ほんとこいいのか？」

宇治の顔がやたら真剣味を帶びているのが気になるが、だからと

「さつて、今やうやくぱり行きましたとは言えな」。

凛香はその拍子にふと金曜日のもつひとつ約束を思い出していた。

貸した絵の具と引き換えに宇治の作品をもらひついでの約束を。そうか。 そうだったのか。 その絵を渡すため、 家に来いと誘ったに違いない。

凛香はようやく宇治の真意がわかり、 ほつと胸を撫で下ろす。

「なあ、 鷺野。 僕おまえのことが……」

いつたいどんな絵をくれるのだらう。

前回の楽器をモチーフにした静物画は部員の誰もが絶賛した完成度の高い作品だった。

春休みに部活メンバー全員で山にスケッチ旅行に行つた時、 宇治が描いた山ツツジの絵も捨てがたい。

空の蒼とツツジの朱がなんともいえない色氣をかもし出し、 インパクトのある良い絵だった。

「おまえが好きなんだ。 おまえが入学してきた時、 なんて大人っぽい雰囲気の子だらうって思った。 それから田が離せなくなつて……」

いや、 早まつてはだめだ。 今製作中のランプの静物画もとてもいい。

あれが仕上がってからいただくところのもう一案だ。

それよりも、 自宅に行けば、 見たことのない斬新な作品が埋もれている可能性だってある。

なんとこゝチャンス。凛香の田はまだ見ぬ作品に思いを巡らせる、宇治の話など一切聞く耳を持たない。

「鷺野。おまえが俺を見てくれていなのはわかってる。無理強いはしないが、これから先、少しずつでいいから俺を見てくれないか。絵じやなくて、俺自身を見て欲しいんだ」

見て欲しい……。そりゃあ見ますよ。

凛香は宇治の絵がずらりと並んだ夢のような空間を想像して、身悶えそうになる寸前にはっと我に返る。

今、何て言った？　俺自身を見て欲しいだと？　なんだ、それ。

「セーモーの一！　おまえ、ちゃんと聞こてるの？」

凛香は宇治の声に、遠くを彷徨っていた意識を呼び戻される。

「だから、おまえと付き合いたいって言つてんだよ」

「付き合いたい？」の私ど？」

「やうだ。ダメか？」

凛香は想像だにしなかったこの展開に、言葉を詰まらせむ。

「好きだ。俺はおまえが好きなんだ。次はおまえをモーテルに絵を描いて思つてゐる」

「宇治……先輩。あ、あの。私、まだ……」

凛香は繫がれた手をそのままに、じつじつと後ずさる。

「うん。わかつてゐる。今すぐ答えをくれとは言わない。……それとも、他に好きな奴がいるのか？」

凛香がいくら後退しても宇治がにじり寄るので、いつまでたってもその差は一向に変化しない。

これ以上下がると凛香のかかどが民家に侵入してしまつ。

「こ、いません。私、そういうの、全くダメで。でも、先輩。ほんとに私でいいんですか？ 先輩を殴りつとしたんですよ。皆から男つて言われてる」

仕方なくその場に立ち止まつた凛香は、近づかる宇治に顔をそむけるようにして言った。

真実はさつきつと伝えておく必要がある。

「すべてを含めて、おまえがいいんだ」

宇治が凛香の手をぎゅっと握りしめた。そして再び歩き始める。もう何が何だかわからなくなつて凛香の脳内はぐちゃぐちゃに混乱する。

生まれて初めて告白され、拳銃、この野蛮な性格まで好きだと言つてくれる奇麗な宇治を盗み見る。

宇治を田舎でに入部してきた後輩がいるのも言わずと知れた事実だが、改めてじつへりと見てみると、それなりに整つた顔立ちをしているとは思ひ。

でも、たつた今告白されたばかりだところに、宇治自身からと

きめきを見出すことは出来なかつた。

この人と一緒にいて幸せなのかと自分自身に問えば。もちろん、それはノーだつた。

いや、だからと言って不幸というわけでもなく、そして別段嫌でもない。

つまり、どうでもいい相手ということだ。

でも自分を好きだと言ってくれる人に、これから先も出会えると
いう保障はどこにもない。このチャンスは大切にした方がいいの
かもしけれない。

凛香は複雑な思いを胸に、宇治に手を引かれ大きな門構えのある
邸宅に入つて行つた。

4・男つて……

凜香は、脇目も振らず、駅に向かって走っていた。
さつき宇治に告白された場所に差し掛かると、よりいつそうスピードを上げてそこを駆け抜け、唇をかみしめた。血の味がするほどに。

たった今、逃げるように飛び出してきた宇治の家は、その立派な門構えに全く見劣りしない莊厳な和風建築の屋敷だった。庭園と呼ぶにふさわしい手入れの行き届いた庭にははすの葉が浮かぶ池があり、色とりどりの鯉が優雅に尾ひれを揺らめかせていた。

家族は誰もいなかつた。兄弟は社会人すでに家を出て暮しているし、両親は親戚のところに出かけていると宇治が言つた。

凜香が通されたのは二階。一間続きの和室が宇治の部屋だった。明るいその部屋には片側の壁一面に絵が立てかけてあり、描きかけのものも含めると、優に五十枚以上はあつたと思う。

どれでもいいぞ、おまえの好きなのを選べと言つて、重なつた絵をずらして見やすく広げる。

そして、どこかで見たことがあるような裸婦の絵に目を留める。世界的にも有名な画家の模写だ。

いつもの大量に絵の具を盛り上げる技法はなりを潜め、印象派獨特の柔らかいタッチをそのまま忠実に模写しているのだ。

「こういう描き方もできるなんて、知らなかつた。

凜香はその絵の筆運びや、色の置き方に目を奪われる。

そして同じようなタッチの絵を探すべく、部屋の隅に隠すように置いてあつた一枚に手を伸ばした。

重なつた前の絵の後方から全体が現れた瞬間、凛香は言葉を失つた。

そこにいた絵筆を握る女性は……。

見慣れた制服をまとい、キャンバスに向かうその人物は、紛れもなく凛香自身だつたのだ。

でも、それだけはだめだ、他のにしてくれと言つて、宇治の手によつてその絵は元の場所に押し戻される。

そして凛香に向き合つた宇治がとんでもないことを口にするのだ。ブラウスのボタンに手を掛けながら……。

次の瞬間、凛香の振り上げた右手が彼の頬を打ち、即座にカバンを手すると一階から脱兎のごとく駆け下りる。庭を通り抜けた時、背中で鯉が跳ねる音を聞いた。

宇治の目が、欲情する男のそれだと本能的に感じ取り、身の危険を感じた凛香は、脳の指令を待たずして行動に出たというわけだ。

おまえのヌードが描きたい。だから、協力してくれないか……。

宇治のその時のじつとりとした視線と震えるような声が何度もフラッショバックする。

凛香は宇治の要望を拒絶したことは決して間違つていなかつたと自分自身に何度も言い聞かせた。

次の日、何事もなかつたかのような顔をして部室に現れた宇治に、

きつぱりと交際できないと断りを入れたのは、当然の成り行きだつた。

そんな苦い思い出のある高校時代だつたが、今となつてはそれもいい経験だつたと思えるようになつた。

何もいきなり殴らなくとも、それは出来ません、服を着たままでならモデルになりますとはつきり言えばよかつたのかかもしれない。宇治は決して無理強いをするような男ではなかつたのだから。

それにしても……。絵をもらひそこねたことだけは失敗だつたと、凛香は短気で世間知らずの自分を悔やむのだった。

窓の下を見ると、さつきまでいたあの二人がもうどこにもいないことに気付く。

凛香はあわてて、ちょいびしユーマンの肖像画の真上にある時計に目をやつた。

あれから十五分も経つてゐるではないか。なのに、次に約束している生徒が来ないのはどういうわけなのだろう。

凛香のイライラはピークに達してくる。

美術教師なのに、どうしてこんな畠違ひの仕事に首を突つ込まなければならぬのだろうと、自分の置かれた立場を諒しく思つ。

なぜ最初に、ピアノの指導など出来ないと断らなかつたのだろう。凛香の顔が後悔の念で次第に歪んでくる。他人の目にどう映るうがかまわぬが、とにかく音楽室に拘留されるようになつた理由を考えるだけで、頭痛が起るくらい不快になるのだ。

それもこれもすべて生徒のためだと思つことで、なんとか自分を騙し今まで続けて来たのだが、そろそろ限界に近付いている。

凛香がこの仕事を任せられた原因は……。

彼女の最も隠しておきたい過去の汚点をしつかり握りこんで、脅迫まがいにそれをちらつかせ、俺様を気取る男。つまり、この音楽室の主でもある、男性教諭の仕業なのだ。

凛香は子どもの頃に、数年間ピアノを習つたことがあったが、基本基本とうるさいピアノ教師が、いつまでたつてもあこがれのショーマンやショパンの曲を弾かせてくれなかつたため、積み重なつた恨みが爆発して、暴言を吐いてレッスンを辞めたといつ苦々しい過去がある。

今になれば基礎の大切さも理解できる。生徒としてあるまじき態度を取つてしまつたことも反省している。

ただし、子どものやる氣を頭になしに否定するその指導法には今でも納得がいかない。

その後凛香は一度とびの指導者にもつくりとはなく、自分で曲を紐解き、ショーマンもショパンもそれなりに弾けるようになつた。あくまでも趣味の域を出ない程度のレベルでしかないが、なのに、あこつときたら……。

これが凛香の隠しておきたい過去の汚点……ではない。

こんな物、今まで彼女が巻き起こしてきた数々の珍事の中では、ねずみの耳垢ほどの出来事でしかない。

一向に生徒は姿を見せない。やはり凛香の指導が厳しすぎるのだらうか。

凛香は自分の過去の経験を生かし、生徒の意思は十分に尊重して指導してきたつもりだった。

ところが残念なことに、昨日も一人、脱落者が出てしまったのだ。家に鍵盤楽器がない場合、補習講座が開かれていない時間帯に音楽室と準備室のピアノやキー・ボードを自由に使ってもいいと言つているにもかかわらず、全く課題を練習してこない生徒に注意したところ、もう辞めますと言つてあつといふ間にここから出て行つたのだ。

追いかけて引き止めてもだめだった。

結果、こここの主には、辞めたのはさもおまえのせいだと言わんばかりに非難され、生徒の担任にも文句を言われと散々な目に遭つた。本日はもう店じまいだ。凛香がピアノの蓋をパタンと閉めたと同時に、ドアをノックする音が聞こえた。

「やつと、来たか……。入れつ！」

凛香のよく通るアルトがドアに向かつて放たれる。

やや顔を引き攣らせた人のよそそうな男子生徒が音楽室のドアを開けて立ち止まり、遅れてしませんと言つて頭を下げた。

凛香は仁王立ちになり、いつもくせでポキポキと指を鳴らし気合を入れ直す。

「では、弾いてもらおうか」

バイエルを抱えて緊張のあまり萎縮している生徒が、凛香の隣で

ますます小さく身体をすばめた。

5・たぐらみ

遅刻して来た生徒の指導がどうにか終わり、初めて両手でそれらしく弾けた喜びを全身で表して、満足そうに帰つて行つた。

生徒の家にピアノはなく、弟の鍵盤ハーモニカで練習して来たと言つて恥ずかしそうに頭を搔いていた。
ピアノなど弾いたこともなかつた彼は将来小学校の教師になりたい一心で、この補習講座を受けている。

今日もこの後、友人の家のピアノを借りて練習するのだと息巻く。そして、子どもの好きなアニメソングを両手でカツコよく弾けるようになるのが夢だと田を輝かせていた。

次の生徒が来るまでに少し間がある。今の中に昼食を済ませようと、コンビニのビニール袋からおにぎりを取り出した。
これが本日初めての食事だ。朝もおにぎりに家を飛び出してきたので、水以外は何も口にしていない。

凜香は高菜のおにぎりをほおばりながら、この補習講座を引き受けた発端となつた先日の教職員の飲み会のことを思い出していた。

毎月千円ずつ積み立てた会費で、学期末ごとに学校全体の職員の親睦を兼ねての飲み会がある。

凜香はあまり気の進まないその会に、毎回仕方なく参加していた。先日もその状況は変わらず、積み立てた分の元を取るために宴会場に席を連ねていたのだ。

運ばれてくる料理と飲み放題のプランから推測するに、追加徵収金は一千円くらいだらうと脳内電卓をたたいた凜香は、まざまざの品揃えに概ね及第点を付ける。

アルコールは控えめにして、とにかく食べることに徹すると決めた瞬間から、黙々と箸を動かし始めた。

うわべだけの付き合ひならしない方がましだと常田頃からあからさまに態度で示している凜香には、他の皆も心得た物で、誰も彼女に深入りしてこない。

おかげで、これ幸いと、どんどん食事が進む。

そこまでは順調だった。酢の物も、韓国風の和え物も、和牛ミニステーキも……。どんどん凜香の胃に収まっていく。

あと數十分もすればこの場から解放されるのだからもう少しの辛抱だと自分に言い聞かせ、この春転勤してきたばかりのママさん先生が凜香の隣の席で自分の子どもの自慢話を延々続けるのも、黙つて耐え忍んでいたというのに。

東高きつてのイケメン音楽教師である鶴本広海が凜香に不幸をもたらしたのは、その直後だった……。

「盛り上がりっておりますといふ、大変恐縮なのですが。少しお時間をいただけますでしょうか」

長身の広海が宴会場の端の席からぬつと立ち上がり、田頃女子生徒たちが目をハートマークにして叫びといふの、ス、テ、キ、なテ

ナー ボイスを惜しげもなく撒き散らしてくれた。

ただし凜香にとってはそれも迷惑な騒音でしかない。

凜香はこの時すでに広海の魂胆に気付いていた。

というのも、三日前に学校の廊下ですれ違った時に、おまえどうせ暇だろ？ 補習講座を手伝え……と上から田線で言っていたのだ。

もううん、即断つた。ざるつと睨みつけて言つてやつたのだ。

「いーやーだー」「と。

そこで窮地に立たされた広海が、今こゝで全職員を前にそのことを頼もうと立ち上がったに違いない。

「鶴本先生、あのことでしきうか？ なにひびき。皆さんがそろつていろいろいい機会なので、是非、協力者を募つてみて下さい」

教頭が彼を擁護してそんなことを言つ。何かにつけて教頭は彼の肩を持つのだ。

凜香はそのことも以前から気に入らなかつた。

「食事を続けながら聞いてください。実は、補習講座の件でお願いがありまして……。ピアノも声楽も初心者なのに、教育系の学部や学科に進学をのぞんでいる生徒が今年は大変多いのです。どなたかピアノや声楽の経験者はいらっしゃいませんでしょうか。受験対策の補習講座を手伝つていただければありがたいのですが……」

手伝つていただければありがたいのですが……と広海があたりを見渡して、視線が止まつたところがたまたま凜香だったらしい。

いや、たまたまというのは皆の勘違いで、凛香にはそれが偶然でも何でもない、単なる嫌がらせだということはとっくにわかっていたのだが。

ふん、誰が手伝つてなんかやるもんか、鶴本広海よ、苦しむがい、もつともつと苦しめ、苦しむんだ……と俯いたまま呪いの文句をぶつぶつと繰り返していた凛香は、まさか自分に白羽の矢が当たつたなどと思ひもせずに、ひたすら広海の不幸を祈つていたのだ。

何やら良からぬ空気を察して顔を上げたときには、皆にねぎらいの言葉を掛けられ、ついでに励ますように肩までポンポンと叩かれる始末だった。

「夏休み中で大変だけど、先生、独身で若いんだし。がんばってねママさん先生がにっこりしながら言った。独身で若い？ 大きなお世話だ。

「鷺野先生、いやならそつおつしゃつて下さいね。なんなら私が替わりましょうか？」

社会科教諭の里見栄子がそんなことを言つたような気がするのだが……。

若くて美人で、男子生徒にも大人気の栄子であるが、広海の氣を引ひつと日々アタックを繰り返していることは、誰もが知っていた。

せつかく彼女がそう言つてくれたにもかかわらず、気が動転していた凛香は、自分の置かれてる状況が即座に飲み込めず、つかつにも栄子の申し出を聞き流してしまったのだ。

そして、まるで水と油、永遠の芸術教科のライバルでもある音楽室なんぞに、美術教師である凜香が入り浸るはめに陥る。

講師も含めると百人近くもいる東高教師軍団であっても、まだ女性教師の割合が少ない高等学校といつ職場のことだ。音楽教師以外で、ピアノと声楽を指導できる人材がそうそう何人もいるはずもなく。

仮にいたとしても、夏休みとはいって、膨大な仕事を個々に抱えている現状では、はい、私がやりますと自分から名乗り出る殊勝な教師がいるとも思えない。

なのに……。何あの時、じゃあお願ひしますと栄子に言わなかつたのかと、凜香は一生の不覚を悔やむ。

栄子も栄子だ。広海と組んでやりたかったのなら、さうと手を上げて自分からやりますと言えばいいのだ。

というか、広海が栄子を嫌っているのは凜香も薄々気付いていたので、立候補される前に凜香を盾にして栄子を阻止したとも考えられる。

「鷺野先生は体育館で校歌の一斉指導があつた時、とてもきれいな声で歌つておられて、ピアノの経験もあると伺っています。今回手伝つてもらえて、本当に助かります」

勝ち誇ったような顔を凜香に向け、口先だけへりくだる広海の態度に凜香はもう我慢ならない。

校歌の一斉指導の時がどうたらこうたらなどと、そんな遠まわしな言い方をするくらいならならば、こっそることをこじこじる皆

にばかりしてくれた方が何倍もましなのだと開き直る。

そうすれば同罪だつた広海の立場も悪くなるはずだ。

生徒からの信頼も急降下間違いなし。広海、あんたの人気も、もうここまでだな、ふつふつふつ……。

凛香はこの強力な武器を見方に、徹底的に広海を打ちのめしてやるつと息巻いた。

ところが周りの空気が、凛香の意図しない方向に流れしていくのがひしひしと伝わってくる。

職員全員が笑顔でこっちを見ている。

鷺野先生、引き受けくださつてありがとつ、あなただけが頼りですといつ懇願の眼差しが凛香を取り巻く。

「あつ、いや……」

ただ一言、出来ませんと断れば済むことなのに、この状況では、それだけのことすら言えない。凛香に焦りの色が見え始めた。

「そ、その、私には、む、む……」

無理です、とやつと言つたはずなのに、時すでに遅し。教頭が凛香の言葉を打ち消すよつとして、満面の笑みを凛香に向けて言つた。

「鷺野先生。ありがとうございます。もし、どなたもいらっしゃらなければ、この私が何かお手伝いしなければと思つていたのですよ。いろいろ仕事が重なつて大変だとは思いますが、生徒のためにも、そして鶴本先生のためにも、どうかよろしくお願ひいたします」

「は、はー」

やられた。

教頭にも逃げ道を奪われた凜香は、またまた広海の隣になまつてしまつたのだ。

6・フローラルなアイドル

凜香は透明フィルムの包みの中に三分の一ほど残っている高菜のおにぎりを、いっさきに口に押し込んだ。

のんびりはしていられない。隣の音楽準備室からは、さつきから止むことなく、ソナチネのメロディーが流れてくる。
ピアノの経験はあるが、高学年になつて辞めたと言っていた生徒だろうか。

つつかかりながらも次第に曲が仕上がりしていくところが憎いではないか。

あれはきっと生徒本人の努力の賜物に違いない。
広海の指導力がそうさせたなどとは絶対に思いたくない。あんなやつに負けてたまるか……。

凜香はおにぎりの無くなつた包みをコンビニのビニール袋の中にねじ込み、両手をパンパンとはたいて気合を入れ直す。

次の生徒は幼児教育科に進学予定の女子生徒だ。

実技試験項目に初見視唱というのがあり、初めて渡された八小節の曲を、楽譜を見ただけで瞬時に歌うというテストを課されるのだ。
広海が過去の入試で出題された曲を分析して、受験対策用にわざわざ作曲したという大層な名田の楽譜をコピーし忘れていたのに気が付き、あわてて職員室に向う。

そういうやつなのだ。資料の準備すら任せなのだから……。
いったい何様のつもりなのだろう。

鷺野先生、これが本田の資料です。あなたの分と生徒の分をきちんと準備していますのでどうぞお使い下せ……へりこ、普通一般常識のある教師なら、言つだらう。

凛香は隣の準備室のドアを蹴りそうになるのをどうにか抑えて、苦々しい面持ちで廊下に出た。

なんとこう暑さだらけ。もわっとした空気が一瞬で凛香の周りを取り囲む。

職員室に行くには、途中で渡り廊下を通り別の建物の一階まで下りなければならない。

今の今までやうつとしていたシャツの下の首周りに、汗が噴出す。ありえない暑さに田まごを覚えながらも、階段を足早に駆け下りる。

生徒に廊下階段は走るなと指導している都合上、これはあくまでも足早であつて、決して走つてなどいな」と言い訳まがいに自分自身に言い聞かせながら、何食わぬ顔で職員室に向かった。

「あっ、鷺野せんせー！」

東高のアイドル教師、里見栄子だ。職員室のすぐそばで、凛香の横をすれ違った彼女が甘ったるい声で叫んだ。

「里見先生？ 何か？」

凛香は呼び止めた理由がさっぱりわからず、怪訝そうに栄子を睨む。

「鷺野先生つたら、そんな怖い顔なさらないで下せこよ。いやだ。ただ」挨拶しただけなのに

「わへ……。じゃあ」

なんと紛らわしいやつなんだろ。凛香はただただあきれで、言い返す気力もない。職員室のドアに手を掛け、じいじがひたひた立ち去るひとだけを考えて顔を背けた。

「鷺野せんせー。本田の補講座、お疲れ様です。では失礼しまーす」

そう言つて花柄のワンピースを翻し、手を振る。

なんだ？ 今のは、それにしてもうつとおじいことこの上ない。とつとと洩えろと言いたいところを、凛香はぐっと堪えた。

それにお疲れ様とか、勘違いも甚だしい。仕事はまだこれからだとこつこのこと。

「いや、本田の補講座はまだ終わつたわけじゃなくて。『ペーが済んだら、また音楽室にもどり……』

つておー！ 待てよ、里見栄子め！

栄子は凛香の話を最後まで聞かずに、スキップでもしちゃうな勢いで、ぐんぐん廊下に向ひついで遠ざかっていくではないか。

凛香は白い長袖のシャツを肘まで捲り上げた手を額にかざし、やつてられないというように首を横に振る。

廊下には、栄子が残して行ったフローラルなトワレの香りがほんのり漂っていた。

まあ、この程度なら許せるか……と、次第に遠のく栄子の後姿をぼんやりと見送っていた。

「ピー」を終え音楽室にもどり、廊下を突っ切ったところでハタと立ち止まつた。

凛香の視線の先にはジュースの自動販売機がこれ見よがしに待ち構えていた。

ブーンという機械音を低く唸らせながら、暑さにひだる凛香をいいでおいでと呼び込むのだ。

ちょうど喉も渇いているし、何か飲み物を買って行こうと、見本の缶ジュースやペットボトル入りの飲料の品定めを始めた。

いつもなら迷わずウーロン茶のボタンを押すのだが、さつきからあのいやな人物の顔がちらついて仕方のない凛香の人差し指は、押す位置を定められないまま、空を彷徨つていた。

すべての補習が終わるまで、隣の準備室にいる広海と顔を合わすことはないのだが、自分だけ飲み物を買って行くことに、なぜか引け目を感じていたのだ。

突然、何かを取りに来たと言つて、凛香のところに立ち入つて来る可能性だつてある。

こつこつちにやつてくるとも限らないのだ。その時に自分が冷

たい飲み物を飲んでいるのを知られたな……。

広海のことだ。皮肉のひとつも残していくだろ。

これ以上あいつの勝ちポイントを加算するのだけは何があつても阻止したい。

凜香は迷いに迷った。かと言つて、仏心を出した口には、相手はますますつけあがるに決まつていて。

でもこうなつたら仕方がない。コーラの五百ミリリットル入りサービス缶を選び、ボタンを押した。

ガン、「ドロドロ」と派手な音を立てて、缶が転がり落ちていく。

広海は無一のコーラ好きだ。学生時代の冷蔵庫は他の食材ではなくても、コーラだけは切らせたことがなかつたつけ……などと思い出し、慌てて記憶の倉庫から余計な過去のデータを追い払う。

凜香もジユースを選ぶなりコーラと決めている。

あいつのことは一切関係ないのだと、思い浮かべたことを全て打ち消すように頭をぶんぶん振った。

1Jのサイズなら、準備室に常備してある湯飲み茶碗に少しだけ分けて入れてやればいい。

あの茶碗の内容量はかなり少なめだったが、一杯も入れてやれば十分だろう。

凜香はそんな自分の不毛な親切心にどこか納得しないまま、よく冷えた缶を片手に、わざわざ下りてきたばかりの道筋を逆方向に辿つて音楽室を目指した。

ひんやりと心地よい冷氣がこぼれ出る音楽室の重厚なドアを開け、ピアノの上にコピーしたての資料を置く。

どうやら、隣のピアノの音も今は聞こえない。休憩タイムに入つ

たのだね。

凜香は音楽室とドアひとつで繋がっている隣の準備室をワンノックすると、早くコーラを飲みたい一心で、広海の返事を待たずしてパンと口を開け放ち、いつものように口走ってしまったのだ。

「広海。コーラ、買つて來たぞ。感謝しりよ……えつ？ はつ？ な、何？」

そこには、さつき吸い込んだばかりのフローラルな香りがあたり一面に漂い、クルンとカールしたマスカラたつぱりの田元を見開いて手にウーロン茶のペットボトルを持った栄子が、広海の前に立っていたのだ。

「や、や、や、鷺野先生！ び、びつして……？ なんで、まだ、そんなといひこころんですか？ もう、補習講座は終わつたんじや……」

栄子は色を失くした唇をわなわなと震わせ、敵意を露わにした眼差しを凜香に向けた。

7・過去の小さな出来事

「私の仕事は、まだ終わってないんだが……」

凛香は驚きのあまり呆然としている栄子を少し氣の毒に思いながら、現況を伝える。
そして、どのようにして彼女をなだめようかと咄嗟に考えを巡らせた。

この状況から察するに、このフローラルな香りに包まれたアイドル教師は、広海にウーロン茶の差し入れを持ってきたと思われる。それに、凛香がもうここには戻らないと勝手に決め付けて、胸を躍らせて愛する人のもとにやって来たのだろう。

凛香はよく冷えたコーラ缶を持ったまま器用に腕を組み、右足を一步、前に踏み出した。
すると同時に栄子が一步後ずさる。また一步踏み出すと、これまで一步下がる。

これではまるで、栄子が危険極まりない凶暴な生き物から身を守るために遠ざかっていくような光景に見えなくもない。

「あ、あの。それに、今……。鷺野先生が鶴本先生のこと、ひ、ひ、ひろみつて、呼び捨てになさつて……」

栄子が今にも泣き出しそうな顔をして言った。

「それは、つまり……」

さすがにこの件に關しては、凛香も口にしむしかなかつた。

東高に転勤後は、一度だつて人前でボロを出したことはなかつた。なのに、なんでまた、栄子の前で広海と呼んでしまつたのだろう。さつきすれ違つた時の栄子の浮かれた様子を見れば、彼女がここに来ていることくらい、すぐに予想できたはずなのと自分の浅はかさを悔やまずにはいられない。

凜香は、なんとかこの場をしのがなければと思つもの、焦るばかりでいい案が浮かばない。

勢い余つて、つい呼び捨てにしてしまつたとか、学生時代留学した経験があり、ファーストネームで呼び合う癖がまだ抜けないとか

……。

あれこれ言い訳を考えてみたが、どれもいまいち説得力に欠ける。

凜香は、足を組んで悠々とピアノの前に座つている男に、この状況をどうにかしろと田配せをする。

そもそもこいつがこの部屋にホイホイと栄子を入れたりするからこんなことになるのだ。

それともついに根負けして、この若くてかわいいアイドル教師の気持を受け入れることにしたとでもいうのだろうか。

だとすれば、凜香には反論する権利はないし、反論する気もない。

そうなつてくれれば、かえってせいせいするくらいだ。

そうとわかれば、すぐにでもどうぞお幸せにと言つて、ひとつとこじから退散してやるといつのこと。

そんなどころで悠長に高みの見物などしていないで、手つ取り早くこの場を收拾して欲しい。

「のままでは、彼もいろいろと不都合なはずだ。

なのに……。

当の広海はいたつてのん気で、あらうことか、まるで恋人を見る
よつな温かい眼差しを凜香に向け、何か言いたげに口元を緩める。

しまつた……。しいつにすがつたのは、やはり間違いだつたのだ
ろうか？

広海の不可解な態度に、なぜか凜香の心拍数がいつきに上昇する。
「凜香……。もう隠さなくともいいんじゃないのか？ もつと自
然に振舞えればいい。今まで誰にも気付かれなかつた方がまさしく奇
跡だつたんだよ」

ここでそれはないだらうと、凜香の焦りが勢いを増す。

予想外にソフトな甘い声を響かせて凜香と呼びかけるのは、彼を
想う栄子の前ではルール違反だ。

ダブルパンチを受けた栄子は、顔面蒼白になつて、視線を彷徨わ
せる。

「ひ、ひろ……じゃなくて、鶴本先生。おかしいですね。あなたが
何を言いたいのか、私にはさつぱりわかりませんが……」

ここはしらを切り通すに限る。この男がここまで女心がわからな
い奴だつたとは、聞いて呆れる。
栄子の身になつてみると声を大にして言いたい。

「おまえも相当往生際が悪いな。いい機会じゃないか。里見先生に
俺たちのことときちんと説明するチャンスだと思つけど？」

チャンス？ 今さら何を説明すると言つのだらう。凜香はますま

す理解に苦しむ。

実は私たち、いつそつと職場恋愛中なんです……と頬を染めて言えとでも？

だが残念ながら、過去も現在も広海とは恋愛関係になつたためしがない。

といふか、少なくとも凛香自身はそつ思つていた。

ならば、あのことを言ふとでも？ 凛香が思ひ当たることと言ふば、やはりあれしかない。でも……。そこまで暴露する必要があるのでないつか。

「鶴本先生。お言葉ですが、そのような思わせぶりなことをおつしやると、ますます里見先生が、私たちのことを誤解するじゃないですか」

「だから全部言つちまねつって、言つてるんだ。誰よつもお互いのことによく知つているはずの俺たちが、このままではいけない。いいか、凛香。おまえも腹をくくれ」

座つたままの広海が有無を言わせぬ目で凛香を見上げ、そしてゆっくりと栄子に視線を移す。

「里見先生、今まで黙つてて悪かつたけど、この人と俺、実は……ふつ、ふがふが……」「、いらっしゃ、凛香、やめろー」

「だ、黙れ！ 広海。それ以上、何も言つくな！」

とにかく広海の声を塞ぐのが先決だ。何を言おうとしたのか気になりながらも、強引に押さえ込んだ。

「つ、冷たいっ！　おまえ、何するんだ！」

凜香は座つてこむ広海の前に立ちふさがり、片手で口を押さえつけ、もう片方の手で持っていたコーラ缶を、彼の首の後ろ側からボタンダウンのシャツのすき間にぐいっと押し込んだのだ。

「あやーーーっ！」

栄子が両手を口元に当てて、叫んだ。その瞬間、彼女の手からウーロン茶のペットボトルが滑り落ち、鈍い音を立てて床に落ちた。

「ひ、ひどい……。鷺野先生、やめて下さいー。それに、鶴本先生まで、鷺野先生のことを凜香だなんて呼び捨てにして……。鷺野先生。どうして今まで口を騙していたんですか？　そんなこと、何一つ言ってくれなかつたじやないですか！　実は鶴本先生とこつそり付き合つてゐるだなんて。あんまりです。うわあああーーーっ！」

栄子がなりふり構わず叫びながら音楽準備室を出て行つた。

おこおこ、勘弁してくれよ。ここは学校だぞ。子供のけんかでもあるまいし……などと言つてゐる場合ではない。

栄子が今とんでもないことを言つた。凜香が広海と付き合つているなどと。

今すぐに栄子を摑まえて、それだけは絶対に違つと訂正しなければならない。

凜香はすぐさま踵を返し、栄子の後を追いかけようと走り出した。すると、広海が彼女の腕をつかみ、待てと言つて引き止めるのだ。

「頼む。先に、背中の缶を取ってくれー。せつかく里見先生の誘い

を断るいいチャンスだと思つたのに、ぶち壊しやがつて……。お、おい。待てよ、待つてくれ！ 凜香つ！」

凛香は何のためらいもなく、すがりつく広海の腕を振り払つた。栄子は職員室に下りていったのだろうか。廊下に飛び出したとたん、これまたタイミングがいいのか悪いのか、補習講座にやつて来た生徒とぶつかつた。

目を白黒させている生徒に、ちょっと待つてくれとだけ言い残し、猛スピードで、栄子を追つて駆け出した。

職員室に着いた時には、すでに栄子の姿はなかつた。

おまけに裏門の横にある駐車場からは、彼女の愛用の赤いセダンも消えていた。

同じように廊下の窓から駐車場を見ていた教頭が、笑顔で凛香に話しかけてきた。

「鷺野先生、大変でしたね。里見先生はまだ若い。なかなか自分をコントロールできないんですね」

一見頼りなさそうな教頭だが、実は職員一人一人をよく見ているツワモノだつたりする。さすが管理職だ。

すべてを見とおされていたのかと思うと少し恥ずかしいが、凛香はええと曖昧に頷き、教頭の言葉を待つた。

「彼女は鶴本先生を慕つてているようですね？」でも鶴本君はあのとおり、あれほどの男前なのに、彼女には無関心ときている。いや、彼女に限らず、女性にはあまり興味がないようで。誰か、思い続け

てこる人でもいるのでしょうか?」

「あ、いや、それはどうでしょ、うん……」

広海のことなど今となつては何も知りようがない凜香は、教頭の言葉に困惑してしまった。

「あははは。すみません、あなたを困らせようと思つたわけではないのですよ。そうだ、確か鷺野先生は、鶴本君と同じ教育大出身で、同期生だったはずですね。まあ里見先生もあそこの中卒業生だから、今後も先輩として、里見さんのことよろしく頼みますよ」

「あ、はい……」

教頭の言つとおり、広海とは大学の同期で、栄子は後輩になる。つまりは、職員間であまり口喧嘩を起しきれず、これからは穏便に頼むよ、ということなのだろう。

結局、栄子に会えなかつた凜香は、重い足取りで音楽室に戻り、もやもやした気持を抱えたまま生徒の指導に当たつた。

その日の夜、凜香はなかなか寝付けなかつた。

昼間の学校での出来事が脳裏をよぎり、目が冴えてしまつたのだ。そしてあの時、広海がいつたい何を言いかけたのか、それが気になつて仕方ない。

あのことだらうか。思い出すだけでも嫌になる過去の……あの出来事。

今さら蒸し返してビビりようつところのだらう。誰に迷惑をかけた

わけでもない。

ただ若氣の至りで手を染めた、大胆なあの活動のことをいつまでも言ひつづけだつたのだろうか。

じゃあ他に何がある？ 栄子の誘いを断るチャンスだつたとも言つていた。

さつとトーークでも誘われたのだろう。それを断るために、何かを言い出せうとしていたのだ。

ところが、あの出来事を暴露することが断る理由に繋がるとはとても思えない。

あれは、ただの恥ぢらじでしかないはずだ。

凛香は考へても考へても答えが見つけられない自分に苛立ちを覚える。

広海の口を押さえ込んだ時、手のひらに感じた彼の脣の動きを必死で解読しようと記憶を辿つてみると、探偵でもない限り、凛香にはわかるはずもなく。

が、しかし。凛香は、もうひとつ思に出したことがあった。

これもまた、過去の珍事のひとつなのだが、凛香にひとつは、うわさの耳垢程度の小さな出来事に過ぎないある事。

別に深い意味はなこと思つていて、口頭は堅く封印している、過去の……出来事。

一度だけ交わした、広海との……。

広海との口づけを……。

8・運命は動き始める

「職員のみなさん、おはようございます。ただいまより、職員会議を始めさせていただきます。本日の議題は、一学期の行事予定と二年生の進路指導についてです。では、まず初めに校長より……」

凜香は寝不足の日をしょぼしょぼさせながら、職員室の自分の席で幾度となく襲ってくる眠気と戦っていた。

少しでも気を緩めると、まぶたが閉じてしまい、手の甲をつねって、どつにか意識を保ち続ける。

進行役の教頭が、この暑さの中いつもと変わらぬ涼しい顔で、淡々と議事を進めていく。

校長がのつそりと立ち上がり、うおっほんと物々しい咳払いをした。

いつどんな時でも、校長の話とこいつもは退屈で長いと相場が決まっている。

あぐびを我慢するせいで、さっきから鼓膜のあたりがぼわんとして変な感じだ。

斜め向かいのママさん先生も眠そうだ。子どもの夜泣きがまだ続いているのだろうか。

栄子はといえば……。朝から田舎わざとしない。完全無視といつたところだ。

おつと、こんなことに気を取られていていい場合ではない。とにかく今は校長の話に集中するのが先決だ。

凜香は邪念を振り払つて大きく深呼吸をして、眉間に力を込めた。

「……というわけで、えー、職員のみなさんには、夏休みの間も、まあ、補習講座及び、受験対策授業を開いて頂き、「ご苦労をかけておるわけですが、あー、それもこれも、全ての生徒諸君が、えー、将来の目標を実現するための手助けということで、『ご了解いただきたいと、まあ、そう思つわけでありまして……』

額に流れる汗を拭きながら、校長が独特の聞延びした口調で職員にねぎらいの言葉をかける。

三年生にとつては、この夏が大きな山場になる。

学校の補習だけではなく、塾や予備校などにも通いながら受験に向き合っている生徒も多い。

幸い、凜香も広海も今年度は三年生の担任ではないので、そいつた面ではやや気楽な立場ではある。

しかし音楽室で補習講座を受けているメンバーや顧問をしている美術部の生徒の顔を思い浮かべると、やはり他人事ではなくなってしまう。

順調にこの夏を乗り切つて、来春にはそれぞれが納得のいく結果を出せるようになると、祈らずにはいられない。

今から十数年前になるだろうか。

凜香も東高の生徒と同じように、十八の冬に大学受験を経験した。高校では美術部に所属していたにもかかわらず、周りが芸大だ美大だと騒ぎ始めてやつと将来を考え始めたといふくらい、のんびりとした受験生だった。

その上、美術に関して技術的に秀でているわけでもなく、美大に進学するには、不安要素がありすぎた。

他の同級生たちは、高一のときからすでに目標を定め、デッサンや油絵の受験専門教室に通っていたり、目指す大学の先輩達に指導を受けたりしていたのだ。

何も準備をしていなかつた凛香は、気付いた時にはもう手遅れ。他に何もとりえがないというのに、芸大はもちろん美大も進学は無理だとあきらめざるを得ない状況に追い込まれていたのだ。

ショパンやショーマンのメロディーに心打たれて小さい頃に習っていたピアノも、途中で辞めてしまつて以来、音楽そのものに素直な気持ちで向き合えなくなつていた。

そう考へると、やはり凛香には絵を描くことしか残つていなかつた。

でも、美大への受験には間に合わない。その時は百パーセント、未来への道はすべて閉ざされたように見えたのだが。

浪人も覚悟で担任に進路相談を持ちかけたところ、教育大の美術専攻はどうですかと新たな方向を導き出してくれたのだ。
目からうろこだった。配点のウエートが絵の点数ばかりでなく一般教科の成績にも重きをおくため、凛香のような受験生に有利だという。

純粹に絵だけを描いてそれを職業として食べていけるのは、ごく一握りの人たちだけだ。

働くかざるもの食うべからずをポリシーとして自営業を営む凛香の両親も、美術教師ならば好きな絵に関わりながら仕事も出来て、一石二鳥だと手放しで喜んでくれた。

凛香の人生が明るく開けた瞬間でもあった。

そして見事、教育大に合格して、電車で片道一時間の地獄の遠距離通学が始まったのはいいが、入ったばかりのサークルをたつた一日で辞めてしまふなどという凛香らしからぬ失態をやらかしたのは、記憶に新しい。

そのサークルに、今凛香の横で、全く会議など聞いていないのがまるわかりな音楽野郎、鶴本広海も在籍していたのは、後で本人に聞いて知ることとなる。

もちろんこの時は、ただ同じ大学の美術専攻と音楽専攻の学生であるというだけで、全くの赤の他人だった。

厳密に言えば、その後も現在も、あの、忌々しい口づけの一件を除けば、赤の他人の領域を超えたことはないと断言できる。

そして、そのサークルに入ったことが、凛香の失敗人生に大きく関わっていくことになる。

「校長先生、ありがとうございました。では次に、一学期に開催されます学園祭について、担当の近江先生より概要を説明していただきます。近江先生、お願ひします」

「では、私の方から、学園祭の説明をさせていただきます。みんなのお手元にあります、プリントの一ページを」覧下さい。日程はそこにありますとおり、十月……」

担当教諭の声が職員室に大きく響き渡り、思い出にふけっていた

凛香も否応無く現実の世界に呼び戻される。

東高の学園祭は今どき珍しく、秋に開催されるのだ。

近隣の高校が三年生の受験に配慮して、五月、六月に開催するところが多い中、生徒の要望により、従来どおりの秋日程が組まれている。

やはり学園祭は秋だよなという生徒の意見に真っ先に賛同したのが、あの眞面目で控えめな教頭だったというのだから驚きだ。教頭に絶大なる信頼を寄せる校長が、すぐさまゴーサインを出したのは言つまでもない。

あくまでも生徒会と学園祭実行委員主導のもとで運営されるのが、教師が携わる部分も多く、美術教師である凛香もいじわとりばかりに数々の役割を担つている。

凛香はやや身を乗り出して、担当教諭の説明に聞き入った。

それにしてこの職員室の暑さはどりだらつ。

律儀にH-Airコン設定温度を一十八度に守る教頭のおかげで、座る場所によつては三十度を越えているにちがいない。

百人近くがひしめき合つた職員室は、さながら真夏の温室のようである。

団扇代わりの透明ファイルをパタパタさせながら滴る汗を拭い、会議内容のメモを取る斜め前に座る五十代の男性教諭が氣の毒になつてくる。

それに引き換え、隣に座る広海の涼しげな顔。

いかにも一生懸命話を聞いていますよという顔をしながら、実際にこの男の頭の中は、ノリのいい音楽が鳴り響いているに決まっている。

る。

その証拠に膝に乗せた手は、明らかにピアノを弾くよつと右へ左へとリズミカルに動き回る。

いくつになつても落ち着きの無いやつ……。凛香は軽蔑の眼差しをたつぱりと広海に注ぐのを、今日も怠ることはなかつた。

凛香の耳から、学園祭について説明中の近江の声が次第に遠のいていく。

眠気は無くなつたはずなのに、意識が勝手に過去へと遡つていくのだ。

広海の指の動きに重ね合わせるよつと、凛香はあの若かりし頃の自分を再び思い出していた。

凛香は通学に往復で四時間以上もかかることを理由に、サークルには入らないと決めていた。

もともと仲間作りにも興味がなかつた凛香は、大学では勉強して好きな絵が描ければそれでいいと考えていたのだ。

高校の美術部では、結局誰一人親しい友人など出来なかつたし、心落ち着く場所でもなかつた。

宇治を振つたと噂が流れた後は、生意氣な鷺野としてみんなから一線を引かれていたようにも思う。

もうわざらわしいことはいやだ。大学では必要以上に人と関わるのはやめておこうと決めていた。

そう決めたはずだったのに……。

絶対に誰の甘い誘いにも乗らないと固く決心していたにもかかわ

らず、凛香はあるサークルに引き込まれてしまい、それがきっかけとなつて広海と運命的な出会いすることになるのだ。

あれは確か大学に入学して一週間くらいたつた頃だったと思つ。凛香は教授に課題の質問をしようとして教官室を探し、慣れない構内をぐるぐる回つていた。

するとどうにからともなくピアノの音が聴こえて来るのだ。もともとの大学には音楽専攻科もあるのだから、ピアノの音が聴こえても何も不思議はない。

ただここは美術棟で、北のはずれにある音楽棟の音が、ここまではっきりと聴こえることなど、まずはありえない。

それは凛香が初めて耳にする曲だつた。

しつとりとした異国情緒に溢れたメロディーに引き寄せられるようにして、いつの間にか旧棟の一階奥にある講義室の前まで来てしまつ。

そこには、軽音楽サークル、ミーハンサーと云つタイトルのポスターが貼つてあつた。

いいカモが来たとばかりに、どうぞどうぞと上級生らしき人に背中を押され、講義室の中に無理やり閉じ込められる。

薄明かりの中、凛香は錆付いた椅子に座り、ミーハンサーの客の一人として、そこに招かれてしまつたことによつやく気が付いた。

ピアノがやわしく鳴り、女性ボーカルのハスキーな声がピアノの音色にかぶさる。

どこか懐かしさの漂つた曲は、昔、父親が車の中でよく聴いていたアメリカのフォークバンドの曲に似ているような気がした。

コンサートが終わり室内を見渡すと、明らかに新入生と思われる見知らぬ顔が、十人くらいそこに並んでいた。

手にはプログラムが印刷されているチラシを持っている。きっとどこかで配っていたのだろう。

この時期、新入生の勧誘も兼ねて、こういった集まりをいろいろなサークルが企画していたのは知っていたが、まさか自分がそこに足を踏み入れることになろうとは、凛香とて思つてもみないことだつたのだ。

でも聴いた音楽はすばらしかったし、学園祭でもないのに日常的にこういったことが行われる大学というところに、いい意味でのエネルギーチャーショックのような衝撃を受けたのも事実だった。

凛香は高揚した気持を抱えたまま一時間かけて家に帰りつくと、真っ先にピアノの蓋を開け、今日聴いたボーカリストを真似て弾き語りを試みてみる。

ピアノと言えばクラシック音楽しか結びつかなかつた凛香に、新しい風が吹き抜けた瞬間だつた。

そして翌日、あの先輩ボーカリストのようになりたい一心で、迷うことなくサークルに入会届けを提出したのだ。

ところがそのサークル。大いに問題ありの集団だということに、入会した初日に思い知らされることになる。

昨日演奏していたボーカルの人は他校のバンドのボーカルも兼任していて、すこぶる忙しいらしく、ほとんどこのサークルには顔を出さないなどと言つではないか。

彼女のボーカルにあこがれてこのサークルに入会した凛香は、本国の楽園から一気にツンドラ地帯に置き去りにされたような感覚を

味わつた。

他のサークルメンバーも、新入生歓迎会や合コンのことばかり話していく、楽器を演奏するでもなく、音楽のおの字も語らない。全くもって、インチキ音楽サークルだつたのだ。

そうとわかれば凛香の次に取つた行動は誰よりも早かつた。
なんとか引き止めようとする先輩を振り切つて、たつた一日でそこから抜け出すという快挙を成し遂げたのだ。

せつかく入会してくれた新入生の五人のうち、すでに一人に逃げられたと、後日先輩がぼやいているのを耳にした凛香は、自分と同じようなのがもう一人いるのかと妙に親近感を覚えた。

それが広海だつたというのは、その時の凛香はまだ知るよしもなかつた。

8・運命は動き始める（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。

以前クライスレリアーナというタイトルで連載していたものを、加筆修正のうえ、再投稿しています。

話の流れに大きな変化はありませんが、新しいエピソードを盛り込んだ内容になっています。

最後までお付き合っていただけたと嬉しく思います。

9・ピアノと腕時計の相関図

「では、一時になりましたので、本田の職員会議はこれで終了します。午後は自主研修及び、補習になりますので、各自の仕事をお願ひします」

ようやく教頭が締めくくりの言葉を述べ、会議の終わりを告げた。それにしても長かった。そして暑い。

学園祭の説明の後、進路指導について三年生の今後の予定を中心に話し合いが進んだ。

指定校推薦やAO入試が目前に迫っていることもあって、議論は熱を帯びてくる。

それでも教頭は不用意な会議の時間延長は快く思っていない。

横道に逸れそうになると即座に軌道を修正して、予定通りの時間内ですぱっと会議を終了させる手腕は、教頭ならではと言えるだろう。

う。

凛香は椅子に座つたまま大きく伸びをして、時計に目をやつた。三十分後には、また例のごとく、補習講座に生徒がやってくる。それまでに資料の準備もしなければならない。つまり、このままでは昼食休憩は取れそうに無いと結論付けた。

それよりもこの短い休憩時間に最優先されることがある。
さつきからチラチラとこちらを窺う視線の主の誤解を解かなければならぬのだ。

その視線は決して凛香に向けられているのではない。

隣の席で腕を組み、じっと皿を開じている広海にのみ注がれてい
る。

口数も少なく、見目だけは麗しい（らしい……）広海は、栄子だけではなく、既婚の女性教諭にもたびたび熱いまなざしを向けられる存在だ。

こんな奴に騙されるなど声を大にして言いたいところをぐつと堪え、凜香はすくっと立ち上がるが、あからさまに顔を背けた栄子に遠慮なくつかつかと近寄つて行つた。

「里見先生。ちょっとこ？」

凜香は職員室を出て行こうとする栄子を止めた。

「なんでしょう。あたし、今から社会科の研修で西高に行くんです。時間ないですけど」

大きなショルダーバッグを手にした栄子は、冷たく言い放つ。

「一分で済む。ちょっと来て」

凜香は有無を言わせず栄子の腕をつかみ、隣の給湯室に連れ込んだ。

「や、やめてください。何するんですか？」

「『』ねん、悪かった。昨日のことだけ……。里見さん」「ちやんと言つておかないと、私も困るから」

「言訳なんていいです。補習講座の件も、あなたが鶴本先生に根

回しだれてたんでしょう？ どうせ、その持ち前の強引さで、鶴本先生に取り入ったに決まっています！」

「里見先生。だからそれは誤解だつて。私と鶴本先生は、何もないから。付き合つてるとか絶対にありえない。もちろん、大学時代の同期だし、全く知らない間柄ではないけど……」

「一人してあたしのこと、笑いものにしてたんだわ。ひどすぎます」

栄子の思い込みもここまでくれば大したものだ。こうなつたら奥の手を使うしかない。

凜香はあまり気が進まなかつたが、これを持ち出せばきっと相手も納得するだろうとしぶしぶ口を開く。

「里見先生、よく聞いて。私には……。私には、ちゃんと付き合つてる人が別にいる。前の勤務先に、そういう人がいるから……」

栄子がきょとんとした顔で凜香を見る。

「あははは……。びっくりした？ 里見先生、そういうわけだから。鶴本先生は私とは全く関係ない」

「そ、そなんですか？ ほんとに？」

「ああ。本當だ。だから、まあ、がんばつて。そうだ。あいつ……いや、鶴本先生の好物は、コーラだ。お茶類はあまり飲まない。差し入れする時はコーラで機嫌を取るといいぞ。じゃあ、健闘を祈つてゐ……」

凜香はぽかんと口を開けている栄子の肩をぽんと叩いて、給湯室

をあとにした。

栄子と話していた時間は、ぴたり一分。凛香は資料を「ピーし
て、どつと押し寄せる疲れを背中に感じながら、よたよたと音楽室
に向かった。

田も暮れようとする頃、ようやく補習講座も終わり、グラウンド
の整備をしている野球部の生徒たちを凛香はぼんやりと窓越しに眺
めていた。

と言つても、これですべての仕事が終わつたわけではない。

今から職員室にもどつて、もう一仕事、いやもう三仕事ほどしな
ければ凛香の一田は終わらない。

終業式前後に行つたクラスの個別懇談の結果をまとめ、進路希望
のデータを集計し、一学期の授業計画に沿つた美術教材の注文もし
なければ九月に間に合わない。

そういうえば、奨学金を申請していた生徒の書類の審査も期限が迫
つている。

補習講座の遅刻や欠席日数の多い生徒の家に電話をして、保護者
とも話をしなければならない。

うつかり忘れるところだつたが、美術教育研究会の論文も今日明
日中には仕上げて、代表者宛てに送付しておかないとい、また督促のメ
ールが来てしまつ……。

「はあ……」

たそがれ時の音楽室に、凛香一人のため息が十人分くらいになつ

て大きく響き渡る。

「じゃあ、ピアノの椅子に腰掛け、鍵盤の上に載せた右手をゆっくりと弾いてみた。」

「ど、れ、み、と澄んだ音が鳴る。自分で調律もしてしまつ広海のママさんのお陰だらうか。」

学校のピアノとは思えないほどメンテナンスが行き届いたグランドピアノは、意外にも凛香の手に馴染みがいい。

「こんなことをしている場合ではないのにと思いながらも、一度椅子に張り付いてしまった腰を上げるのは、容易ではない。」

初めは隣の生徒が弾いていたソナチネをポロンポロンと真似ているだけだったが、次第に熱が入り、自分でも気付かないうちに、しつとりとしたあの曲を弾き始めていたのだ。

途中盛り上がりかけたところで、みしつと床が軋む音がする。凛香は何だらうと手を止め、音のする方向に振り向いた。するとどうだらう。

神妙な顔つきをしたよく知った人物が、黒板にもたれかかるようにして立っているではないか。

「いつ、どうやつてここに入ってきたのだらう。」

凛香は怪訝そうな面持ちで、そこに立つ広海に目をやつた。

「珍しいな……。おまえのピアノ、久しぶりに聴かせてもらつた。そのノクターん、今のおまえの気持ちか？」

絶対に認めたくないが、黒板にもたれるその姿がやけにさまにな

つていいの男に、心の中を見透かされたような気がして落ち着かない。

「こいつた、何だよ。勝手に入ってきたやがって……」

凛香は広海を前にすると、なぜか攻撃的になる。そして言葉遣いも当然のように勇ましくなってしまうのだ。

「こいつは俺の聖域だ。入つて来て何が悪い。おまえな……。いい加減、素直になれよ。俺が何か話そうとする、すぐにはぐらかすし目も合わそとしない。こいつでもしないと、おまえ、俺から逃げてばかりだろ？ なあ、凛香。あれからもう八年以上経つんだぞ。もう時効だ。俺たち、そろそろ普通に付き合えるんじやないか？ あつ、もちろん、まずは、同僚としてだが

「広海。私は、普通に付き合つてゐつもりだけだ。これ以上どうじると言つうんだ？ これでも、あなたには同僚としての最低限の気配りはしてゐつもりだ」

「最低限ね……。確かにその通りだ。昨日も、こいつにコーラをプレゼントしてくれて、俺は嬉しかつたぞ。背中に入れるのは想定外だったが」

やはり広海の皮肉は本口も健在だ。
でもちよどい。あの時、何を言つつもりだったのかと訊くのに、いいチャンスかもしれない。

「あれは不可抗力だ。あんたが余計なことを言つおつとするから、あなつたまでのこと。私はちつとも悪くないからな。なあ、広海。昨日はやつぱり、あのことを里見先生にばらそつとしたのか？」

「あの」と?

「とほけるな」

「おじおじ、俺は、とほけてなんかいないが……。つて、もしかしてあることか?」

一人ひとりのあのことは、ひとつしかないはずだ。誰にも知られたくない若氣の至りともいう、過去のあの失態。

「あれしかないだろ? 他に何がある?」

本当にあのことを忘れてしまったのか、はたまた、からかっているのか。

凜香は広海の本心を探るよつこ、執拗に攻めていく。

「わかつた、わかつた。あのことだよな。他にはない。でも、あのことは関係ないんだ。そうじゃなくて、ただ俺たちは、昔も今も仲がいいんだと言いたかっただけだよ」

「はあ? なんだよ、それ。少なくとも、今は全く仲がいいとは思えませんが……」

「いや、だから。そこはおまえが話を合わせてくれれば、里見さんもあきらめてくれるかな……と。俺、里見さんタイプはどうも苦手で……」

「つたく、なんで私が、あなたの悩み相談の手助けをしなきゃならないんだよ。里見先生、ああ見えて、結構一途でかわいいんじゃないんだよ」

いかな。あんたにぴつたりだと思ひナビ」

「おまえ、本氣で言つてるのか？ 僕の氣持がビリにあるのか知つててそれを言つ？」

「あんたの氣持なんて、知りませんが……。まさか八年間も同じ思いでいるなんて、信じじろと言つ方が無理な話……です……け……ど」

「おい、凛香？ 大丈夫か？」

凛香は急に意識が遠のきそうになつて、手でこめかみを押さえる。ふと横を見ると、広海が腰をかがめ、心配そうに覗き込んで来る。

「あー。大げさだな。大丈夫だつて。軽い貧血だよ。最近、夏バテぎみだから」

「おまえ、かなり疲れてるだろ」

広海の眉がその男前を台無しにするくらい、情けなくハの字に下がつた。

「少しね」

「なんか俺、责任感じるよ。この補習講座をおまえに頼んだの、間違つてたのかもしれないな……」

「同情はいらないね。引き受けたからには、最後まで務め上げる。広海には絶対に迷惑かけないから、安心しろ。……それにしてもうかつだつた。まさかあんたに私のピアノを聽かれるなんてさ。防音効いてるし、ちょっとくらいならいいかと思った私が甘かつた。あ

んたに聽かれるのだけは絶対に嫌だつたのに

「俺も、嫌われたものだな。でも、いい演奏だつたぞ。人間いろいろ経験を積むと、それが音に出るつて本当なんだな。おまえも人並みに、いろいろあつたつてわけだ。なあ、もう一度弾いてみないか？ なんだつたら、俺がレッスンしてやつてもいいぞ？」

「バカ！ あんたの前では一度と弾くものか」

「相変わらず、態度デカイな。でもおまえがショパンのノクターン、それも作品九の一だろ？ あれをそこまで情感をこめて弾くなんて、はつきり言つて驚きだな。昔はショパンといえば、エチユードの革命一本やりで。あれは確かに笑えた。なんでそこまで怒つてるんだよつて感じで切れもよかつた。自由で、奔放で。でも嫌いじやなかつたな。おまえのピアノも歌も……」

言わせておけば、どこまでも人の心に土足で入り込もうとする。凛香は調子に乗ることの男が癪に障つて仕方ない。

「ひーろーみー。いい加減にしろよ……。昔のことをおれこれ蒸し返すな。あんただつて、言われたら嫌だろ？」

「俺か？ 俺は気にしないな。昔のことなんか、何も思つちやいない。別に知られたつてどうつてことはないな。そりやあ、あの髪の色はやりすぎだつたかもしけないが。いくつかあつたピアスの穴も、今じやすつかり塞がつちまつたしな。もし俺がこここの生徒だつたら、間違いなく停学一週間、始末書つきつてやつだ。いや、退学か？ でも今となつちゃあ、いい思い出だよ。凛香、ちょっと替われ

凛香は無理やりピアノの椅子からはじき出される。

広海がでんと陣取り、カツターシャツの袖を捲り上げた。時計をはずし、当たり前のよつにそれが凛香の手に渡る。

シルバーのオーソドックスなタイプの腕時計。

見覚えのあるそれは、八年ぶりに凛香の手のひらに収まつた。

広海の指が流れるようにパラパラと空中で折れ曲がる。これも昔と変わつてない。

演奏する前に必ず行つ準備運動のよつなものだ。

早く職員室にもどつて仕事がしたいんだけど……。そう思つてはいても、今からピアノを弾く気ままんなこの男を放つておくわけにもいかず、といふか、凛香は学生時代、この男のピアノ演奏が何よりも好きだったのだ。

だから。ここから出て行くなんてことがそつ簡単に……出来るわけがない。

凛香は身体の力が全部抜けていくよつな疲労感を覚えながら黒板にもたれ、今まさに音を紡ぎ出さうとしている広海の横顔を、凝視していた。

突然、田の回るような速さで広海の手が鍵盤を駆け上った。大きくてしなやかな広海の手が、鍵盤の上を舞うのを最後に見たのはいつだったのだろう。

魔法のように音を紡ぎだすこの手が好きで、真っ直ぐに伸びた背中が頼もしくて、弾きながら時々目を閉じて、次に開けた瞬間ちらつと絡む視線にどきっとして。

この人とならと思った時が……なかつたわけではない。

変わったのは短くなつた髪くらい。

幻ではない。あの頃のままの広海が、今凛香の田の前でピアノを弾いているのだ。

校内の各行事でのピアノ伴奏は、東高の場合生徒が弾くことになつている。

というのも、人前で弾くチャンスを出来るだけ彼らに与えようと広海が配慮しているため、凛香が学校内で広海の演奏姿を見るには、これまで本当に一度もなかつたのだ。

裏を返せば、生徒たちも広海の演奏姿はほとんど知らないということになる。

中には、鶴本先生は全くピアノが弾けないから生徒に弾いてもらつているのだとまことしやかに噂が流れることも度々あった。

だが、音楽の授業でたまにその勇姿を田にした田には、あまりの演奏力の高さと、洗練されたパフォーマンスの美しさに、広海ファンの女子生徒たちが授業中失神寸前になつた……とこれまた大げさ

な情報が一人歩きすることもある。

「この曲は確かシユーマンの子供の情景……じゃなくて。そう、クライスレリアーナだ。」

残念ながら凛香が弾くには難しそうなので聞くだけにとどめているが、好きなピアノ曲ベスト五に入るくらい、彼女にとつて馴染みのある曲でもある。

どんなにテンポが速くても、どの音も奥まで深く鍵盤を押さえ込み、それでいて滑らかで纖細な音を生み出す広海のテクニックは、今も健在だ。

意外とつまじじゃないかと危つく声に出して言いつらうことになり、凛香は慌てて口を閉ざす。

文句なしの見事な演奏だ。そりやあ、音楽教師だもの、それくらいは当然だうと憎まれ口のひとつも言つてみたくなるけれど。それを差し引いても、やっぱり広海はつますぎる。

たとえあの憎い広海が弾いているにしても、凛香はこの音楽教師のたぐい稀な才能を認めざるを得なかつた。

聴けば聴くほど彼の音に引き寄せられ、胸をぎゅっと締めつけられるように苦しくなつていく。

そして次第に田の奥までじわっと熱くなつてくるのだ。

大学の卒業演奏会でも、選ばれた三人に名を連ねていた。

一人はプロのピアニストとして活躍しているし、もう一人はヨーロッパに留学していると聞く。

大学の教えどおり律儀に教師になつて、それでもこれだけの技量を維持している広海は、果たして今の自分に満足しているのだろうかとふと心配になつたりもある。

凛香は自分の脳内が広海一色に汚染されてしまつたことに気が付き、頭をぶんぶんと振った。

あくまでも、聴衆が誰もいのはかわいそつだから、我慢して聴いてやつているだけなのだと「」ことを肝に銘じ、自分を戒める。

凛香は広海の音楽にぐいぐい引き込まれていく自分を認めながら、一方でそんな自分が情けなくもあった。
もしも広海に、今でも揺れ動く心が残つていてそれを語りてしまつたら、今までの努力が全部無駄になるからだ。

あんなひどいことをした張本人である広海を絶対に許すものかと何度も自分に言い聞かせ、八年前に凛香の中にあつた広海へのすべての思いを断ち切つたのだ。

「」の音楽教師を喜ばせることだけは、なんとしても避けなければならぬ。

落ち着け。落ち着くんだ。広海の奏でる音色に聞き惚れて我を失うなんてことだけはあつてはならない。
どこかの知らないオヤジがわけのわからぬい曲を滅茶苦茶に弾いているんだと思い込め。

「こんなやつのピアノなんか、誰が聴いてやるか……。
だれが……聴いてなんか、やる……もの……か……。」

「どうだ、」の曲。おまえも知ってるだろ？ 全部で八曲あるんだ。
で、次は……って、おい、凛香？ どうした、凛香！ 大丈夫か？」

どうやら凛香は本当に意識がなくなつてしまつたらしく。

氣付いた時には、隣の音楽準備室のスプリングのいかけたソファの上で、寝心地の悪さと戦いながら身体を横たえていた。

「ひる……み？」

凛香の田の前には、心配そうに上から覗き込むなつかしい瞳があつた。

じやくせこまぎれて髪を撫でられていたような気がするのだが、それを指摘する元氣は残念ながらまだない。

「おまえなあ。倒れるなら倒れると、そうなる前に俺に言つてくれよ……。おまえのこと何も気付かずにピアノを弾き続けている俺つて、かなり鈍感で、大マヌケ野郎だと思うんだが」

「いや、いつもそうなんで、別に氣にしてない……」

「いつもつて……。おっ！ 正氣になつたな。貧血か？ 昔も時々こんなことがあったよな。いつやつておまえを看病かくじゆするのは初めてじゃないから、俺も心得たものぞ。まさしく鬼の霍乱かくらんだな」

「ほつとけ！ 私だって、調子の悪い日くらいはあるし。あんたと違つて、纖細で硝子細工のよつな華奢な身体なものですから」

「ほお……。女性の教師の中で一番デカイおまえが、そんなにもろいとは全く存じませんでしたね。つたく人の氣も知らないで……」

「広海……」

凛香は自分の口がいつもどおりの辛口を維持している」と少し
安堵する。

が、しかし……。この状況から察するに、広海が倒れた凛香を介
抱してくれただらうことはもう間違いない。

ならば、恩人に対しても少し口が悪すぎたのではないかと反省する。
もう少し素直になつて、このは礼へりに言つべきではないかと。

「なんだ。まだ何か言い足りないのか？　おまえの毒舌はもう十
分ももつただ」

「あっ、いや……。ここまで運んでくれて、どうも……ありがと」

瞬く間に広海の顔から表情が消えた。

眉間に皺を寄せたまま口をポカんと開けて、まさしく放心状態だ。

「お、おまえ。本当に大丈夫か？」

「うん」

凛香は広海が屈んでいる方向に横向きになり、じくつと頷いた。

「なんだよ。おまえがしおりじくなると、気持ち悪いな」

「悪かったな」

「いや、悪かないよ。素直で結構。今日みたいな凛香は大歓迎だ
ぞ」

「やれはびりま」

また不意打ちのようご、広海の手が前髪をかすめる。

凛香は触れるかじつかのすれすれのところで首をすくめ、広海の手をかわした。

「おつと、逃げられたか……。それはそつと、わつき何度も俺の名前を呼んでくれたよな。憶えているか？」

凛香の顔が一瞬にして曇る。

どうしてこいつの名前を呼ばなければいけないんだと、さも不服やつ口を尖らせた。

「おやつ、その顔は信じないな。言ひとへけど嘘じゃないぞ。いやあ、俺って頼りにされてるなあって、マジで嬉しかった」

にやけた顔と長く伸びた鼻の下が、全くもつて目障りだ。
でも、なんとなくこの田の前の男の名前を呼んでいたような記憶が残っている。

でもそれは不可抗力だ。この場所で凛香の側にいるのは広海しかいないのだ。

他の人の名前を呼んだといひで、誰にも聞こえやしないのだから。

だが、しかし……だ。無意識で呼ぶ相手の名前が広海だと、やはりいただけない。

凛香には恋人がいる。栄子に言ひたのは口から出任せでもなんでもなく、結婚まで申し込まれた相手が本当にいるのだ。

今までの交際経験の中で最高に長く付き合つていふ。わづすべ二年になるだらうか。

なのに、今の今まで、彼の顔すら思い浮かばなかつたのはじつこ
うわけだろ。

最近忙しくて、ずっと会ひていない。電話もメールも……してい
ない。

今までそのことを極力考えないようにしていた自分への罰のよつ
に、不安がじつと押し寄せる。

「凛香、そんな様子で電車は無理だろ？ 僕の車に乗つてけ。お
まえの家まで送つてこくよ」

「えつ？ そ、それは……」

「遠慮するなよ。それとも何か。俺の車には乗れなことでも？」

「いや、そいつわけではないけど、そ、その……」

「ここまで広海に世話になつておきながら今さらなのだが、これ
まで一人きりで他の男性の車に乗らないように常に心かけてきた凛
香は、いぐり広海が親切心で言つてくれたことであつても、そのポ
リシーを簡単に曲げることは出来ないのだ。

「迷惑か？ わつか……。おまえ、付き合つてるやつ、いるもん
な。なら、そいつに連絡するか？」

急に不機嫌な声色になつた広海が立ち上がり、机の上に置いて
あつた時計を腕にはめた。

「あつ、それ！」

凜香は時計を手にすくねや顎や、ソファの上に上半身を起しした。

「じゃれか？　おまえさ、ほとんど意識が無かったのに、この時計は離さず握り締めていてくれたんだ。おかげで投げ出されなくてすんだ」

それを聞いて、ほつと胸を撫で下ろす。

この時計は、広海が大学時代から大切にしていた時計だ。父親からもらつたと言っていた、国産のどこにでもある時計。

でも、どんな時でも肌身離さず持っていたその時計への広海の思いを知つているだけに、意識を失つた時に落としたりどこかにぶつけていたらと、不安になつたのだ。

「で、どうする？　来栖さん、電話するのか？」

「いや、いい。……って、な、な、なんで？　なんで来栖のこと、知つてるんだ？　私、広海にそこまで言ってなかつたはずだけど。東高の職員は誰も知らないはず……」

凜香は、誰も知らないはずの恋人の名を告げた広海を訝しげに見上げた。

「そして来栖さんとおまえは、つまへーって……ない」

田を丸ぐくる凜香を追い詰めるよに、広海が言った。

「そのとおりだ。でも、なんであなたが知つてるんだよ？　誰に訊いた？　ねえ、教えてよ」

凜香はその場に立ち上がり、つかみ掛からんばかりに広海に詰め

寄る。

ところが、再び田まいがしてそのままソファに座り込んでしまったのだ。

「なあ、凛香。そんなんで、おまえ、一人で帰れないだろ？ 意地を張るのはやめて、今日は俺の言うとおりにしろ。なんなら車までおふってやるが。ほら、ほら、つかまれ」

そういう言ひ方で背中を向ける広海の肩を借りて、なんとか立ち上がりた。いくらなんでもおんぶは勘弁して欲しい。

その時、凛香のお腹のあたりで、きゅうーっと怪しげな音がした。広海が振り返り、怪訝そうに凛香の顔を覗きこむ。すると今度はぐるぐるっともう一度音が鳴った。

「広海。ごめん。お腹……すいた。死にそう。私、今日一日、何も食べてなかつたんだ」

「おいおい、凛香、マジで？ ジャア、その貧血。空腹のせいだとでも？」

「うん。朝も寝坊したから、コーヒー一杯だけしか、飲んでない

「でも、食べなかつたのか？」

「うん」

「よし。そうとわかつたら、今から腹筋しきりえだ。仕事はこれで切り上げるぞ」

広海がその持ち前の長い足を有効に使って、あつという間に準備室と隣の音楽室の電気を消し、戸締りを済ませた。

「来栖さんのこと、店に着いたら話すよ。それならいいだろ?」

凛香は返事をする間も与えられず、広海に引きずられるようにして、駐車場に連れて来られた。

いつの間にかすっかり広海のペースに巻き込まれてしまつた凛香は、停まっている車を見渡し、栄子が社会科研修に行つたまま、まだ戻つていないので確認する。

凛香は恋人の来栖にじめんねと心の中で小さく詫びて、まだ少ししぶしふつきながら、助手席に乗り込んだ。

11・おたふく

広海が車を停めた店は、おたふくというありがちなネーミングの洋食屋だった。

学生の頃、一人でよく通った店だ。

ところが久しぶりに店の前に立つた時、そこがあたふくだとは気付かないほど、店構えが変わっていたのだ。

店の前にぶら下がっていた黄ばんだれんはどににも見当たらず、そのかわりに小さなボードが脇に立てかけてあり、本田の「ティナード」とカラフルな横文字が並んでいる。

店内も劇的な変化を遂げていた。

昭和の臭いをブンブンさせていた年季の入った椅子とテーブルがものの見事にすべて撤去され、モノトーンのシンプルなものに取り替えられていた。

壁は漆喰で塗り固められ、自然に近い明るい黄土色が店内に落ち着いた雰囲気を生み出している。

気の利いた間接照明や、要所要所に飾られた小物類に至るまで、あらゆるところに細やかな演出がなされているのに驚く。

もうそこは洋食屋ではなく、すっかりカフェレストランに生まれ変わっていたのだ。

でも凜香はどこか物足りなさを感じてもいた。

少し脂ざつた床や、ぎしぎしきしむ椅子、そして、割烹着を着た氣立てのいい店主のおばさん姿がそこにないこと、一抹の寂しさを覚える。

白いシャツに黒いパンツ、そしてギャルソンエプロンをつけた今どきの若い店員が、いらっしゃいませと言つて、グラスとおしごりを凜香と広海の前に置き、ブルーの表紙のメニューをテーブルの隅に載せてそそくさと去つて行つた。

「なあ、広海。こゝ、おたふく……だよな？」

凜香がそう訊ねるのを予測していたかのように、横に座る男は優越感を帶びた笑みを浮かべながら、そうだと頷く。

それも、わざわざ間隔を空けて座つているにもかかわらず、そのわずかな隙間を無理やり埋めるように、ぐいぐいとくつついてくるのだ。

他にも席は空いているのに、どうしてカップルが座るよつた横並びのシートの席をあえて選ぶのかと訝しく思う。

が、正面から見つめ合つ形になるのも、それはそれで気まずいのではないか。

凜香は改めて腰を浮かし、これ見よがしに、広海との間をしつかり三十センチは取つて、座りなおした。

「こいつ……。俺から離れたな？」

「あたりまえだ。なんであんたとくつついて座らなきゃならないんだ。食べる時、肘も当たるし、邪魔だろ?」

「はいはい、わかりました。あなたさまの言つとおりでいざこます。それにしても不自然だな。この空間。人間一人座れると思わないか?」

そう言いながら、またその半分ほど間をつめて来る。いつなると

凛香は身動きが取れない。無情にも横は漆喰の壁だ。

はあ……とあきらめにも似た長いため息をつき、凛香は蔑むような目つきで、隣の男を見た。

「ははは。逃げれば追う。これ、男と女の法則だから。まあ、今夜くらい、辛抱しろよ。なあ、凛香。この店、雰囲気が変わつただろ？去年、リニューアルしたんだ。こここの店主のおばさんが三年前に亡くなつて、息子が跡を継いだらしい。俺たちが学生の頃はおばさんが一人で店を切り盛りしてたけど、大変だつたんだろうな。息子は結構有名な料理人で、おばさんの味を引き継ぎながらアレンジを加えて、毎時には〇〇や主婦層で行列ができるつて噂だ」

「ふ〜ん。そうだつたんだ。おばさん、残念だつたな。まあ、そんなに親しかつたわけじゃないけど、青春時代の思い出がまたひとつ消えていくような気がする」

「そうだな。おばさんが生きているうちに、おまえと来れたらよかつたのにな……」

広海が柄にも無く神妙な顔つきになる。

そして店員が置いていったメニューをおもむろに広げ、何にしようかと独り言のように口づぶやいた。

「広海は、ここにはずっと来てたのか？」

店内の内情についてやたら詳しい広海に、確認するように訊いてみる。

「いや……。俺、新規採用の時は、県の西のはずれの高校に赴任させられてただろ？ その頃は一切来なかつた。四年前に東高に移動

になつてからだな。またここに通つようになつたのは

「やうか……で、あんたの彼女もここに連れて来たりするのか？」

凛香は、絶妙なタイミングでさつきの仕返しを謀る。

確か広海にも付き合つてゐる女性がいるはずだ。凛香の恋人の名を知つてゐる男に取引条件のように、話を切り出した。

「そんなことも、あつたかな……」

凛香は、遠い目をして思いがけない返事をする広海をまじまじと見た。

過去形の言い分から察するに、今はその彼女とは別れたとでも言うのだろうか？

「確かに去年、おまえが東高に転勤してきた時はまだ彼女がいたけどな……。去年の暮れに別れた」

それはまた、ご愁傷さまでと凛香は心の中で広海を哀れんだ。まあ、デリカシーのカケラも持ち合わせない、こいつの歪んだ性格じゃあ、彼女もさぞ苦し苦労したことだろう。凛香はフフンと鼻で笑つてみせた。

付き合つてゐる女性がいるとわかつていても、この男にすり寄つていく女は数知れない。

「ひいう男と付き合つ宿命とでもいうのだろうか。凛香は見たこともない広海の彼女に、大いに同情心を抱いた。

そう言えば。広海は音楽教師に採用された初年度は、ここから隨

分遠い県西部の高校に配属されたのだ。

凛香は広海から奪い取ったメニューを眺めながら、広海が就職した当時のことを思い出していた。

「田西部学区内に配属されると、よほどのことが無い限り、西部の学区内で教師の移動が行なわれるのが常なのだが、広海はたった三年で、ここ東部の学区に飛ばされてきたのだ。

それは凛香にしてみれば、大きな誤算だった。

そうとわかつていたら、凛香はなんとしても別の県の教員採用試験を受けたはずだ。

広海が院に進まず、就職すると知った時、凛香は迷わず院への進学を選んだ。

学校勤めなど、結局は狭い世界なのだ。一緒に採用試験を受けて、万が一同じ高校、あるいは近くに配属されようものなら、否が応でも、ずっと顔を合わせ続けなければならない。

それだけは凛香は何としても避けたかった。

そのために院に進学して就職の時期をわざとずらし、広海が西部学区勤めで宿舎暮らしという風の便りを聞いて、安心して採用試験を受けた。

「ここは日本国内でも上位に入るくらい、高校の数が多い県だ。

一緒に高校になることなど、宝くじの高額当選を手にするのと同じくらいに低確率だと踏んでいたのに、見事的中してしまったものだから開いた口が塞がらない。

凛香が前の高校に新卒で着任して三年目の時、東高から転勤してきた体育教師が、のちに彼女の恋人になる来栖だった。

その来栖が、東高に勤めている時、なかなかしつかり者の音楽教師が西部から転勤してきて、女生徒に人気だったとか、仕事も良く出来るいい奴だつたなどと、ことあるごとに凛香に話していたのだ。

音楽教師と同等に自分も生徒から人気を博していたのを自慢をしたかっただけだというのは、凛香も薄々気付いていたが、この来栖と言つ男、見かけだけはさわやかな体操のお兄さん系を誇るだけあって、彼の言つこともなまじうそではなかつたのかもと大目にみていた。

学生時代、競泳の全国大会で上位入賞の経験もあつて、根っからのスポーツマンの来栖と凛香が付き合い始めたきっかけはあまり自慢できるものではなかつた。

飲みに行つた勢いでいつの間にそくなつたというのがその答えだ。酔つ払つた大男を介抱できるのは、その場に居合わせた女性の中で、たまたま凛香しかいなかつたというのもあるが、やつとのこと來栖の住む官舎まで彼を送り届けたところ、突如正気なつたこの男に告白され、夜を共にしたというのがそもそもものとの始まりだつた。

嫌ならばすぐに逃げ出すことも可能だつた。

だが、すでに来栖のことを田頃から気にかけていた凛香は、このまま彼を一人にしておけなくて、ついつい誘いにのつてしまつたのだ。

この逆の話はよく聞くが、まるで送り狼が女である自分のようで、凛香は職場の誰にも付き合つていることを話せないまま今に至る。ところが思いのほか一人でいることが心地よく、凛香のありのま

まを受け入れてくれる来栖に、次第に愛情を感じ始めてもいた。

そして、来栖が得意げに話して聞かせる見知らぬ音楽教師の特徴が、どうも凛香の知っている昔の知人に重なるのだ。

ある日来栖の口から、謎の音楽教師の名が鶴本であると聞いた時、もうその人物が広海以外の誰でもないと凛香は瞬時に悟る。まさか自分の恋人が、広海と知り合いなどとは思つてもみなかつた凛香は、院に進んでまで就職時期をずらした涙ぐましい努力が、いとも簡単に音を立てて崩れしていくを感じ取つていた。

どうして西部にいた広海が東部学区にいるのか？ それは信じられないことだが、確かに事実のようだ。

でも、来栖にだけは広海と知り合いだということを絶対に知られたくなかつた。

もしそのことが知れたら、恋人の来栖にさえ言つていないので過去の失態が広海の口からばれてしまうかもしれないからだ。

凛香の過去最大の汚点であるあのことは、封印したまま来栖と付き合つてきた。

ピアノを弾くことも、人前で歌つていたあのことも……。来栖にはずっと内緒にしてきたのだ。

幸い、今までそのことが話題になつたことは一度もない。すなわち来栖は、まだ凛香と広海のつながりに気付いていないということになる。

嘘をつくのが苦手な来栖が、知つていながら知らないフリをするなど、とてもじゃないが出来っこない……はずだ。

ということは、広海も凛香が来栖の彼女であることは知らなくて

当然なのだ……。

といふがせつせ、広海は凛香の相手の名前を来栖だと、はつきり言つてゐたのだ。

「おまえ、遅いなー。早く決めろよ。ここのはステーキセシート、うま

いぞ」

来栖のことを考えていた凛香は、突然ぬつと顔を近付けて一緒に手元のメニューを覗き込む広海に驚き、反射的に壁際に身を引く。

あの頃は広海のことなど何も意識することなく、いつも身を寄せ合っていたといふのに、これしきのことについていたいどうしたところのだらう。

凛香はさくさくと暴れ回る心臓に、なすすべもなく、秘めやかに頬を赤らめた。

「じゃあ、おまえもステーキセツトでいいか?」

「ステーキ?」

「そう。だから言つてんだろ? ここのはうまいって。おまえも食つてみる。元気になるぞ」

「それはさつきも聞いた。でも、よく考えてみるよ。私、これでも一応、身体が弱つてんんですけど。普通、そんな半病人にステーキなんか勧めたりするか? …… つたく、思いやりのかけらもないやつめ」

いくら空腹が原因で具合が悪くなつたとはい、急にステーキなんぞが入つてくれば、内臓だつてびっくりするに決まつてい。今の中香には、リゾットとか、シチューとか。がんばつてもハンバーグが関の山といつところだらう。本当に広海ときたら、これだから困る。

「半病人? おまえが? 大丈夫、大丈夫。顔色も随分良くなつた。じゃあ、俺はステーキセツトにするから、少し分けてやるよ。で、おまえは?」

凜香の眉がピクッと動いた。さつきから……といつか、ここ最近、広海が馴れ馴れしくおまえおまえと連呼するのが気になつてゐるのだ。いつたい何様のつもりなのだろうと。

「私は地中海風リゾットでいい。それと、私のこと、おまえつてあ

んまり気安く呼ぶな。里見先生に聞かれたら、また何を言われるか

……「……」

「あ……。悪かった。つい昔の感覚でそのまま言ってしまったよ」

凛香は恋人の来栖にすら、おまえと呼ばれたことがない。

あまり大きな声では言えないが、彼は凛香のことをかりんちゃんなどと、くすぐったい名前で呼ぶ。

ワイハじやあるまいし……。まるで業界用語のように前後を入れ替えて呼ばれることに、初めはびっくりしたが、慣れてしまえば結構女心をくすぐられ、嬉しいものだと気がつく。

「これからは、気をつけるよ。じゃあ、いつやつて一人きりの時も、鷺野先生って呼べばいいのか？ それって、いくらなんでもかしこまり過ぎだろ？ なら言わせてもらひうが、おまえだって俺のこと、広海広海つてずっと呼び捨てじゃないか。前の彼女は、広海さんって、優しくそう呼んでくれたもんだ……」

なつかしそうに過去を振り返り、天井を仰ぐ男が少し不憫になる。が、同情は禁物だ。

「そんなこと、知るか。どうせ、広海さん……なんて呼んでもらって、鼻の下長くしてへらへらしてたんだろう？ 私には到底無理だから。早くそいやつて呼んでくれるかわいい人、見つければ？ 東高の卒業生にも、あんたのファンがいっぱいいるらしいけど。遊びじゃないなら、それもいいんじゃないかな？ よりどりみどりだな」

「はあ？ 卒業生たちが悪いってわけじゃないけど。俺にはそんな趣味は無い。心配してもらわなくとも、まつとうな方法でちゃんと相手をみつけるさ。じゃあ、結局のところ、お互い他人行儀な呼び

方は無理つて」と。俺、職場では絶対におまえつて言わないから。

誓つよ、な？ 凜香ちやん

「あ、気持ちわるつ！ 凜香ちやんはやめてくれ。あああ。もう何でもいいよ。好きに呼んでくれたらしい。凛香ちやん以外なら何でも。私だって、気をつける。人前では絶対、広海なんて言わないから。特に里見さんの前では、絶対に！ そうだ。鶴本センセーって、生徒みたいに黄色い声で呼んでやるうか」

「それもいいけど、出来る」となり、広海さんでよろしく

「んなわけない！ ああ、なんてことだらつ……。補習講座にかかる前までは、広海と話すことなんてほとんどなかつたから、こんなつまらない」とで悩む必要もなかつた。出来る「ことなり、一学期に戻りたい」

凛香は腕を組み、心底嫌そつて首を横に振つた。

「やうだ、広海。安心しろ。里見先生にはつきりと言つておいたから。私たちは別に何でもないって」

「それはそれは、助かりました。でも、俺。悪いけど、里見さんのことはなんとも思つてない。誤解されたままの方が良かつた。なあ、凛香？」

「いい加減に……。しーるーつー」

じやくせに紛れて肩を抱いてきた広海の手をおもこいつひつぱたき、フンと顔を叛ける。

その昔……。天にも昇るような幸せな気持で、広海と口づけを交

わしたあ直後、この男の本性が分かり、頬に手の型がつくほど平手打ちをしたのを、よもや忘れたとでも？

広海との恋が一瞬にして破れたあの日を思い出し、凛香の心が沈んでいく。

でも広海との付き合いもあとわずかだ。補習講座が終われば、また元通り、ただの同僚に戻る。

それまでの我慢だと自分に言い聞かせ、凛香は必死の思いで自分を奮い立たせた。

昔と変わらない欧風家庭料理を味わった凛香は、すっかり元気を取り戻していた。

リゾットは、少し塩辛かつたが、残りを凛香から奪い取り全部平らげた広海はめちゃくちゃうまいと満足げに唸つた。
えびがぷりぷりして甘みがあったという点では、凛香は広海と意見が一致した。

食事の相手がどうしようもない広海とはいえ、いろいろと世話をなつた以上、礼儀を欠くわけにはいかない。

律儀な凛香は、伝票をこいつそりと手にして、一人分の支払いをしようと立ち上がる。

しかし奥の席にいるため、広海が邪魔で会計台に向かうことが出来ず、足踏み状態になる。

「おひと、それは俺にくれ。おまえに払わせるわけにはいかんだろ？」

「いや、それはこいつの単語。あなたのことが嫌いなのと、世話に

なつた礼はまた別の次元の話だから。ここは私が払う。お願ひ。払わせて」

狭い席で、伝票の取り合が始まる。
他人が同じことをやっているのを見苦しく思っていたのに、それを自分が率先してやつているのだ。凛香はたちまち、自己嫌悪に陥つた。

「いいか、凛香。よーく聞け。このままだとずっと店から出られない。だから、ここは社会人としては先輩の俺が払う。そして、おまえは、食後の「コーヒー」を俺にこゝ馳走する。どうだ。いいアイデアだろ?」

「えっ? 「コーヒー?」でも、それじゃあ、こここの支払いの方が多すぎるし。あんたに損をさせるわけにはいかない。それに見ての通り、私は疲れ果てて弱っているから、そろそろ家に帰つてゆっくりしたいなと思っている。だからここには私が払う。ね? そうしよう」

はいそつですかなどと言おうものなら、向こうの思う壺だ。
ここは、どうしても譲れない。凛香の腕の見せ所だ。

「それは困ったなあ……。凛香。俺と、これ以上一緒にいたくないつてわけですか? あの話。まだ終わつてないぞ。来栖さんのこと」

「あつ……」

凛香は一番大事な話を聞きそびれてしまつたことに気がつく。
そこは是非とも聞いておかなければならない。

もし来栖と広海が通じ合つていて、凛香のことも筒抜けであるならば。それは彼女にとって、抜き差しならぬ大問題なのだから。

「それと……。仕事のことだが、生徒のこと少し込み入った話もある。もつししだけ、いいだろ？ なんなら、凛香の部屋に行つてもいいぞ。今でも大学の時と同じマンションにいるんだろ？」

「仕事の話？」凛香は仕事に関する話を言わると、めっぽう弱い。

「それも生徒のことだと言わると、放つておけなくなるのだ。凛香の心の中の天秤は、すでに広海の言い分に傾きかけていた。

学生時代凛香は、あまりにも大学への通学に時間がかかり過ぎるため、大学近くに小さなマンションを借りて暮らし始めた。勤務先もマンションからそう遠くはなかつたので、結局ずっとそのままそこに暮らしている。

ボロアパートでもカプセルホテルでも、マンスリーマンションでも良かつたのに、両親がそれを許さなかつた。

娘に何かあつてからでは手遅れだからとオートロック完備でセキュリティーもバツチリな贅沢なマンションに、無理やり住まされた経緯がある。

「そのマンションならもちろん、広海もよく知っている。

学生仲間からは同棲しているのかと間違われるくらい、凛香のマンションに昼夜を問わず入り浸つっていたのは、あらうことか、この目の前の男だったのだから。

「ええっ？ ほんとに行つてもいいのか？ 久しづりだな。おまえんちに行くの。ちょっとは女の子らしい部屋になつたか？ 掃除機はちゃんと置つたか？ カーテンはどうした？ 布団は干してるのか？」

「うるさいー。誰がうちで来てもいいって言った？　白痴じゃないけど、私の部屋には彼氏にも入つてもらつたことがない。今はもう何の関係も無いあんたを入れるわけがないだろ？」「

「だから、話をするだけだって言つてるだろ？　昔は入れてくれたじゃないか。あの時だつて、俺はずっと紳士だつたはずだ。違うか？」

「あたりまえだ。変なことしたら、追い出さに決まつてるだろ？」「

「おまえはそういうの、すゞく嫌がつたからな。俺だつて、おまえに嫌われたくないし、責任の持てる立場でもなかつたし。まあ、あの頃の俺たちは、目標に向かつてまつしぐらだつたからな。色恋沙汰に振り回されてる暇なんて無かつた……。おまえ、本当に来栖さんを部屋に入れたこと、ないのか？　信じられないな。そんな風だから、うまくいくはずの恋愛もダメになるんだよ……」

「ほつといってくれ。言つとくけど。私と来栖は、ダメになつたわけじゃないから。ただお互に忙しすぎて、疎遠になつてるだけだ。ダメだとが、決め付けないでくれ！」「

「決め付けているわけじゃない。おまえ、それ、本氣で言つてる？　忙しすぎて疎遠になつてているだけだと、本当にそう思つてるのか？」

広海の真剣な目が、凛香を試すかのようにじりじりを見つめている。

凛香は唇をかみしめ、広海の視線から逃れるよつて俯き、再び座

席に腰を下ろした。

「なあ、広海」

凛香が力なく俯き、疲れ切ったような声で訊ねる。

「私と来栖のこと、どこまで知ってるんだ。あんたと来栖が元同僚で、結構一緒にいたりは、来栖に聞いていた。じゃあ、何か？ 来栖も、私と広海が知り合いだと気付いていたのか？」

「いや、気付いてないな。来栖さんの彼女がおまえだとわかった時、思わず俺も知ってるよと言ってしまいそうになつたが、よそ様の彼女にすかすかと立ち入るほど、俺も無神経じゃないんで。聞き役に徹していたつてわけさ」

凛香は広海の話を聞き、幾分気持が軽くなつた。
来栖にはまだ、あの思い出したくもない過去の汚点は知られてい
ないといふことになる。

ところがこの男。来栖のこと、凛香も知らない何かを掴んでい
るのは確かだ。

今ここで聞きだすことが出来るのだろうか。

「広海。あんた、何か知ってるんだろ？ 来栖のこと……」

凛香はそれを知りたいような知りたくないような、複雑な心境だ
った。

最近の来栖の様子を見れば、それとなく相手の考えていることへ
らいわかる。

あえてそのことを知りたくないで、来栖を避けていたというのもある。

「聞かないほうが身のためだというのは、男女間にはよくある」とだ。

「凛香。見てみろ……。密がいっぱいになってきた。外まで並んでるわ。ここに話せることと、話せないことがある。場所を変えよう

「どうに? 私の家はダメだからな」

「あははは。あれは冗談に決まってるだろ? 人妻ならぬ、人彼女の部屋に乗り込んでどうするんだよ。俺はこれでも義理堅いタイプだからな。来栖さんはことは尊敬してるし、その人を裏切るようなことは出来ない。なら……。俺んちはどうだ。グレードアップした俺の官舎暮らしを見たいとは思わないか?」

「グレードアップ?」

「この部屋と比べてそんなことを言つのだろ? まさか学生時代のグランピアノで占められていたあのワンルームと比べると?」

ピアノが置ける学生マンションということで、広海の住んでいた当時の住処は、大学からはかなり遠かつたはずだ。

大学近くの防音完備のマンションは賃料が高すぎて借りれなかつたとぼやいていたのを思い出す。

あまりにも不便なところにある広海の部屋には、数回しか行ったことがない。

男の一人暮らしのくせに、掃除も行き届き、狭いながらも快適な

部屋だつたというのは、悔しいが、今でも鮮明に憶えている。

「やうだ。前の官舎より、ずっとといい具合に家具もレイアウトしてある。床もピカピカだぞ。つい先日、真夜中に突然思い立つて、ワッカスがけをしたところだ」

「あんたがきれい好きなのは知ってるが、前の官舎だつて？ 私は昔の学生マンションにしか行つたことないけど。昔のあんたの彼女と勘違いしてるんじゃないか？ ビウせそうやって、前の官舎に女を連れ込んでばかりいたんだろ？」

「えつ？ そうか？ あー。そつだよな。おまえは前の官舎は知らないんだ。それに言つておくが、俺は女を連れ込んだりはしない。官舎だぞ？ 変な噂が立つたら困るだろ？ が。そういうのは外で済ます。それが大人の男のやり方だ」

「偉そうに。その官舎に今から私を連れ込むんだろ？ 変な噂が立つぞ。いいのか？」

「ああ、大丈夫。おまえとなら噂が立つても本望だ……と言いたいところだが。今住んでる東地区の官舎は老朽化が進んでて、一昨年から新たな入居者を受け入れていないんだ。おかげで、俺の隣も上階も、誰もいないよ。全体でも、三分の一くらいしか入居していないじゃないか？ それに東高の職員は俺しかいないから、噂の立ちようがない。みんな、リツチだよな。若いのにオートロックの賃貸に住んでやがる。俺だって、そのうち……」

「わかつた。わかつた。わかつた。じゃあ、あなたの家に行く。その代わり、話が終わつたらすぐに帰るから

広海の話は長い。黙つて聞いていたら、延々話続けるのだ。

学生の頃は、いつだってそうだった。にもかかわらず職場では寡黙な一枚目で通っているので、人間として少しは成長したと思つていたのだが……。

やはりそれも間違いだつたと気付く。

本当にこんな男の家にのこのこついて行つて大丈夫なのだろうかと不安になるが、凛香はそんなリスクを負つても、徐々に行きたい気持ちが高まっていた。

さつき音楽室でうかつにも倒れてしまつたせいで、広海のクライスレリーアーナを聴きそこなつたことが残念で仕方ないのだ。出来ることなら、続きが聴きたい。頼めば弾いてくれるのではなかとかすかな期待を抱いていた。

広海のことだ。間違いなく富舎にグランドピアノを押し込んでいるだらう。

来栖の話よりも、仕事の話よりも、何よりも、広海のピアノが聴きたい思いが勝つて、誘いに乗つてしまつた……ということだ。

凛香は、はやる気持ちをなんとか抑え込んで、広海の車の助手席に再び乗り込んだ。

もちろん店の食事代は、広海が支払つと言つて断固譲らなかつたため、凛香はしぶしぶそれに従つた。

まあしく老朽化といつて言葉がぴつたりな広海の富舎は、おたふくから車で十分ほどのところにあつた。

凛香のマンションもここからそう遠くはないはずだ。

マニュアル車をいつも簡単に操つて、駐車場にバックで入庫していく運転席の男をいつしか目で追つて、自分に気付き、凛香は慌

てて目を逸らした。

五階建ての官舎は、よくある団地の仕様と同じで、玄関のドアも何度もペンキを塗り替えているせいか、どこかやぼつたさが拭えない。

自称インテリアマニアの広海も、ここでは白爛のセンスを存分に発揮できないのではないかと思えるほど、朽ち果てた感じのする建物だ。

ところが……。真っ暗だった室内は、照明のスイッチを入れるや否や、瞬く間にくつきりと全容が露わになり、家具の色合も、デザインも。

無機質な電化製品までも、全く期待を裏切ることなく、美しいフォームを浮かび上がらせた。

内装は入居者が変わるたびに手が入れられるのだろうか。

凛香のマンションよりも見栄えがいいのはどうこうことだらう。もちろん、広海の掃除が行き届いているところが大きいのは言うまでもないが、これではますます凛香の部屋に広海を呼ぶことは出来なくなつたと、心が沈みこんで行く。

広海の場合、これが日常だから驚きだ。初めて広海の家を訪れた人ならば誰もが、足しげく通つて来ている彼女の仕業だと思うに違いない。

だがそれは間違いで。正真正銘、広海の手によつて美しさがキープされているだらうことを、凛香は知つている。

あまりの美しさに、自分の部屋とは非ともトレードして欲しいものだと真剣にそう思う。

広海のような奥さん、いや、旦那さんは持つ人は、楽でいいだろ

うなあ……などとひとききいため息をついたり、ついつとした田で部屋中を眺め回してしまった。

でも、もし。万が一にもこんな奴と結婚なんかしようものなら。部屋は見かけより使い勝手だと豪語する凛香とは、一田たりとも結婚生活は続かないだろう。それなのに……。

なぜかあの頃、広海が凛香のがらぐた部屋に平氣で入り浸っていたことをふと思い出す。

片付けろと、頭^じなしに怒鳴られたこともなく、我慢してくる様子でもなかつた。

当時はそんなことも気にならなかった、のめり込むものが存在したと言つことなのだらう。

やはりそれはあった。防音工事が施されている部屋に、グランドピアノがでーんと据えつけられていた。
まつ白な壁紙に指紋ひとつこいていない黒いつややかなボディーが映える。

本当にここにがあるのでおんぼり寂^{さび}なのだろうか。

凛香はまるで、モデルルームを見学する客のよつて、感嘆のため息を漏らしながら室内を歩き回つた。

こんなことをしている場合ではないのだが、どうせ今夜が最初で最後の鶴本家への訪問なのだ。

短時間のうちに美しさを堪能させてもらわなくてはならないのだから、少しばかりの野次馬根性は見逃してもいいことにしよう。

一通り室内見学を終えた凛香は、広海に促され、台所と和室を繋げてワンフロアにしてあるリビングの白いソファに腰を下ろす。

「そのソファ、いいだろ？ 北欧の名だたる職人が作った物らしいが、店の移転による大幅プライスダウンつてのをたまたま見つけて。即決だよ。今では我が家の要とも言える家具だ。ベッド代わりにもなるし、大人でも三人は座れる。今からコーヒーを淹れてやるからな。おまえはそこで横になつてもいいぞ。疲れただろ？」

せかせかと立ち働く広海を横目に、凛香は言われるまでもなく、もうすでに身体を横たえていた。

こういったタイプのソファは、寝るためにあるのではないかと思えるくらい、座つたとたん、自然に身体が斜めに……なる。

凛香は、白い壁に不似合いな木目調の天井を見上げながら、本日の広海からの借りをどうしたものかと思案していた。

倒れた時の看病に始まり、おたふくの食事代や今も家に上がりこんで、コーヒーまで淹れてもらっている。

これではもう完全に、ただの同僚の域を超えてしまつてるのではないかと思い悩んでいたのだ。

お礼に食事に誘つといふのはよくあるパターンだが、これ以上広海と関わり合つのもどうかと思う。

まだまだ先の話だが、バレンタインデーの時に、義理チョコ増量で返すというのどうだろ？

これはなかなかいいアイデアだ。凛香は満足げにこつそりとほくそ笑んだ。

こうのち、今年のバレンタインデーには、どうこうわけか、男の広海よりも、凛香の方が多くチョコをもらつた。

見せ合つたわけではないが、職員室で席が近いため、お互ひの戦利品が丸分かりだったのだ。

凛香は、その結果に複雑な思いを抱いていた。

もし自分が東高にいなければ、きっと広海の方がたくさんもらえたはずなのにと普段憎たらしい広海に同情的な気持ちになっていた。

広海がかなり凛香のことをうらやましがっていたのも事実だ。

そんな広海にはファミリーサイズの袋詰めアーモンドチョコをどうさりと贈つてやればいいのだ。

広海はどんなに高価なチョコよりも、庶民の味のアーモンドチョコが一番好きだったはずだから。

「うーん。挽きたてのコーヒーのいい香りが凛香の鼻先をくすぐる。

昔から、広海の淹れるコーヒーは、文句なしにうまかった。

広海がカップを二つ載せたトレーをソファの前のローテーブルに運んできてくれたのはそれから数分後だった。

「うわー、おまえと一人でコーヒーを飲むのは、何年ぶりかな」

コーヒーを手に、ソファにもたれるよにして広海と並んで床に座る。

凛香はコーヒーを口に含み、広海の話に耳を傾けた。

「なあ、凛香。俺たち、あんな別れ方をしていなければ、結構うまくやつていけたんじゃないかなあ。おまえはどう思つ? 俺の思い込みか?」

「ああ。思い込んだ」

間を空けずに答える。

「即答かよ……」

広海はがっくりと肩を落とし、ふりふと寂しげなため息をついた。

「私はあんたと付き合ってたわけでもないし、あのあと進展してたかどうかなんて、実際問題、考える方がどうかしてると思う。私はあの時、広海や他のメンバーに、騙されたんだ。のことだけは一生忘れないからな。……今言えるのは、それだけだ」

「まだ、そんなこと言ってるのか？ 黙つてたのは……悪かったと思う。でも騙したわけじゃない。おまえならやれるし、きっと成功すると思った。あの時のおまえのステージは、最高だったと思う。客だって、俺たちだって、みんなおまえに釘付けになつて。いつしか会場中が一体になつていた。おまえも、そのことほわかつてただろ？」

凜香は悔しそうに唇をかみしめ、膝の上のコーヒーカップに視線を落とす。

そんな話をするために、ここに来たわけではない。昔の話を蒸し返すのが田的ならば、今すぐここから立ち去りたい。

凜香は不機嫌さを全身で表して、広海を睨みつけた。

「わ、悪い。つい昔のことばかり言つてしまつて。そんなつもりはなかつたんだ。ただ、おまえと一人でここにいるのが、夢みたいで。まだ信じられなくて。これから先、もう絶対にこんな時間が持

てるなんて思つてなかつたから……。俺が悪かつたよ。じゃあ、本題に入るけど。いいか?」

まだ広海の態度を許したわけではないが、凛香は黙つたまま頷いた。

「仕事の話と、やつきの来栖さんの話。どちらから聞きたい?」

凛香は迷いながらも顔を上げる。

「じゃあ、仕事の話から。まさか、また別の補習講座の手伝いをしふとか言つんじやないだろ?」

「これら生徒のためとはいえ、もう広海の手伝いはこいつ!」

「それはない。補習講座は予定通り、あと一日で終わるよ。そうじやなくて、実は、秋の文化祭のことなんだ。俺は今年度、生徒会の担当でありながら吹奏楽部の副顧問つてのは、おまえも知つてゐよな?」

「知つてる」

そうだった。広海は、クラス担任の業務以外に、一足のわらじを履いているのだ。

凛香はクラス担任以外には、美術部の顧問と風紀担当に当たつている。

見た目は広海と同じ数のわらじを履いているが、風紀担当は他に五人もいる上、マッチョな男性体育教師が頑張つてくれているので、当番の時だけ校門に立つていればいい。

広海の忙しさに比べれば、凛香の分担業務など、無いに等しいかもしだれない。

「じゃあ、生徒会の文化祭実行委員長が、吹奏楽部にいるってのも？」

凛香は不思議そうに首を傾げる。さすがに、そこまでは把握していないなかつた。
が、それがどうだと言つのだろ？。

「知らないってか？　おまえ、本当に自分のクラスの生徒以外は何も知らないんだな」

「ふん、知らなくて悪かつたな。美術部員なら知ってるわ」

「そりゃあ、そりでしょ。でも、生徒はおまえを慕つてゐるついで、世の中ホントにわからないことだらけだな。で、そいつが俺に頼んできたんだ」

「何を？」

「先生たちのかくし芸を、舞台発表でやつて欲しいって」

「か、かくし芸？」

「そうだ。おまけに、是非とも鷺野先生には出場して欲しいんだ」と。鶴本先生から頼んでくれと、泣きつかれた

なんだ、それは……。凛香は小馬鹿にしたよつた冷ややかな視線を広海に返した。

三年生の卒業にあたっての謝恩会や引退会では、やみなみらせか
もたまにはある。

でも、文化祭だぞ？ なんで教師が生徒主体の舞台に立つこと
出なきやならないんだ。全て、話にならない。

凛香は、おもこつひとつ首を横に振り、却下と言ふて広海の話を跳
ね除けた。

「どうしてもダメか?」

「あたりまえだ。却下」

「生徒の頼みでも?」

「も、もちろん…………」

「いくらかわいい生徒の頼みであつても、理不尽な要望は拒否して
も許されるはずだ。」

「あいつらが言つてたぞ。鷺野先生はいつも近寄りがたくて怖いイメ
ージだけど、そこが素敵で、かつこいいってな」

「…………」

今度は褒め殺し作戦だろうか。あまりにも見え透いた広海の手口
に開いた口が塞がらない。

「そんな健気な生徒たちの願いを、おまえはいつも簡単に断つてしま
うんだよな?」

「…………」

直接生徒から頼まれたわけではないので、彼らが健気がどうかな
んて、知ったこっちゃない。

そうそう。広海の言動に振り回されとはいいけないのだ。

「一学期の終わりに生徒たちが勝手にやつてたアンケートがあるんだけど、男女総合の投票結果、おまえがダントツで人気教師ナンバーワンに選ばれたんだってな」

「えつ？」

「文化祭のアンケートだとばかり思っていたのだが、そんなものまであつたとは……。凛香は今まで全く知らなかつたのだ。

「集計結果は新学期が始まつてから、生徒会の掲示板に貼り出されるらしいぞ。その中でも女子生徒に人気があるつて、いいよな。同性に好かれるのは、おまえの人間性が認められている証拠だろ？」

「冗談だろ？ どうせ、女子生徒には、あんたが一番人気だろ？」

「いや、俺もそう思つたんだが……というのは冗談にしても。それが違うんだ。ほんの数票差だつたらしいが、おまえに軍配が上がつた。ちなみに、男子生徒の人気ナンバーワンは里見さんだつたらしい。そこでだ。人気者のおまえに舞台で何かやつてもらえれば、文化祭が盛り上がるとでも思つたんだろうな。あいつら、ああ見えて、案外見る目があると思わないか？ 俺はおまえが選ばれて、誇らしく思うぞ。まあ、男子生徒が里見さんのは、あれは見る目というよりも、本能的なものだろ？ けどな。なあ、凛香。ここひで一発、昔みたいに、舞台で暴れてみないか？ 俺も一緒にやるから。なつ？ 頼むよ」

広海が両手を合せ、凛香に頼み込む。

「こ」の通りだ。凛香、頼むよ。別に昔のことを公表する必要はない

んだし。おまえと組んで、歌やつてただなんて、誰にも言わない。
それなりいだろ？ な？ 凜香」

凛香は必要以上に顔を寄せて迫りてくる広海を追いつめながら、
「コーヒーを一気に飲み干し、「シン」と荒っぽい音を立てて、カップをテーブルに置いた。

「お、おい、凛香。俺が初任給で貰った記念の「コーヒー カップ、粗末にするなよ」

「はいはい、悪かったです。それくらい、ちゃんと手加減してますから。なあ、広海。…………つか……つた。ひる…………の……ヒー」

凛香はそっぽを向きながら、あくまでも付け足しつづけたニコアソスで、棒読みのようにつぶやいたのだが。

「えっ？ 何か言ったか？ 聞こえないぞ。もう一回言ってくれ。
なあ、凛香」

何かとても重要なことを聞き逃したかのように広海が慌てふためいて、執拗に凛香を問いただすのだ。まるで確信犯のように。

「つたぐ、もう……。だから。つかつたつて言つてるんだ。広海の淹れてくれた「コーヒー」……」

とたん広海が形相を崩し、でれでれと笑顔になる。

「そりゃ。うまかったか。照れずに、はつきりとおしゃべりよ。じゃあ、もう一杯どうだ？ ちょっと待つてみよ」

カップをトレイに載せて、いそいそと広海が台所に舞い戻る。

あの頃も、そうだった。凜香が一心不乱にキーボードと譜面に向かっていると、いつの間にかテーブルには、湯気が立ち上るコーヒーがそっと置かれていて。

ミルクも砂糖も何も入っていない、ただのブラックコーヒーだけど、広海の淹れてくれたコーヒーだけは、そのまで飲めた。しつかり濃い目の色がついているのに苦味が少なく、さらうどしていて、鼻の奥にほわっと芳醇な香りが広がっていく。

凜香は床から立ち上がりソファに座り直した。

そして、ふかふかの座面に手をついたとたん、身体が斜めに傾き、いつしかゴロリと身体を横たえ、まどろみ始めてしまったのだ。

今からもう十年近くも前になるだろうか。

大学一年の夏を迎えた頃、凜香は軽音楽サークルを辞めたにもかかわらず、一人暮らしを始めたばかりの部屋にポツンと置いてあるキーボードを弾きながら、歌っていることが多かった。

あのボーカルの声が忘れられなかつたのだ。

歌うことがこんなに気持ちいいものだなんて、思つてもみなかつた。

次第に心がほぐれてゆき、優しい気持ちになつていく自分が嬉しくもあつた。

そしてとうとう、その年の秋が深まつた頃、凜香がたつた一人でストリートミュージシャンまがいのことまでやつてしまつことになるだなんて、誰が想像しただろう。

一度やるともうやめられない。ストリートの魅力にどっぷりとまつていく自分を、凛香はもう止めることが出来なかつた。

凛香が歌つていた場所は、大学に程近い駅前広場の一角だつた。もうすでに何組もの人たちがそれぞれのパフォーマンスを繰り広げていたので、比較的もぐりこみやすかつた。

ギターをかき鳴らして、一人で歌う者。五人組みのロックバンドや、バックミュージックなしで、アカペラを朗々と歌いこなすつわものまで、それはそれは様々な音楽好きな若者がそこに集い、表現を楽しんでいたのだ。

演奏を聴きながら、ダンスをする人もいる。どこかのグリークラブの声量の豊かさにも驚かされた。彼らのクリスマスソングは今振り返つてみても絶品だつたと思う。

まさしくそこは自由空間そのもので、道行く人もふと足を止め、老若男女を問わず笑顔になり、同じ音を共有する喜びに、ほんのひと時だけ浸つっていく……。そんな場所だつた。

黒いレザーのキャリーバッグにキーボードとスタンドを詰めて、賑やかで人通りの多い一等地からは少し奥まったベンチの側で見よう見まねで始めた自分だけのオリジナルコンサート。

どんな機材が必要かもわからないま、とにかくキーボードに新規の単一電池六コを装備し、予備の電池もバックに補充して、いそいそと現地に出向く。

マイクはないので、キーボードの音量を絞り声を張り上げ気味にして、おつかなびつくり、凛香のたつた一人だけのステージが幕を開ける。

もちろん聴いてくれる人どころか、立ち止まる人もいない。

オリジナル曲も悲しいかな一つしかないため、たとえ耳を傾けてくれる人がいたとしても、この一曲がエンドレスでは、すぐに飽きられる。

昼間、大学の講義中にノートに歌詞を書きとめ、夕方部屋に戻つてからキーボードに向かつて作曲するという作業を繰り返し、十二月に入る頃には、十曲くらいのストックを持つまでになった。

そのうち一人一人と足を止めて聴いてくれるようになり、常連の客がついたのもこの頃だった。

ファンレターももらつた。数人の女子高生が地べたに座り込んで惜しみない拍手をくれた時、凜香はあまりの嬉しさに泣きそうになつたのを昨日のことのように思い出す。

クリスマスの恋人同士を歌つた甘酸っぱい歌詞のアップテンポの曲が評判になり、何重にもなつた人垣を前に、いっぱいのライブ気取りを経験した日には、もうこの状況から抜け出せなくなつていた。凜香は完全にストリートの魔力にとりつかれてしまつたのだ。

凜香のすぐ後ろ側のベンチのところで、ギターを手に弾き語りをしている人がいるのは当然知つていた。

ストリート開始初日にここで歌つてもいいかと了解を得た当人なのだから。

それ以降、目が合えば会釈を交わす程度だつたその人に、クリスマス当日の夕方、演奏の準備中に突然声をかけられたのだ。

凜香はちょうど、底冷えのする石畳の上でキーボードスタンドを組み立てているところだった。

少し前から誰かの視線を感じていたが、路上ではよくあることなので別段気に留めもせず、黙々と作業を続けていた。

だが、しかし。なかなか立ち去らない上に、徐々にその人が距離を縮めてくる。

じつと見られているようを感じる視線が正直気持悪くて、イライラが限界に達しようとしていた。

凛香の性格上、にっこり笑って何か御用ですかなどとしおらしく訊くなんてことは、到底無理な話だったので、こうなつたらどうしようとでも無視を決め込んでやろうと、絶対に顔を上げなかつた。すると、遠慮がちに、いんにちはと言つ声が、頭上をよぎる。

凛香の俯き加減の視線の先には、その言葉を発したと思われる人物の、履き込まれた大きなボロボロの靴があつた。男の足だ。

「あの……。すみません。いつも君の後ろで、ギターやつてる者です」

突然降ってきた男性としてはやや高めの響きのある声に、凛香はスタンダードのネジを回していく手を止め、顔を上げた。

「え、どうも。いんにちは」

からいりじりそれだけ言葉を返す。といふか、いつたい何の用だろう。

すらりと背の高いその人物を、凛香は訝しげに睨みつける。

よほど凛香の態度が怪しげだったのだろう。

田の前のその人物は一步一歩と後ずさりして、引き攣つたような

笑いを口元に浮かべ、真っ黒なレンズのサングラスを、すっとはずした。

横長レンズのスポーツティーなサングラスを取り除いたその人は、予想に反して優しげな目をしていた。

きりつとした眉の下で、眩しそうに目を細め、精一杯の笑みを浮かべている。

次第に光に慣れてくると、くつきりとしたラインの一重まぶたの目を大きく見開いて、ともすれば冷ややかにも見えかねないグレーがかつたブラウンの瞳を露わにする。

凛香は心の中で、うーんと密かに唸った。

これはかなりの上物だ。まさしく世に「いつといひのイケメンの部類ではないかと。

では、そのイケメンギター野郎が、凛香にいつたい何の用があるというのか。邪魔者はさつさつとここから立ち退けとでも？

もちろん、ここは公共の場だ。役所や管理人が何か言つてきた場合は、速やかに指示に従つつもりでいる。

アンプを使用しないことと、夜はショッピングセンターの閉店時刻までという約束で、広場の管理団体からは使用許可が下りているはずだ。

どこの誰とも知らぬギター野郎にとやかく言われる筋合はない。

凛香は毅然とした態度を崩さず、けん制するように睨み返した。

「あつ……。準備中に手間取させてごめん。单刀直入に言つよ。よかつたら、今日、俺と一緒に歌わない？」

自分の不利な立場を悟ったのか、ギター野郎は特上の笑顔と共に、そんな誘い文句を投げかけてきた。

「え？ それ、どういうこと？」

背中にギターを背負つたこの男が、本気でそんなことを言つているとは思えず、半信半疑で訊ねる。

「今日は、クリスマスだろ。一緒に演奏できたら賑やかでいいかなと思つて。どう、やってみない？」

「急に言われても……」

「いつも後で君の歌を聴いてて、うまいなあと思つていたんだ。それに、君もそこの教育大の学生だろ？」

君もと語つことは、このギター野郎も教育大生ということだらつか？

でも凛香はこの男を学校で見かけたことなどない。広場付近には、いくつもの大学がひしめき合つてゐる。

あるいは、当てずっぽうでそう言つたのかもしれないと思い、慎重に相手の出方を窺ひ、

まさか……。ストーカーなのか？ 凛香はこの男にますます不信感を募らせていった。

「あつ、いや。俺、決して、怪しい者じゃないから」

すり落ちそになつたギターを背負い直し、イケメンギター野郎

から名を改めたストーカー男が顔の前でひらひらと手を振る。

「君、軽音サークルにいただろ？ 実は俺も入っていたんだけど、結局、辞めてしまったんだ。君がいなくなつてすぐにな。あのサークルと俺の音楽の方向性が、ちょっと違うような気がして……。それで、夏からここでストリートやり始めたってわけなんだ。先月、君が急に現れた時には、ホント、びっくりしたよ。絶対にサークルにいたあの人だつて思った。君は俺のこと、憶えてない？」

「「」めんなさい。全く憶えてないです」

「全くつて……。まあ、普通は、そうだよな」

凛香は田の前で肩を落とすストーカー男が少し不憫になつてきた。こうなると、ストーカー男といつのは言いすぎかもしないと反省する。

少しばかり譲歩して、最初の印象であるイケメンギター野郎に、イメージをもどすことにした。

そういうえば、凛香に続いてすぐにサークルを辞めた人がいるとは聞いていたが、たつたの一田だけ在籍していた凛香が、メンバーの顔を憶えているはずもなく。

改めて、イケメンギター野郎を足の先から頭のてっぺんまでくまなく観察してみた。

肩につくくらいの長めの髪は、明るめのブラウンに染められていく。

いや、夕陽のあたる角度によつては金髪に見えるかもしれない。それくらい田立つ色だ。

ワックスで固められた前髪は微妙な角度を保ちながら、風が吹いても全く乱れる様子はなかつた。

片方の耳にはシルバーのピアス。首には皮ひもでつるされた仰々しいクロスが掛けられていた。

穴だらけのジーンズにボロボロのスニーカー。

後からいつも聴こえてくる歌声は、複雑なコード進行をものともせず、軽快に響く魅惑のテナーボイス。

そして、言わずもがな、ほぼパーフェクトなイケメンフェイス。

凛香はよつやく納得した。女子高生が鈴なりになつて後の男に群がつていた理由がやつとわかつたのだ。

といふことは、このイケメンギター野郎と組んで歌えば、客が倍増するのだろうか。

やうだとしたら、この話を断る理由はどうにもない。

だが、一緒にやううと急に言われても、じつすればいいのか凛香にはさつぱりわからなかつた。

こきなり相手の曲にキーボードで合わせるなんて技も、残念ながら持ち合わせていない。

「どうだらう。とつあえず、今夜だけでも一緒にやつてみないか?」

「それはいいけど。でも、私は何もできない……」

「心配いらぬこと。君はいつもどおりでいい

「やつこつわけにはいかない。あんたに迷惑がかかるぞ」

ギター野郎の顔つきが一瞬強張った。さつと凜香の飾り気のないことば遣いにとまどつてゐるのだ。

「いらっしゃいケメン相手でも、凜香は自分自身を偽つてまでの男に取り入るつとは思わなかつたのだ。

「君わあ、見かけによらず、その、勇ましい感じなんだね」

「よく言われる。私は、あんたの好みの女じやないことだけは確かだから。やめるなら今のうちだけだ」

「いや、やめないよ。君のそのキャラ、俺は嫌いじやない。何かを表現する人間は自然体が一番だと思う。俺だって、こんな身なりして路上でギター弾いて……。教師やってる親からは勘当寸前の扱いだ」

そう言つて、クツクツクと笑つ。

「それならこうしよう。それぞれの持ち歌を交互にやつて、最後に君のクリスマスの手紙だけ。あれと一緒にやればどうかな？ お密さん、驚かしてみようよ」

凜香の目の高さに合わせるようにしゃがみこんだギター野郎が、またしても極上の笑みを湛えながら、そう言つた。

凜香はつづかりその笑顔に吸い込まれそうになるのを、やつとのこと食い止める。

その時、凜香の脳内はすでにキャンバスと化し、田の前のとうけそこに甘い男の顔を猛スピードでデッサンし始めていた。

「ねえ、君？ 大丈夫か？」

凛香は男の声に意識を呼び戻される。えつと……。一緒にクリスマスの手紙をやろうといつとこころまで、話をしたはず……だったよな。

凛香は雑念を取り払うようにぶるぶると頭を振った。

「あっ、『じめん』ちょっとと考え事してた。なら、やってみるよ。あんたの『じめん』おりにする。ただ、悪いけど、クリスマスの手紙の楽譜の余分、ないんだ」

まさかこのような事態になるとは思っていなかつたので、凛香は自分だけにわかるように書き留めたメモ程度の譜面しか持ち合わせていなかつたのだ。

「ああ、それなら大丈夫だよ。いつも君の演奏を聴いていたからコード進行もわかるし。適当にこっちでハモるから、いつもどおりに歌つてくれたらいいよ」

適当にハモるついで……。凛香はきょとんとした顔でギター野郎を覗き込む。

「あの……。後ろで聴いてただけで、私の曲のコードがわかるのか？ それって、あ、あんた、もしかして、プロの『ヨージシャン』？」

「めかみをピクッと痙攣させながら凛香が訊いた。

「へっ？ 僕がプロだって？ あははは！ 違うよ。ただの音楽マ

ニアだよ。ああ、そうだ。名前もまだ言ってなかつたな。俺、教育大音楽専攻の鶴本広海。専門はピアノで、こいついたギターや歌なんかも少々。だいたいの曲は一度聴くとコードはわかる。脳内で譜面も起こせる。絶対音感もあるらしー。でもさ、音楽専攻にはこんな奴、うじゅうじゅいるから。音楽専攻じゃなくても、ここでストリートやってる奴の中には、俺よりすごいのがいっぱいいるってこと。俺が特別なわけじゃないんだ。よつて、将来は音楽教師志望。君は？」

「私？ 私は、鶴野凛香。美術専攻で、美術教師志望……です」

「鶴野さんか。鶴野さんは美術専攻なんだ。絵とか描くの？」

「まあね。油絵が専門だけど、イラストや漫画なんかも少し」

「へえ。すごいな。俺は絵は全くダメだよ。鼻の長さでしか、象とライオンを区別して描けないレベル。鳥に四本足描いたの、俺だから。つてことで、鶴野さんのこと、凛香って呼んでもいいかな？」

「ええっ？ いきなり呼び捨て？」

凛香は、あまりに馴れ馴れしいこの男にあきれ果てる。

「「めん、「めん。もちろん、失礼を承知で言つてるんだ。歌つてる途中にみんなの前で、君のことを鶴野さんって呼んだら、ステージがしらけるような気がするんだけど。俺、間違つてる？」

「あ、いや。そつかもしれない。お密さんで楽しんでもらつたためには、そういうたのりつて大切かもな……」

「じゃあ、そういうことで。凛香ひて呼ばせてもいいつね。君は俺のこと、広海つて呼んでくれたらい」

「ひ、ひろみ？」

「そり。広い海で広海。よろしくな

イケメンギター野郎のベースにすっかり巻き込まれた凛香は、このあと少しだけ打ち合わせをして、ショッピングセンターのイルミネーションが灯ると同時に、ぶつつけ本番で広海とのコラボステージを始める。

思ったとおりの「反響」で、一曲終わるごとに、客の輪が大きくなつていいく。

広海が、凛香の十八番にして初めてファンの心を掴んだクリスマスの手紙をもの見事にハモリ、音に厚みを出してくれた。

まるで初めてシャドウと口紅をつけた高校時代の自分のようだ、元夜の演奏に胸のトキメキが收まらない。

あっちもこっちも恋人同士の一人連れて溢れ返るクリスマスの夜、本日の演奏の大成功を祝つて、凛香は広海と一緒に駅前の立ち食いそばの店に入った。

歌っている間はそれなりに体内が暖かく感じたが、終わると同時に、身震いするほどしんしんと冷え込む冬の夜だった。

あの時、二人で肩を並べて食べたそばの味が今でも忘れない。

この記念すべきクリスマスの夜が、凛香と広海のコンビ結成の初日だったのだ。

……ああ、いい匂い！そばのだしの匂いか？

……違つよつた氣がある。そばじやなこ。されば、パークーの香りだ。

.....ハハハハハ、ハハハハハなんだ。あれ？ 皿の邊にこねのせ
。

廣海？ えつ、えつ、な、なんで？ 凜香は田の前で、ビアップになる廣海の顔にのけぞる。

「おまえなあ……。人んちに来て、のん気にまどろむなよ！ 僕が「一ヒーのお代わりを淹れてやつてる間に、フツー寝るか？ せつかくのうまい「一ヒー」が冷めてしまつただろうが。……つたく、襲うぞー。」のやうづー。」

ああ……。そうか。ユウは広海の宿舎だった。
凛香はようやく自分のおかれている状況を理解し、もそもそと上半身を起します。

「わ、悪い。昔のことをこうこう思って出してたが、ついで眠くなつてしまつて……」

ソファのすぐ下でめいにっぽい不機嫌な顔をしながら胡坐をかけている広海が、横田でじりりと凛香を見る。

「つたともつ……。で、俺の頼みは聞いてくれるのか?」

「えつと、文化祭の」と……だよな?」

「そうだ。生徒をがっかりさせんな。なあ凛香。あいつらの注文に応えてやれよ」

「……考えておく。今すぐ返事しなくていいだろ? ユウちにもいろいろ心積りつてのがあるからな。まあ、あれだな……。前向きに……検討するよ」

「やうか! よし、わかった。是非とも前向きに頼む」

広海の顔がぱっと明るくなつた。

「なんでもまた、そんな風に肯定的な気持になつたんだ? さつきはもうダメかと思つてたんだぞ。なんかいい夢でも見たのか? 気持

よれやうにすやすや寝息を立てていたからな

「こや別に。どじままでが過去の記憶で、どこから夢だつたのかはよくわからない。ただ、広海と一緒に歌い始めた頃は、それなりに楽しそうに毎日で、仲良くそばを食べたりもしたなつて……。なのに、どうして一年後にあんなことになつてしまつたんだろう……」

「おまえもそういう思つだろ？　なんでもつとうまく立ち回れなかつたのかと、俺だつて、あの頃の自分が不甲斐なくて仕方ないよ。あの騒ぎの数日後に、おまえの部屋に置いていた俺の荷物が宅配便で送られてきて。ああ、おまえは本気だつたんだ、これでおまえとも本当に終わつたんだと自覚した」

「あれは、自分でびっくりするくらい、素早い行動だつたと思つ

「おまえの変わり身の早さのおかげで、あの後ひと月ほど、俺がどれだけ荒れたと思つ？　もちろん正月も実家には帰らなかつたし、バイトもクビになつて。今だから白状するけど、俺が物心ついてから泣いたのは、あの時が初めてだつた。もうボロボロだつた」

連絡もすべて断つて、顔も見たくないほど嫌いになつた相手だと、いつのに、凛香はその頃の荒れた広海を、何度も目撃したことがあつた。

そこに広海がいるとわかつていながら、一人で通つた居酒屋をふらりと覗いて広海の姿を確認すると、そのまま立ち去るのだ。

「あの頃の俺、どうしようもないほど若くて未熟だつたんだ。恥も外聞も捨てて、おまえのところに泣きついて行けばよかつたのに、変なプライドが邪魔してそれが出来なかつた。おまえとずっと一緒にいたかったのに、失恋した自分に醉つて、自分ほど惨めな男はい

ないと仲間の同情を煽つて……。とうとう今日までそれを引きずつて来たつてわけだ」

「でもな、広海。あの時、あんたが泣きついて來たとしても、私はあんたを受け入れることは出来なかつたと思う。あれで良かつたんだよ。お互違う世界を見て、いろいろな人と出会つてきたからこそ、今こうやって真正面から向き合えるようになったんだ。言つておくけど、あの時は、あれが私の精一杯の広海への抵抗だった。あんたのこと、本当に許せなかつたんだぞ。思い出すだけでもいまだにムカついてくる」

もちろん、今でも広海を許すつもりはない。広海の身勝手をこ、凛香の心はズタズタにされたのだから。

ただそれと文化祭のことは別の次元の話だ。文化祭実行委員長がどうしてもと望むなら、希望を叶えてやるのも悪くない。

教師が本音でぶつかれば、きっと彼らも本気を返してくる。お互いがもっと分かり合える、絶好のチャンスでもあるのだから。

「おまえの気持ちはわかつてゐつもりだよ。俺のやつたことは許してくれなくともいい。一生かけて償つていぐ。この先、ずっと」

「無理しなくてもいいだ。まあ、私たちは、これ以上深入りすることもないだらうし、今のスタンスを続けていけば、お互いが傷つくこともないと思つ」

「また、そんなことを言うのか？ 俺はやつと今、突破口が開いたと思ってる。おまえがどんなに嫌がつても、今度は引き下がらないからな。覚悟してろよ。でもな、俺、ちょっとショック受けてる。なあ、凛香。俺つてそんなに魅力ないのか？ 俺と一人きりになつ

ても、グーグー眠つてしまつからリラックスできるつて、どうよ…

…

「あ。。。どうしてかわからないが、広海といふと、なぜか眠くな
るんだ。それはもう、条件反射みたいに。昔だつてそうだったじや
ないか」

「ああ、そうだ。残念ながらそうだつた。おまえを大事に思つあま
り、おまえに手出しできなかつた俺が悪いんです。俺がおまえをそ
んな風に育ててしまつたんです。はい、そうです、その通りです…

…

広海がふて腐れたようにして、ぶつぶつと文句を言つ。

決して広海に魅力がなかつたわけではないのだが。確かに凛香は、
広海といふと眠つてしまつことが多い。

でもそれは、そこまで彼を信頼していたといつ証拠もある。

だからと云つて、妙齢の女性に向かつて襲うぞとは何事だ。

起き抜けに聞いたあの言葉を、さらつと聞き流したフリをしてい
るが、凛香の心臓はさつきから拍動の間隔が狭まり、まるで早鐘の
ようにドキドキと鳴つて暴れ回つてゐる。

この歳になると、そういうた男女の「コミュニケーショーンも身に
覚えがないといえぱうそになる。

いくら力自慢の凛香であつても、素手で男の力に敵うわけがない。
最悪の場合、力ずくで押さえ込まれる可能性もある。

でもまあ、相手は広海だ。凛香に彼氏がいるのも知つてゐる。と
ても本気で言つてゐるとは思えない。

それに、凛香も大人の言葉遊びを真に受けて突つかかるほど、も
う子供じやない。

「私があんたの前でリラックスできるのは、それだけ鶴本先生を信
用している……ってことだ」

「そんな信用、別にいらないな。ああ、もつたいないことしたよ。
さつき襲つとけば良かつた。絶好のチャンスだったのにな。おまえ
の寝顔、案外、かわいいんだぞ。何もしゃべらないおまえは最高に
キュートだからな」

「キュ、キュート？ 気持わるつ」

まさか広海の口から、そんな乙女な単語が飛び出しつづくとなれば
えず、凜香は苦虫を噛み潰したような顔になる。

「なんだよ。せっかく褒めてやつてゐるのに。もうひどく、起きてしま
べつている凜香も好きだ。俺は来栖さんとは違つから……」

凜香は、しゃべらない自分が世の中を平和にするところのは、以
前から十分に承知している。

それに、そんなに襲いたかったのなら、正々堂々と意気込みを見
せてくればよかつたのだ。

凜香とて、ここどころかち方面は、随分御無沙汰だったはず
なんだし……。

凜香はいつしかとんでもない方向に思考が向かっていふことにせ
たと気付き、急いで軌道修正を試みる。

それに、たつた今、凜香の想い人の名前が広海の口から口ばれ出
るもの、しっかりと耳にした。

凜香はソファの端に座りなおし、床に座つたままの広海に「うう

座れと座面を指し示した。

「話の腰を折るようで悪いけど。そろそろ来栖のことも、聞かせて欲しい。まさか、あんたと彼がそこまで親しかつただなんて、誤算だつたわ」

「おいおい。だつたわ、つて……。凜香がそんな女らしい言い方をするのはビジョニー珍しいな。本来なら何をおいても歓迎すべきところなんだが、そもそも言つてられない。まあ、ふざけるのはこれくらいにして。……そうだな。来栖さんと俺は、かなり親しくさせてもらつていた。大概のことは、知つてゐつもりだ。でも、来栖さんの名誉のために、これだけは言つておく。那人、一度もおまえのことを悪く言つたことがないぞ。それに最後まで、おまえの本名を俺に明かしてない。那人、狭い教員の世界で、噂が先行するのを随分嫌つてたからな」

「じゃあ、なんで私だつてわかつたんだ？　あんたの素晴らしい推理と予知能力で、私だとわかつたとでも？」

「まあ、来栖さんのこれまでの話を繋ぎ合わせると、おまえ以外の人間は考えられなかつた。来栖さん、彼のこと。つまりおまえのことだらうけど、かりんつて名前だと俺に紹介してくれてたんだ」

「た、確かに……」

「だから初めのうちは、来栖さんの彼女がおまえだと氣付かなかつたんだ。もちろん前の職場の同僚だとも言つてなかつたからな。なんとなく似てるけど、全然違う名前だろ？　それと、そのかりんさんはとても女らしい人で、かわいらしいんだとずっとのろけてた。凜香、怒るなよ、絶対に怒るなよ。それって絶対に、おまえだとは、

わからないだろ？ もちろん、おまえは女だけど、女らしことか、かわいいとかいう表現は……ちょっと違うと思うんだ。やつだよな？」

「うーーー。悔しいけど。広海の言つとおりだ。……でも。なんで、そんな嘘を吐いてたんだろう。来栖の前でも、このとおり、ありのままの私だったんだけど」

来栖の真意が理解できない凜香は、無意識につぶしと首を傾げていた。

「おっと、凜香。今一瞬、惱殺されかけた。おまえ、反則。そんな風にして俺を見るな」

「はあ？ 何、わけのわからない」と言つてゐるんだ。私がどうしようと勝手だろ！」

凜香は首を元の位置に戻すと、田の前のやたら近い位置にいる男を睨みつけ、威嚇する。

「だ、だから、『冗談だよ。そんな怖い顔するなよ……。で、先月、飲みに行つた時、来栖さんの口から、とんでもない真実を聞かされて……』

「何を、聞かされたんだ？」

まだ冗談の続きを言つてゐる間にしか見えない広海の本気度を測るように、凜香は穴が開きそうなほど彼を見つめた。

「そ、それは……。おまえ、本当に何も聞いてないのか？」

「だから、何？ はつきり言えよ

「だったら……。やっぱり俺からは、言えないな

広海が気まずそうに、田を逸らす。

凛香はそれでも知りたかった。来栖にいつたい何があつたのか、真実を知つておきたかったのだ。

「広海。あんたが来栖のことをかばつているのか、それとも、私はショックを与えないために事実を隠したいのか……。どっちなのかはわからないが、私は本当のことが知りたいんだ。時機を見て彼に直接聞くつもりではいるけど、その前にあらましを聞いて、気持の整理をしたいと思ってる。ねえ、広海。お願ひ、教えて。あんたが言つたなんて、来栖には言わないから」

「凛香。俺は別に来栖さんに言つてもうつても構わないさ。もしあまえが本当に知らないというのなら、それはルール違反だと思うからな。当然、来栖さんに否がある。なあ、凛香。いつから来栖さんに会つてないんだ？」

「先月から。その前もほんの少し、会つただけだ」

「やうか……」

まるで凛香の痛みを分かち合つかのよつて、広海が悲しそうな田をして頷く。

「広海……。本当のことを言つと、今年になつてから、ほとんど会つていないんだ。恋入らしい関係は、ここ一年ほど全くない」

「あ……。まさか、そこまで疎遠になつていたとは。俺も知らなか

つたよ」

「向こうがとっくに冷め切つているのは、薄々気付いていた。別れる覚悟はとっくに出来ていい。……つもりだ。いつまでたってもかわいげのない私が嫌になつたんだと思つ。だから、どんな内容を聞いても驚かないし、言つてもらつたほうが逆にすつきりする。だから……」

「俺も、おまえが知つておいた方がいいとは思つ。そりゃあ、知つておるべきだらう。でも結構キツい内容だぞ。本当にいいのか？」

「いい。私は大丈夫だから、あんたの知つてること、全部言つて欲しい。別の女が出来たんだろ？ 違うのか？ ねえ、言つてよ。黙つてないで、早く！」

大方、女問題だらうと見当はついている。

職場にいい人が出来たのかもしない。いや、卒業生からのアタックに負けた可能性もある。

何か言いたげな目をして、それでいてなかなか言い出せない来栖の心の葛藤を、凛香はずつと前から察知していた。

背後に別の女性の影がちらついていることにも、とっくに気付いていたのだ。

広海に言つてもらえれば、耐えられるような気がしていた。

広海なら、凛香がどんなに取り乱しても、きっとそのまま受け止めてくれるはずだ。

広海ならすべてを包み込んでくれる。広海なら、広海なら……。

「おまえなあ……。本当にわざから、反則ばかりやりやがつて。

今の凜香、めちゃくちゃかわいいし。どうか、教師になつてからおまえつて、ホント、別人かと思つてうきれいになつたよな

照れながらそんなことをぬけぬけと公言する広海に、凜香は開いた口が塞がらない。

来栖のことはどうなつたんだ。そんな歯の浮くよくな社交辞令より、一分一秒でも早く話の先を聞かせて欲しいといつて

「去年の春、東高でおまえと久しぶりに顔を合わせた時、悔しいが、いい恋愛をしてるんだなあと思ったよ。ああ、俺はもう完全に出遅れたつてな。でも俺は、今の女らしい凜香もいいが、昔のどんがつた意味不明な凜香も好きだった。あれはあれで、俺のつぼだつたし……」

告白タイムでもあるまいし、気安く好きだったなどといつ広海にますますあきれる。

「私もあのことがあるまでは、広海のこと、結構好きだったかも。相思相愛だったのに、おしこことしたな。フツフツフツフ……」

来栖のことを早く知りたいのはやまやまだが、これは広海なりの気遣いかもしれないと凜香は思い始めていた。

ショックングな事実を告げる前に和ませておこうといつて、ありきたりな作戦だ。

ならばそのお礼にと、極上のジヨークで切り返したつもりだったのだが……。

広海の顔がじわじわと赤くなり、潤んだ瞳で凜香を見つめているではないか。

「う、凛香。相思相愛つて……。ホントにそうだったのか？ それならそりと、なんであの時はつきり言つてくれなかつたんだよう。俺は、ずっと独り相撲だと思ってたんだぞ。なあ、凛香。今から俺達、やり直さないか？」

「あ？ なんでそうなる。凛香は、この男の考えてこることがさっぱり分からなくなつていた。

「広海の馬鹿！ 空気を読めよ、空気を。今、そんな話をしてる場合じゃないだろ？ もう焦らすのはこれくらいにしてくれ。これでも私、結構傷ついてるんだぞ……」

「わ、わかつたよ。俺が悪かった。ごめん……」

広海が決まり悪そりとまことに謝つた。

「うん……」

「それで、さつきの続きだが……。来栖さん、それまで俺に話していたかりんのことは全部嘘で、本当は全く正反対の女性なんだって突然言い出すんだ。彼女の真実を話すと、俺が引くんじゃないかと思つて、正直に言えなかつたらしく」

「なんだ、それ……」

「実は、かりんは元同僚で、男っぽい性格で、こんな女性で、こんなこともあつて……つて包み隠さず話してくれた。もちろん俺は引きはしなかつた。かりんの個性は誰かさんと全く同じだし、世の中にはよく似た人がいるもんだと、逆に微笑ましく思つたくらいだから。それで、その時俺は確信したんだよ。かりんという女性がお

まえだつてことを。いつしか来栖さんは、自分の理想の女性像を俺に話していたんだ。そもそもそんな女性がいるかのようだ。おまえのことは好きだつたけど、いつかは自分の理想の女性像に近付いてくれると、ずっとそう思つて待つていたらしい。でも、おまえは、そうならなかつた……」

「そ、そうだつたんだ……。ちょっとショックかも。どうすればよかつたんだろう。女らしくと言われても、これでも精一杯、女らしつもりなんだぞ！」

「わかつてゐつて。おまえは十分に女らしいよ。そりやあ、言葉は悪いし花柄ワンピースは着ないけど、心も身体も何もかも、正真正銘女だ。誰が何と言おうと、おまえは女だよ」

広海はそう言つて凜香を正面から見下ろし、頬を撫でる。

「……知つたかぶりするな。身体まで確かめさせた覚えはないぞ」

広海の思わずぶりな手を払いのけ、調子に乗るこの男に釘を刺す。
「あー。せつかく優しく労わつてやつてるのに、そんな身も蓋もないことを言つくなよ。おまえは確かに女だつて、一般論を言つたままだる。それと、俺の叶わぬ願望……」

「勝手に言つて」

こんな奴を相手にしたのがそもそも間違いだつたのだ。
この男が語る来栖の姿を、このまま真に受けてもいいのだろうか。
凜香の脳裏に一抹の不安がよぎる。

「俺つて、やつきからおまえにやられっぱなしじゃよな。自分でも情けない奴だと思つよ。でもな、学校では俺の方がずっと形勢が有利だろ? まあ懺悔の気持ちもこめて、『』ではおまえに一歩譲つておくとしよう!」

「私が黙つておとなしくしてゐるのをいいことに、学校でのあなたの横暴つぱりには、ちょいとばかし頭にきてたところだからな。いつか見てるよどぎうと仕返しの機会を伺つてたんだ」

「おお、こわーーー。もう十分に仕返しはもらつたから。これ以上は勘弁してくれよ。で、話はもどるが。東高に転勤が決まった時、おまえ、来栖さんにプロポーズされたんだよな?」

どうして広海がそこまで知つているのだろうと不快な気分に襲われるが、来栖と親しかったのなら、それも仕方ない。

「そ、そうだ」

凜香はとまどいながらも正直に答えた。

「でも、断つた」

広海が有無を言わぬ田代、凜香をじつと見据えて言った。

「そつ……だ」

確かに凜香は来栖に結婚を迫られたことがあった。

別の勤務先になるなら結婚しても仕事に支障はないからと、即、決断を迫られたのだ。

年齢的にも身を固めるのにちょうどいいタイミングだったのか

もしれない。

結婚を機に、家庭に入つて専業主婦になれと言われたわけでもなかつた。

一十七歳といつ年齢や来栖の真面目な性格を考えてもこの結婚話に異論はない……はずだつた。

でも、踏み切れなかつた。なんかまだ遣り残しがあるような気がして、プロポーズを断つてしまつたのだ。

彼が嫌いだとか、別れたいとか。そういうのではなかつた。ただ、結婚だけは違うよつた気がしたのだ。

まさか断られるとは思つてもいなかつたのだらう。来栖はその後も何度も凛香をくどき、プロポーズを繰り返したのだが、凛香の意志が揺らぐことはなかつた。

そんな凛香にも変わらず、来栖は優しかつた。凛香がその気になるまで待つと言つてくれたのだ。

そして半年が過ぎ、一年経つても……。やはり結婚する気にはならなかつた。

もし子供が先に出来ていれば話は違つたのかもしれない。ルーズになつた時もあつたが、ついにコウノトリは振り向いてくれなかつたのだ。

「おまえに結婚を断られた時、来栖さん、かなり落ち込んでたからな。初めは、なんでおまえが来栖さんの求婚を断つたのか、不思議で仕方なかつたけどな。でも考えてみたら、おまえ……。昔から、枠にはめられるのが大嫌いだつたよな？」

「……うん。まあな。家事もあまり得意じゃないし、そもそも結婚

そのものに、憧れも持つていなかつた。でも来栖とは、ずっと一緒にいたいと思つてた。別れるなんて、これっぽっちも考えたことなかつた

「それなのに、断つたんだ。女心はわからん。永遠の謎だな」

「ああ。私もそう思ひ……。断つた理由を、なんて説明したらいいのか。今でもよくわからないけど、生活も含めて何もかも来栖と一緒にというのは、どこか違和感があつて。そんなにべつたりしたら、自分の心の奥まで覗かれそうな気がして、臆病になつっていたのかもしない。だから私のマンションにも、一度も入つてもらつたことがないんだ。広海ならわかるだろ?」

決して不潔にしているわけではなかつたのだが、どうにこいつにも、整理整頓というたぐいの能力が生まれつき凜香には欠如しているのか、部屋の中がすぐに散らかつてしまつのだ。

描きかけの絵から、雑誌類の気になる部分を切り抜いたものも、あちこちに散らばつている。

はたまた授業で使えそうな廃材や空容器まで、床を埋め尽くすほどのモノが常に散乱している状態なのだ。

いくらなんでも、これを見れば、誰だって百年の恋も冷めてしまふだろう。

「全くもつて、おまえらしきよ。昔はよく掃除してやつたよな。どうせ、散らかり放題で誰も呼べないんだろ? 美術専攻してる奴って、美的センスにも溢れてるだろ? から、初めておまえんちに行く時、ちょっとわくわくしてたんだぜ。でも、あれだもんな……。まあ、創作する分には、あれくらいの空間の方がインスピレーション

が湧いて、逆にいいのかもしれないけど。じゃあ、あれか？　あの部屋を知つてるのは、俺だけ？」

「そうだよ。後にも先にも広海だけだ。だつて、あなたの借りてた防音完備のマンション、大学から遠すぎただろ？　私の家の方が駅前にも近くて便利だつたからな。あんたら悪い人じやなさそうだし、寛大な気持で、入室を許可してたんだ」

「許可してくれて、光榮だな。だからと言つちやなんだけど。おまえの部屋を使わせてもらつてお礼を兼ねて、いつも掃除してやつてたんだよな」

「はいはい、そうでした。たすかりました。そのじおんはいつしょうわすれません」

凜香の口から棒読み的な謝辞が告げられる。

広海の顔が突然生氣を失くしたかのように曇る。
あまりにもそつけない謝礼の言葉に氣を悪くしたのだろうか？
もつと気持ちを込めて礼を言えとでも？

「広海？」

凛香は広海の顔色を窺いながら遠慮がちに彼の名を呼んだ。
すると、広海がそれと同時にどしゃっとソファにもたれかかり、目をつぶつて大きく息を吐き出す。
天井を見上げる格好になつた首のまん中で、喉仏が大きく上下するものが見えた。

「……来栖さん、見合いしたんだ。おまえに結婚を断られてすぐに

「見合いで？」

「ああ。来栖さんの親が、勝手に動き出したらしく」

「見合い……」

凜香は力なくそうつぶやいたあと、まばたきもせず、皿の前にある一杯目の琥珀色の液体をじっと見つめていた。

見合いとは、それはつまり、結婚を前提とした男女の出会いの儀式のことだ。

凜香とて、ここ数年、実家に帰るたびにその手の話を親から幾度となく聞かされていた。

客間のマホガニーのテーブルの上には、仰々しい台紙に貼り付けられたビニの誰とも知らぬ男性の写真が積み重なっていたのを思い出す。

来栖が見合い。

凜香は今日まで、全くその事実を知らなかつたのだ。

「来栖さん、何度も見合いを見せられたみたいでな。もちろんそれは、親を納得させるために、形だけのものだつたらしいが、この春に会つた女性と、どうこうわけか意気投合したらしくて……。かりんとのことも、まだきちんとしてないのに、とんでもないことをしてしまつたって、自分を責めてたぞ」

凜香は黙つて広海の話を聞いていた。親思いの来栖ならば、それもあり得るだろ?と妙に納得しながら……。

「まあ、俺は……。来栖さんの言う通り、とんでもないことやつち

まつたなつて思つたよ。でもまさか、まだおまえに言つてなかつたとはな。だからと言つて、俺が来栖さんを責められないのは、おまえだつてわかつてゐるだろ？ 来栖さんの親父さんは八十近いんだ。最初は親孝行のつもりで、しぶしぶ見合いで臨んだんだと思つし……」

凛香は一度だけ来栖の両親に会つたことがあつた。

父親は、温厚で優しそうな人だつた。一人息子の来栖を、まるで孫を見るような慈しむ目で見ていたのを思い出す。

高齢で来栖を生んだと言つていた母親も、その時すでに七十歳を迎えていたはずだ。

「凛香。こんなこと言いたかないが、あきらめろ。あきらめて来栖さんを自由にしてやれよ。俺さ、おまえにかなりひどいことを言つてるつて思うよ。でもな、おまえが結婚を断つた時点で、流れが変わつてしまつたんだよ。……それでもまだ、来栖さんが好きなのか？」

凛香はまつとめて、横にいる広海を見た。

「こなんこと、おまえに説いてどうするんだつて話だが。でも大事なことだろ？ どうしようもなく来栖さんが好きならば。俺だつておまえの力になつてやりたいと思つた。今ならきつたり、そう言つてやれるよ。今なら……な」

「広海……。わたし、わたし……。来栖が、やっぱり好きだ。こんなになつても、まだ好きなんだ……。広海、『ごめん』

「冗談であるにしても、広海が凛香を思つてくれているのは伝わつてくる。

やつ直をうとまで言つてくれた人に向かつて、にじ今まで言つのは、

凛香も心苦しかったのだ。

「そうか。好きなのか……。まいったなあ」

広海が両腕を頭の後ろに回し、ソファの背もたれに倒れる。

「なあ、凛香。何度も言つけどさ。どうしても、あきらめられない？ 俺が来栖さんの代わりになることは、無理なのか？」

「ひ、広海！ なんてこと言つんだよ。広海は広海だろ？ 来栖の代わりになんかなれないに決まってる。私は絶対にあきらめないから。そんな女なんか、来栖のそばからつまみ出してもやる」

まだ、来栖本人から直接聞いたわけではないのだ。

本当のことかどうかもわからない状況で、あきらめるなんて出来るわけがない。

どうしてあの時、来栖のプロポーズを断つたのだろうと、凛香は今じりになつて悔やんでいる自分に気付く。

待つてくれると言つた彼の言葉を信じて、甘えていた自分が今となつては許せない。

じゃあなぜ、結婚しないと決めた時にきっぱりと別れなかつたのだろう。

彼を傷つけたくないて、自分も傷つきたくなくて……。時が二人のわだかまりを解決してくれると思っていたのだろうか。

結局、凛香のうやむやな態度が、ますますお互いを傷つける結果になってしまったのだ。

「ねえ、広海……。今からでも、来栖とやり直せると想つ？ セ

かくのプロポーズを、あんな風に断つてしまつた私が悪かつたって言えば、許してくれるかな？ そんなのことなんか忘れて、私のところに帰つて来てつて言えば、また元通りになれる？ ねえ、教えてよ。広海、教えて！

凛香はいつもを見よつとしない広海の身体を激しく揺すぶり、答えを待つた。

その昔、この田の前の男の元を去つた時、一度と同じ過ちを繰り返さないと誓つて、来栖との恋愛に向き合つてきただつた。なのに、またもや、凛香の手から大切なものが零れ落ちようとしている。

「凛香、落ち着けよ」

ソファにもたれていた広海が、ゆっくりと起き上がつた。

「厳しこじとを言つた……。来栖さんとは、もう元にはもういらないと思つ。だつておまえ、来栖さんに自分を全部ひけ出るのが嫌なんだろ？」

「あつ……」

凛香は呻くよつな声を漏らし、広海を掴んでいた手を離した。

「今、俺に言つたみたいなおまえの気持を、来栖さんにぶつけたことがあるのか？ おまえの部屋にもあの人を入れないんだろう？ どうなんだよ。それでも来栖さんを好きだつて言えるのか？」

「あ、それは……」

「相手を好きになる、愛するってのは、本来の自分を全部相手に受け止めてもらつことなんだ。それが出来るなら、今からでも来栖さんのところに行つて来いよ。俺は止めないから」

来栖のところに行けと言つ男をじつと見ながら、凜香は自分自身に問いかけてみた。

今すぐ彼の元に行つて、この氣持をぶつければいいんだ。
あなたが好きだ。だから見合いをした彼女とは別れてくれとすがりつけばいい。

そして、そして？ それからどうすれば？

凜香の思考はまじでピタッと停止してしまった。

その先にあるのは、もつ結婚しかないとわかつている。

凜香自らが来栖に結婚を申し出るしか、残された道はないのだ。
でも来栖には、意気投合した見合いの相手がいて、彼の心はすでにその女で占められている……。

そんな来栖に、果たしてすべてをさらけ出すことが出来るのだろうか。

冷静になるんだ、落ち着いてじつづく考へると、自分に言い聞かせる。

確かに来栖のことは好きだった。今でも好きだ。でもそれだけでしかない。

凜香はすでに気付いていたのだ。来栖は一生を共にする相手ではないと。

「どうした。凜香、行かないのか？」

広海の声が、凛香の心にすっと入り込む。

「広海……。私、やっぱり、行かない。いいよ、もういい。もういいんだ」

「ホントにいいのか？　後で後悔しても知らないぞ」

「後悔なんて、しない。明日か明後日に来栖に会つて、きちんと話をつける。私が一言、別れようつて言えばいいだけだ。昔、広海の元を離れて、今また来栖を失つて……。私は誰にも心を開けないし、頼ることも出来ない不器用な人間なんだ。こんなかわいげのない男みたいな女なんて、誰にも相手にされないよ。もう恋愛はこりごりだ。一生一人で生きていくことにする。広海も、私みたいにならないうちに、早くいい人を見つけて幸せになれよ」

ありつたけの気力をふりしぶって、そう言ったのに。

おまけに広海の今後のことまで気遣いをしてやつたところに

…。

氣丈さを必死で保つていてる凛香を前にしながら、その男は肩を震わせ、声を上げて笑い始めた。

「くつくつくつ、あはははっ……！　おまえ、やっぱりサイコー。大好きだよ、凛香。そうだ、その通り、誰とも恋愛なんかしなくていいからな。今までどおりまつすぐ前を見て、肩で風を切つて、堂々と学校の廊下を歩いてくれたら、それでいいんだ」

涙を流さんばかりに笑い転げる広海が両手を広げ、きょとんとしている凛香をすっぽりその腕に抱きしめた。

「な、な、何するんだ！」

凜香が身をくねらせて広海の腕から逃れようとするが、ますますがっしりと抱きしめられ、一ミリたりとも動けなくなる。

「や、やめてくれ。それに、何だよ。学校の廊下を肩で風を切つて歩けとか。私は背が高いのに姿勢がいいから、そう見えるだけなんだ。ふ、ふざける、なーー！　く、苦しい。離せよ、離してくれよー！」

「嫌だね！　こんなかわいい凜香を誰が離すものか。来栖さんありがとーー！　おまえね、俺にだけ、何でもさらけ出してくれるんだぞ。そこんとこ、わかってる？　もう、今夜は帰さないぞ。そうだ、おまえ、体の具合、悪かったんだよな。ふふふ……。俺が、寝ずの看病をしてやるぞ。だから心配はいらぬから……って、おい、こりー！　凜香！　大丈夫か？」

「ひ、広海……。もう、だめ……だ」

その日一度田の貧血を起こした凜香は、そのままソファに倒れこんでしまい、本当に寝ずの看病をしてくれた某校の音楽教師に、次の日の田の明け方、丁寧に自宅に送り届けてもらつことになった。

意識が朦朧とする中、また何度も自分の名まえを呼んでくれたと、ハンドルを握る広海が嬉しそうに報告してくれる。

そして、ショーマンのあの曲を弾いてくれと頼まれたとも言つて、満足そうにフフンと鼻を鳴らした。

凛香は広海の言つことを全部信じたわけではなかつたが、クライスレリアーナを弾いてくれと頼んだことだけは、薄つすらと記憶の片隅に残つていた。

おまえが元気になつたら全曲通して聴かせてやるが、今となつては、あまり気持ちをこめて弾けないかもしないな……と、早朝の車の中でしたり顔で話す広海に、凛香はどうしてと訊ねてみた。

ところが広海は、知りたければ、図書館やネットでショーマンについて調べるとしか言わない。

決して口を割らない広海にこれ以上訊いても無駄だと観念した凛香は、絶対に自分で調べてやると、持ち前の負けん気を炸裂させる。売られた喧嘩は買うしかない。

が、クライスレリアーナを聴くといふことは、また広海と一人で会つといふことだらうか。

そう思った瞬間、凛香の思考回路がショート寸前になり、心臓のリズムまで狂いだすのがわかつた。

タベ、ずっと手を握つていってくれたのは、他の誰でもない、広海だった。

そのぬくもりが、今まで彼女の指先に蘇り、凛香の心を再び乱されさせるのだ。

凛香は、自分の中で何が始まったのを、今、確かに感じ取つていた。

夏休みもいよいよ今日が最終日だ。生徒達は今頃、徹夜覚悟で宿題と格闘中に違いない。

まあ、ほじほどにがんばれよと凜香はクラスの生徒の顔を一人一人思い浮かべ心の中でエールを送った。

美術の課題は、一年が水彩写生画と文化祭のポスター。

一年は四コマ漫画と文化祭のパンフレットの構成が課せられている。

そのうち文化祭で使い物になるものは、多分一割くらいだらうと予測する。

悲しいかな、本当に美術が好きで授業を選択した生徒ばかりではないのが現状だ。

書道は墨の後始末が面倒くさいし、音楽はクラシックがうざいし……などと散々文句をたれた挙句、消去法で美術を選んだ生徒が多いのは今も昔も変わらない。

ところが広海がこの学校に赴任してから、音楽を選ぶ男子生徒が増殖中だと聞く。

ギター や ドラムなども使って、学期末にはミニコンサートまで開催する熱の入れよう、音楽本来の楽しさを知った生徒がここぞとばかりに押し寄せる。

吹奏楽部にも続々と入部者がやつてくるといふから驚きだ。

広海が生徒の心を掴むのがつまいといつのは来栖の話から推測していたので、まさしくその通りだと、認めざるを得ない。

凛香も広海の熱心さに誘発されて、負けじとやがれまなことを取り入れてきたつもりだ。

漫画を題材にした実技演習も行つし、本格的な陶芸も窯元の協力を得て実現させた。

漫画といえば凛香が高校生の頃、あつかましくも出版社に投稿したことがある。

大賞や準大賞、佳作など名のある賞は逃したもの、入選者の中に名まえが載つたのを昨日のことのように思い出す。

その時の審査員の講評は……。

背景の書き込みはある一定のレベルに達しているが、キャラクターが淡々とし過ぎて、面白みにかける。次作に期待したいというものがった。

もちろん、それつきり投稿はしていない。漫画には早々に見切りをつけたのだ。

当時のGペンも、スクリーントーンもまだ凛香の机の引き出しのどこかで眠っているはずなのだが。

しかしもう一度と使うことはないだろう。部活の漫画好きの生徒に譲つてもいいかなとふと思つ。

凛香は冷房が心地よく効いた自分の部屋でパソコンの画面を前に、キーボードの上で手の動きを止めて思考をストップさせていた。

こんなことをしている場合ではないというのに……。

風紀関係のプリントの原稿を今夜中に作り上げ、明日の朝、生徒が登校してくる前に印刷することになっているのだ。

と書つても、去年の原稿に少し手を加えるだけだから、そんなに時間はかかるない。

それが終われば、後はもう寝るだけだ。まあ、パソコンの調子が

良ければといつ条件つきではあるが。

結局、七月も八月もカレンダードおりの出勤で、有給休暇も自己研修も取らなかつたといふか取れなかつた。

もちろん部活もあるので土曜日も日曜日も大方出勤していた。つまり、ほぼ毎日学校に出向き、広海と顔を合せていたという勘定になる。

蓄積された疲れが肩や腰に重くのしかかる。休みが……欲しい。この時期に及んで、凜香は切実にそう思った。

パソコンデスクの隅でキラリと光る、細い鎖状のアクセサリーの残骸が目に入る。

凜香はそれを見ながら、一週間前に来栖と会つた日のことをぼんやりと思い出していた。

「これは、かりんちゃんが持つてくれたらいいよ。返してもいいわおうなんて思つちゃいないわ」

「でも。私が持つても、もう……。先生の、その。彼女さんに、悪いし……」

凜香は、来栖が指定してきた創作和食料理の店の奥まつた席で、筆箱の大きさくらいの箱を、相手に差し出していた。

「君がそんな気を遣う必要はないよ。邪魔になるよつだつたら、シヨップに持つて行つて、売ればいい。ブランド物じゃないし、たい

した金額にはならないけど、金やプラチナとしての最低限の価値はあるだろつかい」

さつきから繰り返される押し問答に、とうとう凛香が折れる。その小箱を引き戻し、カバンにしまった。

中身は一本のネックレスと、ファッショングリーンだ。何かの節目に来栖が選んで凛香に贈ったものだった。

ネックレスの内の一つは、凛香も気に入っていて、肌身離さずつけていたものだ。

あとの一つは、あまりにもデザインがかわいらしくて、ほとんど身につけたことはない。

別れるからといってすぐに捨てるのも忍びなく、来栖に引き取つてもらおうとした、家からこそと持ってきたのだ。

「かりんちゃん。本当に、ごめんな。もっと早くに会って、君にきちんと言つべきだったよ。悪かったと思つてる」

「ううん。終わったことはもういい。私だって悪かったと思つてるし。ちょうど、先生が見合いをしてる頃だつたと思うが、あの頃、先生が何度も誘つてくれただろ？でも、私がそれを断つて……。確かに仕事も忙しかつたけど、時間を作れないわけじゃなかつた。先生が何かを言いたそうにしてるのは気付いていたんだ。それを聞くのが怖かつたんだと思う。それに、せつかくのプロポーズも断つてしまつたし……」

「あの時に、きちんと別れるべきだつたよね。僕も未練がましいことをしたと思ってるよ。いつかは君が僕のプロポーズを受けてくれるんじゃないかと信じてた。なのに、結局僕の方が君を裏切る結果になつてしまつて。ねえ、かりんちゃん。僕の話、鶴本から訊いた

「んだろ？」

「えっ？ それは、違う……。昨日、先生に電話するまで、知らなかつた

かりんちゃんは、嘘はつけないからね。彼を傷つけまいと、そう言つてゐるんだろうけど……。鶴本は、君のこと、好きなんだろ？ あいつも君と同じで、嘘がつけないからな……」

凛香は思ひがけない来栖の言葉に息を呑む。

どうしたことだらう。来栖は凛香と広海の関係は知らないはずだ。なのに、どうして？

「僕が気付いていないと思ってた？ 鶴本はね、僕を困らせまいと思つたのか、ずっとかりんちゃんのことを知らない振りして、話を聞いてくれていたんだ。でもね、クリスマスが近い十一月のある日に、鶴本と飲んだことがあって。僕が席をはずして、戻ってきた時、あいつ、何かを口ずさんでるんだよ。よく聞いてみると、かりんちゃんが時々ハミングしてたのと同じ曲だつたんだ。クリスマスのなんとかって言つてたよね？ かりんちゃん、言つたよね。この曲は大学時代の忘れられない曲だつて。誰が作つたのか知らないけど、クリスマスが近付くと、ついつい口ずさんでしまうつて。あれ、かりんちゃんが作つた曲だつたんだね」

凛香は目を見開き、しばらぐの間呼吸をするのも忘れて、来栖の口元だけをじつと見ていた。

「ああ、そんなに驚かないで。君を非難するつもりで言ったんじゃないから」

来栖が困ったように眉をひそめ、日に焼けた顔を曇らせる。
ひと目でスポーツマンだとわかる頑強そうな見かけからは想像もできない優しそうな声と、落ち着いた物腰は、久しぶりに会った今夜も全く変わりはない。

さわやかな体操のお兄さんスタイルはまだまだ健在のようだ。

「不思議に思った僕は、鶴本に訊いたんだ。それ、何て曲？　って。そしたら鶴本が、急に顔色を変えて、口を閉じてしまった。あいつ、無意識に口ずさんでいたんだね。これは何かあるなと思った。なかなか言つてくれなかつたけど、僕のしつこさに負けて、ある人が作った思い出の曲だとやつと白状してくれたんだ。ある人つて、もしかして、鶴本の好きな人だつたりして……と『冗談半分で訊いたら…』。図星だったみたいで。照れて違う違うとしきりに否定してたけどね。ああ、なるほどね、そういうことかって、すぐにわかつたよ。あいつ、かなり飲んでたからな。いつたいどれくらい飲んだんだよ。つてくらい、酔つてた。それで、口が滑つてしまつたんだろうな。この曲を知っているのは自分とその人と、ごくわずかな人だけだ……つて言つてた。その人のことが今でも忘れられない、とも……。付き合つてる彼女には、絶対に言えないって、苦笑いを浮かべてた」

凜香は心の中で、広海のバカと毒づく。広海が底なしなのは、学生時代もそうだったし、学校の飲み会でも確認済みだ。

でも、酔つてるそぶりは見せず、いつも淡々としていて、済ました顔をして帰つていく広海しか知らない。

酒の勢いで、自分でも気付かぬ間にそんなことまでしゃべってしまったのだろう。

凜香は何も言えずに俯いたまま、店員がこまめに継ぎ足してくれる緑茶のゆげの行方を追いながら、尚も話を続ける来栖に耳を傾けた。

「次の日だったかな、君に会つた時、またもやあの曲を口ずさんでいる君がいて……。もう間違いないって思った。実はかりんちゃんが鶴本の忘れられない彼女なんじゃないかってね。一人は同じ大学の同期だけど、美術と音楽じゃ接点がないし、お互いに知ってるはずはないだろ?」と思いつ込んでいた僕が甘かっただってわけだ……

「せ、先生……」

凜香は顔を上げ、不安そうな目で来栖をじっと見つめた。

「鶴本の彼女とはすでに何度か会つたことがあつたから、そろそろかりんちゃんのことをきちんと紹介してもいいかなとも思つてた。でも、鶴本の忘れられない人が、僕の直感どおり君だとしたら。到底、二人を会わせるなんて出来ないよね。君と鶴本を再会させると、何かが変わってしまうんじゃないかと思つて怖くて……。結局、あいつにはまだはつきりと、僕の彼女が君だとは伝えていない。鶴本も、君を知つているとは絶対に口を割らないからな」

来栖がお茶を一口飲み、また話し始める。

「君の転勤先が東高だとわかつた時、僕がどれだけ動搖したと思う? 何かの間違いじゃないかと、君に何度も訊き返したよね。だからあの時、すぐに君にプロポーズしたんだ。ここで君を捕まえてお

かないと、取り返しの付かないことが起こりそうな気がして。でも君はそれを受け入れてくれなかつた

「先生、ごめん。言い訳はしないけど、あの時は、うんと素直に言えなかつたんだ。相手が先生じゃなくても、きっと断つてた。結婚なんて考えたこともなかつたから。でもこれだけは信じて。私は、鶴本のことは、東高に赴任するまで、同僚になるなんて知らなかつたんだ。それに、私たち、ずっと絶縁状態だつたから……」

「絶縁状態？なるほど……。鶴本の態度がおかしかつたのはそのせいか？」

「かもしれない。大学在学中に大喧嘩をして、それつきり。だから、私が先生のプロポーズを断つたことと鶴本は、全く関係ないんだ。だから……」

「わかつてゐる。信じてるよ。君が嘘をつけないのは、僕が一番よく知つてゐるから……。その頃、親からも結婚はまだかつてせつつかれていて。君に断られた事実を知らせたとたん、君と結婚するとばかり思つていた親がひどく落胆して、親父は入院するし、お袋も泣いてばかりで……。いつまでも元気だと信じて疑わなかつた両親の実状を思い知らされた。挙句、誰でもいいから見合いをしろと泣きつかれて。三十四歳にもなる独身の息子が家にいるのは、親の世代には苦痛でしかないらしい。とにかく形だけでもこなせば、そのうち親もあきらめるだろうと簡単に受けたんだ。相手の女性には悪いと思ったが、気乗りのしない最悪な態度で見合いをして、なるべく向こうから断らせるように仕向けた。あと一回だけという約束で三度目の見合いをした時……。今の彼女と出合つてしまつて。スポーツクラブのインストラクターをしている彼女とね。そしていつの間にか、お互いに……。僕はいったい何をやつてるんだろうって、

自分が情けなくて。そのうち、君に会わせる顔もなくなつて……」

「先生。もういいよ。その彼女。きっと先生の好みの女性なんだろ？　おしとやかで、優しくて」

「かりんちゃん。君にそこまで言わせてしまつて本当に申し訳ない。でも、違うんだ。どちらかと言つて、君に似てるかもしれない。さつぱりした性格で、彼女も学生時代、僕と同じで水泳の選手だつたんだ。でもこれだけは言わせて。君のこと、ほんとに好きだつた。君と付き合つた三年間は、僕の今までの人生で一番幸せな時間だつたよ」

「私も。先生から優しさをいっぱいもらつた。先生、ありがとうございます。今なら……。心からそう言える」

付き合い始めはそんなに好きではなかつたはずだが、月日を重ね付しきりに愛情を育んでいく、そんな恋愛だつたと思つ。

「こんな僕を許してくれるのか？　何を言われても、それこそ、殴られてもいいと思つくらい、今夜は覚悟を決めてここに来たつもりだ。君が許さないといふなら、彼女と別れる心積もりもある。僕はそれくらい君に対してひどいことをしたと思つてる」

来栖が自分自身を許せないと呟つくり、肩を怒らせ膝に乗せた拳を握り締める。

「先にひどいことをしたのは、私だから。先生の結婚の申し出を断つておきながら、今まで引きずつてきたのは、この私なんだし。実は、一昨日、鶴本に叱られたんだ。自分自身をさらけ出して、もう一度先生にすがつてこいつってね。でも、出来なかつた。素直になれ

ない自分が疎ましかつた。私は一生恋愛なんて出来ないって、ようやく自覚したのかもしれない」

凛香は広海に言われた夜のこと思い出し、ふふっと小さく笑つた。すると来栖が不思議そうな顔をしてじりじりを見ていた。まるで凛香の心の奥を探るような目をして。

「鶴本が？ そんな」と、言つたのか？ そうか……。かりんちゃん、やつぱり鶴本に……」

「あっ、いや、やつじやなくて。ただ、私の体調が悪くて、迷惑をかけたんで。その時に、ちょっとそういう話になつて……」

ついでに知れられて、抱きしめられたんだなんて、口が裂けても言えない。

勝手に見合いをした来栖と同罪か、それ以上の大罪になつてしまつではないか。

「わかつてるよ。君が僕に対して常に忠実であつてくれたってことはね。問題は鶴本だ。君が僕のところに行かないって、絶対的な自信があつたんだろうな。その証拠に、君は今、僕に別れを告げに來た」

「うそ……」

「かりんちゃん」

来栖がこつちを見る。その眼差しは凛香にとって、痛いほどに真つ直ぐなものだった。

「な、何？」

あまりにも瑠璃無い視線に、凛香はたじろぐ。

「ありがとう。今まで、本当に、ありが……ど」

来栖が精一杯の笑みを浮かべてそう言った。

「あ、ああ……。しかしね、ありがとう」

凛香は心から素直にありがとうの言葉が言えたと思つた。
本当にこれで最後だと言つのに、涙が零れ落ちることもなかつた。
来栖も泣いてはいなかつたが。その声は震えていて、涙を堪えて
いるようにも見えた。

その店を出た時、来栖が乗ってきた車で送りと申し出てくれた
のだが、もちろん凛香はいによと言つて首を振つた。
来栖の隣のシートは、もう凛香の場所ではないのだから。
じゃあと軽く手を上げてそれの方に向に歩き出したのを最後に、
振り返ることもなかつた。

電車の中でも、マンションまでの道中でも、寂しさは一切感じなかつた。

こんなことなら、もつと早く話をするべきだつたと思つほひに、
あつけない幕切れだつた……と思つたのだが。

部屋に入つて、化粧を落とし、シャワーを済ませて……。

ベッドに入ったとたん、胸が苦しくなり、目の奥が熱くなつて得

必死にこらえても、それは押し留めることができなくて、枕に埋

めた顔から嗚咽が漏れ、凛香はそのまま朝まで延々と泣き続けたのだった。

鎖状のアクセサリーの残骸を握り締め、またパソコンデスクの上にそっともどした。

来栖と別れてから一週間経つ。あれ以来、凛香は来栖を思つて泣くことはなかつた。

あの時に流した涙と共に、来栖のことは、もう完全にふっきれたのだと思つ。

パソコンの画面を眺めながら、凛香はハツと我に返る。

そうだそうだ、忘れるところだつた。広海の思わせぶりなショーマンの話を調べようと思っていたのだ。

広海ときたら、凛香を見下したような傲慢な態度で、知りたかつたら自分で調べるなどと言い放ち、心をこめてクライスレリアーナが弾けなくなつた理由とやらを教えてくれなかつたのだ。

検索の枠内にショーマンと打ち込んで、隣のボタンをクリックした。

ところが動かないのだ。マウスを何度も押しても、画面は固まつたままで変化がなかつた。

もしかしてフリーズ？

凛香は罪のないキーボードを、破壊しない程度に加減してパシッとたたき、椅子からずり落ちるようにして散らかつた床の上に、コロンと寝ころがつた。

検索枠に置き去りにされたままのショーマンの文字が、まるで
ざ笑うかのように凜香を見下ろしていた。

21・フリーズ

もしパソコンの画面が、この後もずっとフリーズしたままだったら。

買った店に、このノートパソコンを持ち込んで、修理を頼むしかないのだろうか。

以前も同じような状況になつた時、来栖に部屋を見られたくない凛香は、誰にも助けを求めることがなく、一人でこそこそと店に壊れた……と思われるパソコンを持って行つたことがあった。

お助けコールセンターなるものの案内も説明書に書いてあつたが、電話の説明ごときで解決するほどの簡単な不具合であれば、とっくに自分で修理できるはずだ、などと自信があるにもほどがある……くらいの間違つた判断を下した凛香は、善は急げとばかりに救急病院に駆け込むがごとく、店の修理カウンターに出向いたことがあつたのだ。

そして、店員に不具合状況を説明し電源を入れたままのパソコンを差し出すと、ものの数秒で問題は解決して……。

お客様、どこも壊れていないようですがけどと言われ、にっこりと特上の営業スマイルを返される。

あとは、すこすことパソコンを抱えて帰つていくしかなくて……。

そんな赤っ恥をかくのはもう沢山だ！ 凜香は誰もいない部屋で、思わずそう叫んでいた。

強制終了して、一から立ち上げるべきなのか。

それとも、鼻歌交じりで難なくパソコンを操るあの**懲懃無礼な音**

楽教師に出張修理を頼むべきなのか……。

凛香のパソコン恐怖症は何も今に始まったことではない。

普段から堂々とアーログ派宣言をしている凛香は、ペントタブを使って画面を見ながらすいすいとイラストを描き、色付けまでしてしまつ生徒の適応能力の速さにひたすら感心し、自分のふがいなさを恥じてもいた。

だからと書つて、ここに広海を呼んだりしたら……。それは向こうの思う壺ではないかと、凛香は天井を見上げながら、思いとどまる。

というのも、凛香が音楽室で広海のピアノを聴きながら倒れてしまったあの日から、毎日、車で家まで送つてくれているのだ。

里見栄子がそばに居ようが居まいが、有無を言わせずに凛香を車に押し込む。

おかげで、栄子の視線が何気に殺氣を帯びているのはもちろん、遅くまで残つているじへー部の生徒からも冷やかされる始末だ。ほんとに最近のませガキときたら……何がヒューヒューだ。

広海曰く、補習講座を無理やり手伝わせてしまつたせいで鷺野先生を過労に追いやつた……と、そもそもともうじつ理由を周囲に吹聴して自分の行動を正当化している。

近所に住む職員同士が一台の車に乗り合わせて出勤や帰宅することはよくある話だ。

凛香と広海もその一環だと見られているため、まさか広海に下心があるなどとは職員は誰も気付いていない。

ましてや、学校一の変わり者として名高い凜香を相手に、広海が恋愛感情を持つなどと誰が思うだらう。

あの気難しい鷺野先生を気遣う责任感の強い鶴本先生として、広海の評価がうなぎ上りなのは、凜香にとっては不本意でしかなかつた。

凜香は普段あまりアクセサリーを好まないが、ひとつだけ身につけているものがあった。

それは来栖にもらつた、ゴールドの細い鎖状のネックレスだ。

軽くてあまり目立たなくて。シンプルなシャツにも映りがいい。来栖からもらつたからというよりも、凜香が持っている中で、唯一、使いやすいアクセサリーとして、日々愛用していたのだ。

そして、そのネックレスを広海に指摘されたことから、昨日の帰宅途中、大喧嘩に発展してしまったのを苦々しく思い出していた。付き合っているわけでもない相手に、お気に入りのアクセサリーにケチをつけられ、外せ外さないの大騒動になつたあのことを……。

広海の質問に正直に答えただけなのに、そのネックレスが来栖からのもろいものだとわかつたとたん、乱暴に車線を変更し、路肩に寄つて急停止する。

「そんなもの、未練がましくつけるな！」

と、広海らしからぬ剣幕でののしられ、

「放つといてくれ！」

と、これまた大声で凜香が気丈にも言い返す。

一度とあんたの顔なんて見たくないと怒鳴つてその場で車を降りた凜香は、怒りに任せて首に手をやり、次の瞬間、そのネックレスを引きちぎつしまったのだ。

細めのゴールドのチェーンが、凜香の手のひらで無残な姿をさらす。

無意識にとつた自分の行動に、凜香自身が一番驚いていた。

一部始終を見ていた広海が車を降り、黙つて凜香の腕をつかむと再び車に押し込めた。

「じめん……」

先に謝つたのは、もちろん広海で。

まだ呆然としている凜香の右手を広海の大きな手が遠慮がちに包み込む。

そして向かつた先はデパートのアクセサリー売り場。

千切れてしまったネックレスのお詫びにと広海が選んだ物はプラチナメッキのチェーンに人工ダイヤのトップがついたものだつた。確かに手に取つたものはイミテーションで、一万円にも満たないものだつたはずなのに。

家に帰つて開けてみた商品には、鑑定書のようなものが添えられ、本物のプラチナとダイヤで出来たものにすり替わっていたのだ。

いつの間に……。支払いの時、広海が店員とこそこそ話していたのはじうじうわけだったのかと、ようやくそのからくくりに気が付く。

これは高い。絶対に高い。こんな物をもう一つ理由はないと、すぐ
に電話をしたのだが。

「 もうひとつ、ボーナス払いにしてもらひたから、今は痛くも痒くも
ない。……まあ、俺にしてみれば結構な出費だつたかも知れないけ
ど、給料の三か月分にはまだまだ届かないくらいのものさ。心配す
るな。ダイヤも小さいし……。まあ、給料一ヶ月分つてことで。ク
ライスレリアーナが以前ほどリアルに弾けなくなつたお詫びだ。だ
からもう。来栖さんはつけるな。俺のささやかな願いを叶えてく
れよ……」

と、なんとも意味不明な返事をもらひ、ますます困惑してしまつ
た。

でも、嬉しかつた。理屈抜きに、嬉しかつた。
いくら気に入つていたからとはいえ、来栖の思い出を引きずつた
ものを平氣で身につけていた自分の浅はかさにも気付かせてくれた
のだ。

広海には感謝してもしきれない。

その夜、今度こそ本当に、来栖とはすべてが断ち切れたよつた氣
がして、心が軽く浮上していくような気持になつた。

そして、広海の電話を切つた後、もう一度広海の声が聞きたくな
つたのは……。

多分、本当だつたのかもしれない。

そして、翌日。つまり今日の朝、どいか腑に落ちないまま、この
ネックレスをつけて出勤してみた。

タベは嬉しいと思つたのだが、やはりどいつ考へてもこれは高価す

さるのではないかと首を傾げてしまつ。

でも、広海の願いとあれば、もりつべき品物なのだらうなど……。

いかにもつけてますと見せびらかすのは、教育上の配慮として慎むべきだ。

そんなもつともらしい言い訳を自分自身に言い聞かせながら、学校内ではシャツの中に隠してつけていたが、帰りに広海の車に乗り込む前に一番上のシャツのボタンをはずして、少し見えるようにしてみた。

案の定、田代とくそれを見つけた広海が、喜びの声を張り上げる。なんとも大袈裟なやつだ。

「うおおおお！ 凜香姫。それ、つけてくれてたんだ。俺はてつくり、袋」と突き返されるんじゃないかと思っていた。それにしても、似合つねー。昨日つけてたやつより、百倍似合つ。いや、何万倍も似合つよ。なあ凛香。これから俺とデートしない？ 焼き鳥専門のうまそうな店を見つけたんだ。おまえには、レバーをたっぷり食わせてやるから……」

などと調子付く広海に丁寧にお断りして、七時じう家に送り届けてもらつた……といふわけだ。

焼き鳥に少しばかり未練があるが、広海がデートなどと言つものだから、はいそつですかと簡単にに行けなくなつてしまつたのだ。

俺と付き合つてくれと……。広海の真剣な言葉を、来栖と別れだからまだ一度も聞いていない。

それに、いくら貧血がひどいからと言つて、レバーばかり食べさ

せられたんじや、たまつたものじやない。

レバーが苦手な凜香は、その単語を思い出しだけで、ぶるっと身震いしてしまった。

やつぱり広海は広海だ。いつまでたつてもある頃のまま。

ましてや、凜香は正真正銘、恋人と別れたばかりで、少なくとも傷心真っ只中……の妙齢の女性なのだ。

なのにあの態度。デリカシーの欠如した広海の数々の言動にげんなりする。

シャワーと簡単な夕食を一人で終えたあと、風紀のプリント作成の仕事をして、ネットでシユーマンを検索したら、即行フリーズ。

まことに残念極まりないが、このままパソコンが動かなければ、残された道はただひとつ。そう、選択肢はあれしかない。

凜香は床に寝つこうがつたままベッドの上にある携帯に手を伸ばし、たぐり寄せる。

一人寂しく焼き鳥を食べているであろう広海の携帯番号を表示させ、ふうっと大きく息をはく。

そして、五秒間その番号をじっと眺めたあと。

ぐるりと腹ばいになつた勢いで、通話ボタンをぎゅっと押し込んだ。

22・むづ絶対に離れない

「もしもし……。広海？」

『はあ？ 誰？ あつ、ああ……。凜香か。じめん。俺だ』

相手を確かめもせず電話に出る広海にて、あきれて物も言えない。

『どうした、凜香。やっぱり焼き鳥食わせるとか、今やうまいなよ。おまえに振られっぱなしの寂しい俺は、あれから「ソラーノ」に寄って、カップラーメンを二つ買ってだなあ。それ食つて、酒を飲むのもやめて。おついでにピアノを弾いていたんだが。それにしてもおまえ、冷たすぎなんだ。せっかく誘つてやつたのに、なんで……』

意外にもすぐ電話に出てくれたまではよかつたのだが、その後の話は余計だ。ぐじぐじと、「わざことこの上ない。

「パソコン、壊れた」

とにかく広海のオンラインステージを途中で遮断して、用件を簡潔に述べる。

『なんで行かないって断るんだよ……つて、ええ？ 何だつて？ 壊れたのか？ パソコン……が？』

「うん。おかしくなった。画面がフリーズしてる……

『殴つて壊したんじゃないんだな？』

「んなわけないだろっ！ ちょっとは、その。殴つたけど……。でも、そんな壊れ方じゃないから。ああ、だからいつも言つてるんだ。パソコンなんて大嫌だつてな。なんですが壊れるんだよ！ 広海が自分で検索して調べろつて言つから、こんなことになつたんだ！ あんたのせいだ！」

凜香は腹ばいになつたまま、握りこぶしで床の上を『ン』と叩いた。

『おまえのパソコンが壊れたの、俺のせいだつて？ やつてらんねえな。俺が遠隔操作でおまえのパソコンをぶつ壊したとでも？ なんことあるわけないだろーが。つたぐ、しょつがないな。なら、強制終了してみ。主電源ブチつて切つて』

「そんなんことして、もつと壊れて……。一度と電源が入らなくなつたうどいてくれる？..」

『あああああっ！ 難しいこと言つなよー。そんなもの押さえて、どうじろつて言つただ！』

『わかつた。わかつた。ほんとに情けない奴だな。じゃあ、そのまま待つて。今からうちに行くから』

「……つて、来るな！ 来なくていい！ おい、広海？ こいつ…返事しろよー！」

切れてる。電話……。広海の返事はそれつきり途絶えてしまつて。凜香は仕方なく相手を見失つた携帯を切り、むづくつと起き上がりつた。

そして物に埋めつくされたフローリングの床をまじまじと見渡して、あきれたようにため息をつく。

これはひどい。たとえその景色に免疫のある広海といえども、この部屋に通すわけにはいかない。

ならば……。パソコンを抱えて、マンションの玄関ドアに待機して待ち伏せするはどうだらう。

住民に不審な田で見られても、この際、田をつぶるとして。

でも、いくら近いとしても、ここに来るまでは十分以上かかるはずだ。

着替える必用もあるだろうし、戸締りやら、車のキーはどこだつてと室内をあちこち探す時間も必要だ。

せせりと床を片付けて、広海を出迎えると、うつ選択肢もある。

ただし、せせりと片付けたものをどこに置くのかがまたもや問題になる。

リビングもクローゼットも、我が家にはどこのもやんなんゆとりはない。

しかしそく考えてみれば、広海はパソコンを修理しに来るだけなのだ。

この部屋が散らかっていようがいまいが、彼には関係ない。パソコンが直るのなら、この部屋を見られることがくらい、別にかまわないじゃないか。

凜香はそつと決めたら急に元気になり、すくと立ち上がり、湯を沸かすためキッチンに向かった。

えつと、コーヒーはどこだつてと棚を物色していくと、無情に

もインター ホンが鳴り、来客を告げるのだ。

な、なんと。広海だった。いくらなんでも早すぎのではないか。
凜香は計算違いをしていたことにはたと氣付いた。広海にかぎつ
て、車のキーを探し回る時間を計上する必要などないといふこと
……。

凜香は、とんでもなく早く着きすぎたその来客のためにオートロ
ックを解除し、玄関ドアの前に力なくたたずむ。

ドアを開けて入ってきたのは、Tシャツにハーフパンツ姿でにっ
と笑ってみせる、昔のままの広海だった。

「あ、これでオッケー！ これしきのことで慌てるな。簡単取り扱
い説明書つてやつをノートパソコンのそばにおいておけ。で、今俺
がマークーでチョックしたところを、そのとおりにやればいいんだ
な？ 簡単だろ？」

広海が我が物顔でつかつかと中に入り込み、中腰のままでいくつか
のキーをちょちょっと押さえて、あつという間に固まつた画面を修
復する。

何事もなかつたかのように、いつも通りのトップページがデスクトッ
プに浮かび上がった。

「あ、ありがとう。助かった」

凜香は無事元に戻つたパソコンの前に座り、横で満足そうな笑み
を浮かべる出張修理マンにとりあえず礼を言った。

「いえいえ、どうぞたましむ」

「お礼は「コーヒーしかないけど。車なんだろ? ならアルコールは……」

「ああ。それより凛香。あなたさまは、ショーマンを検索されましたか……。よければ、私どもが続きをお調べしましょつか?」

広海の妙にへりくだった物言ひが、瘤に障る。

「いいよ。後で調べるから……」

凛香はせっけなく返事をしながら、しまったと心の中でつぶやく。あの画面のままフリーーズしたので、検索欄のショーマンの文字を広海にバツチリ見られてしまったのだ。

不覚だった。まるで、広海のことが気になつて仕方ないみたいに思われなかつただろうか。

今こじでショーマンについて調べて、広海にしたり顔でもされようものなら……。

凛香のプライドはずたずただ。いつこいつのは、あとでこいつをつ調べるに限る。

「おまえさあ。あのこと、知りたいんだら?」

立つたままの広海がにせにせしながら、椅子に座つた凛香を見下ろす。

「べ、別に

凛香は出来る限り平静を裝つて、画面にさざとじりじりへ風紀関連のプリント文面を呼び出し、そ知らぬふりを続ける。

「またまたそんなこと言つちやつて。ホントに素直じゃないな。ほら、ちよつとどいてみ」

「えつ、あつ、な、なんだよ！」

「シユーマン、クライスレリアーナ……っと。これでどうだー。」

椅子から放り出された凛香は、広海の指がキーの上をすべるように走つていく様子に目を奪われていた。

男性にしては細くて長い指が、まるでピアノの鍵盤操るかのように、なめらかで無駄のない動きを見せた瞬間でもあった。

「おっ！ こりこりヒットしたな。うーん、これがいいかな？ まあ、読めよ」

画面にはシユーマンの肖像画と、クライスレリアーナの説明が記されていた。

広海と場所を入れ替わるようにして、今度は凛香がパソコンの前に陣取る。

「シユーマンはクララとの恋愛がまだ成就していない頃、自分の恋の苦しみを、ホフマンのこの同名の恋恋の物語に重ね合わせ作曲したと言われている……」

恋恋の物語？ クライスレリアーナが？

クララといつのはシユーマンの奥さんだ。

そこには、シユーマンが奥さんを振り向かせるために、いろいろ苦労したといつはが、つらつらと書かれていた。

「ははは……。どうだ。俺もいつぱしに、おまえに苦惱し続けてきたからな。でも、もう俺のクララは、どこへもいかないだろ？ なあ、凛香？」

広海はこれまで、シユーマンと自分の心情を重ね合わせて、クラスマニアを弾いていたとでも言つのだろ？

全くもって信じられない。凛香が広海と決別してからも、他の女性との噂が絶えなかつたはずだが……。

白々しさともほびがある。大声で、あざ笑つてやうつと呟つたの

「……。

どういふわけか、胸がじりじりと痛むのだ。

広海がそんなに思い悩むほど自分が女として値打ちがあるなどと、凛香には到底思えないからだ。

広海には、もつとふさわしい人がいるはずだ。なのに、どうじつ

……。

過去にあんな別れ方をしたにもかかわらず、倒れた凛香を誠心誠意看病してくれたあの日も。

そして、過去の男のネックレスをつけていることに本気で嫉妬して、代わりの物を贈つてくれたことも。そのどれもが、広海の真剣な気持の表れなのだとしたら。

凛香は、胸元のダイヤにそっと手を当て、締め付けられる胸の痛みが治まるのを待つた。

その時、背中にふわっと風が当たったような気がして、後を振り返ろううとする。

すぐ横に広海の顔が現れて、椅子の背もたれにしてから彼が抱きついて来るのがわかる。

始めは柔らかく。そしていつの間にか、身動きも出来ないくらい、強く抱きしめられているのだ。

「なあ凛香。俺の気持ちは、もつわかつてゐだろ?」

首筋にかかる広海の吐息が熱い。

「ちよ、ちよっと、広海。何を……」

「いいから。じつとしてるよ。今回はおまえこなんと言われようが、離れるつもりはないからな。もつ絶対に離さない」

「広海……」

凛香は急に早鐘を打ち始める自分の心音を、身体中で感じていた。

「あの時は俺も若かった。おまえに一発殴られたくらいで、なんであんなにあっさりあきらめてしまったんだろ？って、随分後悔したよ」

広海の手が、凛香の手を包む。それでもまだ彼は凛香から離れようとはなかった。

「あの後、何人か別の女性とも付き合った。おまえのことを忘れよう、新しい恋愛に夢中になっているフリもした。そのうち本気になる、この人を好きになると自分に言い聞かせて。でもそうならなかつた。結果はこのあいさまだ。相手のペースで付き合い始めて、相手に終わりを告げられる。相手がどんなに素晴らしい尊敬に値する人でも。きれいだと言われる人でも。夢中になれなかつたんだ。やっぱりおまえじゃなきゃダメだ。凛香。やり直そう。な？　いいだろ？」

何人かの女性と付き合つた？　も、もちろん、そんなことはわかっている。

わかつてゐつもりだ。今尚、新たに言い寄られていることも知つている。

なのになぜ？　このイライラした感情は何？

東高に転勤してきたばかりの頃は、広海に彼女がいるとわかつても、ふ～ん、どうか……くらいで聞き流していたはずだ。

ところが、そのわかりきつていてる事実を広海の口から聞いたとたん、心が落ち着かなくなる。

広海の彼女の話など、聞きたくない。凛香は自分の変わりようこ

ただただ唖然としてしまつ。

そして、広海の最強の武器でもある瀉けるような甘い声で、やり直そうなどと耳元でわざやかれた日には、身体中の力が抜けて、遠い日のあの口づけが鮮明に蘇る。

どうしようもないくらいくつきりと、脳裏にあの時の光景が呼び戻されるのだ。

だが、しかし……。凛香はとある矛盾に気がついた。

広海とは厳密に言いつてこする恋人同士の付き合いはなかつた。あくまでも、音楽をやる者同士の連帯感みたいな繋りしかなかつたと思ひ。

たとえ、お互いに好意を持っていたとしても、気持を確かめ合つたのは、別れの前のほんの数分だけだつた。

あの、一度と思い出したくないステージが終わつて、思いがけず広海に告白され、その数分後には凛香の強烈な平手打ち。

広海とはそれっきりだつたはず。

そもそも、何をやり直すのか。スタートラインの設定に互いに相違があるような気がするのだが。

「なあ、広海？ やり直すつてことは、まず、友達としてやり直すんだよな？」

そこのところをはつきりとさせたい凛香は、なぜか重なつてこる広海の手に指を絡めて、問いただす。

「友達？ なんだ、それ……。俺たち、いったいいくつだよ。高校生じゃないんだぞ。それに、友だち同士はこんな風に抱き合つたり

しない。手を取り合つたりも……しない」

凜香が無意識に絡めた指に広海がぎゅっと力を込めた。

いつの間にそんなことになつていていたのか、何も記憶にない凜香は、絡み合つた手を見ながら、頬が熱くなつていくのを感じていた。

「でも……。おまえがまずは友だちから始めると三つのなら、我慢するよ。ただし、一日聞だけなら」

密着している背中からも、広海の声があまやかに響いてくる。

「たつたそれだけ？ なんでそんなに急ぐんだよ。それに、私と広海はある時、友達同士だつただろ？ その……。こんなこともしなかつたし」

「はあ？ それはちがう。そりやあ、こんな大胆なことはしなかつたが、心は繋がっていたはずだ。正真正銘、おまえは俺のハニーだった」

「ハ、ハ、ハ、ハニー？」

凜香は指をほどき、広海の腕を押しのける。

ハニーとか、ありえないだろ？

それとも、当時広海の前で眠りこけている隙に、何かしたとでも言つのだらうか。

いや、さすがにそこまではしないだらうが、広海のハニー発言には、危険な香りが付きまとう。

凜香が椅子から立ち上がり立つとすると、広海がすかさず抱きついて来る。

もぞもぞ動いてみても、広海の腕はびくともしない。

「俺がおまえに告白した後、キスをしたあの数分間だけは、お互
い心が通い合っていたと思ったけど。……違った？」

確かにあの瞬間、凛香の心中に小さな天使が舞い降りて来て、
天国にも昇りそうな幸せな気分になつたのは認める。
好きな人に好きだと言われ、初めて唇を合わせ……。
心躍るひと時だったのは、紛れもない真実だ。

でもその直後、ライブ出演を頼まれたグループのメンバーから
言られたあの一言……。

それで、凛香は怒り狂い、広海との甘いひと時も、儂い夢の「」と
く、その場から瞬く間に消え去つてしまつたのだ。

広海だけは信じていたのに、彼も他の仲間たちとグeldorfたと
知つたあの瞬間、凛香は広海への思いを心の奥深くに封じ込めてし
まつたのだから。

凛香の体が次第に強張つてくる。

せつかくの広海のぬくもりも、あのことを思い出せば、再び憎し
みに変わってしまう。

凛香の気持を察したのか、広海が突如腕の力を緩め、ゆっくりと
椅子を回転させて自分の方に凛香を向き直らせた。

そして広海に引き上げられるようにして立ち上がつた凛香は、そ
の距離感といい、見詰め合つている角度といい、ムード満点の恋人
同士のようなシチュエーションに、身も心も引きずり込まれそうに
なるのを必死に堪えた。

「凛香。あの時のこと、やっぱ、まだ怒ってるんだよな？俺が全くの無実だとは言わないけど、間違ったことをしたとは思つてない。おまえの才能をみんなに認めてもらえたいいチャンスだと思つたし、おまえもきっとわかつてくれる、そう信じて疑わなかつたんだ。あのステージが終わつた瞬間、おまえに俺の思いを伝えたくて。そして、その先も一人三脚でやつていけたらいいと単純にそう思つていたんだ。でも結局は、おまえを傷つける結果になつてしまつて。なあ、凛香。俺とおまえは、またこうやって出会えたんだ。俺たちはきつといつなる運命だったんだよ。あの時の続きを、今から……。やり直そう」

広海の片方の手が腰に回され、もう一方の手が後頭部に添えられた。

「……だよ……な。」

あまりの急展開に思考力がついて行かない。広海が目を閉じ、顔を斜めにして迫つてくる。

「あっ……」

凛香はこの状況に耐え切れず、吐息のような声を漏らした後、不覚にも目をつぶつてしまつた。

このまま少しだけ爪先立ちになれば、広海の目的に協力できる。広海の首に腕を回し、そのまま距離を縮めていけばいい。

凛香の手が広海の首筋に差し掛かった時。凛香はパチリと目を開けた。そして。

「「」「「めん……」」

せつぱつと、わざと顔を離れる。あと一歩とこりこんで、凛香

は広海を退けてしまったのだ。

「つんか？ ビーツたんだよ。いつも向かよ。なんで逃げるんだ。
俺の」と、そんなに嫌いなのか？

広海の大きくてしなやかな手が凛香の頬をほさみこみ、悲しそう
な目で覗き込む。

「ち、ちがう。嫌いじゃない。本当だ。多分、あの當時くらくな
好き……かも」

凛香は自由にならない顔を広海に向けて、必死の思いで叫ぶ。

「なり、なんで？ まさか、来栖ちゃんの」と、まだ弓をかゝてるの
か？」「

「ううん。それはない。絶対になー」

広海の手に挟まれたまま、凛香がふるふると顔を振った。

「それじゃあ、もうこんな無駄な追いかけつけやめよ。凛香、
そうだろ？」

「うん。わかってるって。……わかってるよ。広海の気持ちも。そ
して私の気持ちも……。でも、まだ自分が今後ビーツしたいのか方向
が定まらないんだ」

「方向が定まらないって、ビーツことじだ？ 難しく考えすぎなん

じゃないか？俺は、凛香とずっと一緒にいたいと思つし、おまえにもそう思つて欲しい。ただそれだけだ。おまえは俺と一緒にだと苦痛なのか？」

「そんなことない。一緒にいて欲しいと……思う。でもな、広海。考へてもみるよ。私と一緒にいて広海は幸せになれるのか？見ろよ、この部屋。足の踏み場もないんだぞ。我ながらひどいと思う。料理の腕だって、あの頃とちつとも変わってないし、ところより、前よりひどくなつてるかも知れないし」

ようやく広海の手から解放された凛香は、もう一度と自分のところに天使が降りてくることはないだらつと、じょんぼつとつな垂れて、長いため息をついた。

すると凛香の頭上でクッククックと堪えたような笑い声が聞こえて来る。

何だれ？と訝しげに見上げると、今度は頭^一と抱え込まれ、大きな広海の胸に上半身^一と捕らえられてしまつた。

「おまえなあ。そんなつまらないことで悩むな。俺を誰だと想つてる？掃除くらい、いつでも手伝つてやる。料理だつて心配するな。現におまえ、こんなに元気に生きてるじゃないか。まあ、貧血予防に鳥レバでも食べばなんとかなるわ。なんなら、おたふくで毎晩食えばいいし、俺の実家もそう遠くはないから、メシ食わせてくれつて、夜襲をかければいいだろ？お袋も喜ぶだらうじ。お袋、おまえのこと氣に入つてたしな」

凜香は広海の胸からダイレクトに響いて来る声に、しばし聞き惚れてしまつた。

真夏だといつのに、こんなに密着していても不快じゃない。このまま広海の身体の一部になつてしまつてもいいと思えるくらい、心地良かつた。

しかし、広海の思ひやりは嬉しいが、女らしいことが何一つできない彼女など、そのうち持て余すのではないだろうかと不安になる。来栖も口に出してこそ言わなかいが、うまくいかなくなつた理由のひとつに、凜香の性格が災いしてこうだらうことはもう聞違いないと想つ。

相手を不幸にさせるとわかつていながら身をゆだねる」となど、凜香には到底出来やしないのだ。

「おたふくに毎日行くなんて不経済だし、栄養面の寄りも心配だからと云つて、広海のお母さんに世話になるつてのも、何も出来ない子どもみたいで恥ずかしいだろ？こんな私と一緒にいたら、あんただつてそのうちストレスまみれになるつて。だから……」

自分を卑下するつもりなど毛頭ないのだが、眞実は歪曲するべきではない。

広海が思ひとじまぬよつて言ひ聞かせるのだが。

「いや、今ままの方がストレスまみれだ。おまえにいまこ手料理を期待するとか、家事の素晴らしさを見せてもらおうとか。そんなこと思ひちゃいないつて。仕事のことと一緒に悩んで、音楽や美術の話もして。たまに、ひつやつとぬくもりを確かめ合ひて。そういうのかり言つてるんだ」

たまにやることが逆のよつな飯もあるが……。

学生時代、紳士的な振る舞いを貫いた広海の言ひことだ。

「こはその言葉を信じてあげるべきだわけれど、前の男と別れたばかりの身でありながら、すぐに別の男に乗り換える自分がふしだらに思えるのは考えすぎだらうか。

「広海。これからのこと、もう少しじだけ考へさせて。まさか広海とこんなことになるなんて、つっここの間までは、想像すらしてなかつたんだし。でも、広海にこいつやって抱きしめられるの、嫌じゃない。今も、ドキドキ……してゐる」

凜香は自分の言つたことが無性に恥ずかしくて、広海のTシャツを強く握り締め、顔を隠すよつて埋めた。

「そ、そうなのか？ それって俺にときめいてくれたつてこと？ ジャあ、もう何も悩むことなんかないじゃないか。では遠慮なくもう一度。今度は逃げるなよ」

やつて本当に遠慮なく顔を近づけてくる広海に、凛香は確信する。

やつぱつとちがメインで、たまこすの仕事や趣味の話なんだねと……。

そのまま広海の気持を受け入れてしまえば、その後どんな流れになるかは目に見えてくる。そしてそれを止めるなら今しかなことこのことともわかつていた。

凛香はすばりと見開いて、ちょっと待つてと広海に令圖を送った。

これは決して拒絶ではない。今はその時ではないとこの簡単なる合図だ。

また今度と並んでアンスを込めて、広海の暴走を止める。

「広海、今夜はこれくらいここして……。そうだ！ お願いがあるんだけど」

驚いたような、それでいてがっかりしたような顔をした広海が、今度は何だよと黙って凛香の肩に手を載せ、はあ、と落胆にも似たため息をついた。

「今からここでクライスレーラーを弾いてくれ

「いいで？ 僕に弾けと？ おじおい、そもそもおまえんちにピアノなんてないだろ？ どうすればいいんだよ。ボイスパー・カッシュン風にやれとでも？」

広海がきょろきょろと室内を見渡し、首を傾げる。

「あるじゃないか。あれ」「元

凜香が指差した先には、服やら本やらスーパーの袋やらがつづたかく積み上げられた山のようなものがあった。

「え？ あれって、もしかして……」

「そうだ。あの時も使っていたキーボードだよ。最近、弾いてないからな。荷物置き場みたいになってるけど」

「おおー。なつかしいな。あんなとこにキーボードが埋まっていたとは。ここ掘れワンワンじゃないんだから、わざわざどうにかならないのか？」

「だから、ずっと弾いてなかつたから」

「おーおー。だからって、いくらなんでもあれじゃあ、キーボードがかわいそうだろうが。それにピアノより鍵盤が少ないから、あれで弾いたら音が足りないぞ……。そうだ。今からうちに来ないか？」

「ええ？ 今から？ もう遅いぞ

せつかく広海の暴走を止めたと思ったのに、これじゃあ、その努力も水の泡だ。

何度も口づけを迫る男の家に誘われてびつする。凜香はその案を阻止する理由を必死で考え巡らせていた。

「遅いって、まだ九時過ぎだぜ。俺たちのピアノ部屋は防音してるし、上階も隣も空き部屋だから。結構遅い時間までのびのび弾けるんだ。や、行こ」

広海の手が凛香の腕をつかみ、行こうと誘つ。

「で、でも……」

「ふふん。おまえ、警戒してるだら？ 心配するな。今夜はおまえの希望通り何もしない。まだまだ先は長いしな。その代わり飲むぞ。俺のオンステージが終わったら夜通し飲むから、おまえも付き合え。だから明日の出勤の準備だけは用意していけよ。それならいいだろ？」

？ ほら、早くしひ

凛香の部屋の勝手知つたる広海は、いそいそと戸締りを始める。

「明日の始業式のスースはどうだ？」

これまた断りも無く凛香の背後にいるクローゼットを開け、明日着用予定だった麻のパンツスースを見事に言い当てた広海が、ハンガーごとそれを引っ張り出す。

いつの間にか広海の戦略にまんまと嵌められた凛香は、普段画材を入れている大きなトートバッグに着替えと仕事道具を詰め込み、そうそうこれを忘れちゃ仕事にならないと、パソコンの横に置き去りにされていたメモリストイックを慌ててバッグに放り込む。

そしてはたと気付くのだ。何やつてるんだ？ と。

いくら同僚で、学生時代の仲間だからと言つて、ホイホイついて行くのはいかがなものだろう。

こんな夜遅くに、男の家に丸腰で乗り込むのだ。やばくないか？ いや、相当まずいだろう。

けれどその昔、何度もこの部屋に広海が泊まつたことがあったのも事実だ。

にもかかわらず危機的状況は全くなかった。周りの人間からは半同棲だと好奇の目で見られたりもしたが、そんなものは事実無根、二人の間には何もなかつたと胸を張つて言える。

あるのは心に秘めたちょっぴりの愛情と、正々堂々とした友情だけだった。

せつかく広海のピアノが聴けるチャンスなのだ。余計な心配をして好機を逃したくない。

行くと決めた凜香は前に父親からもらつていた冷酒を冷蔵庫から出し、トートバッグを肩に下げて持つてくれている広海に手渡した。

「おっ！ これ、おまえのおやじさんの好物じゃねーカ。久しぶりだな」

笑顔になつた広海が、ビンに頬ずりをする。

日本酒、ワイン、ウイスキーにビール。焼酎にウォッカ、紹興酒。何でもござれの広海が初めてこの冷酒を飲んだとき、うまいうまいと連発して涙を流さんばかりに喜んでいたのを思い出す。

クライスレリアーナと、せつかくだからショパンのエチュードあたりを一、三曲聴かせてもらって、ピアノの話を肴に飲み明かすのもいい。

あるいは失恋経験者同士、なぐさめ合つなんてのもありだ。

凜香は夏の間に少しのびた髪を大き目のバレッタでひとつに留め、スーツの色に合わせたベージュのパンプスを直接手に持つて、広海と共にマンションを後にした。

25・そして、ついに恋の矢は放たれた

凜香は広海と並んで、マンション裏手の有料駐車場に向かった。

凜香の住むマンションは単身者専用で1LDKが基本の居住構造になっている。

ワンルームマンションよりはゆったりしているが、ファミリーマンションのよつて各部屋ごとに割り振られた駐車場はなく、希望者のみ抽選で使用区分が決められているというシステムだ。

車を持たない凜香には、当然、専用の駐車場はない。

おまけに数台分設けられている来客用駐車エリアも、常に誰かが使用中とされている。

学生時代、廃車寸前の中古車を乗り回していた広海は、当時からマンション裏手のこの有料駐車場を利用していた。でも今はあのおんぼうセダンではなく、東高に転勤してきた時にはすでにこのジープ型の四駆に変わっていた。

見かけだけはカッコいいある意味鉄の塊のようなこの車は、実はこの上なく乗りにくい乗り物だったりする。

背のある凜香であっても、よじ登るよじしてシートに座る。

「通勤」ときに、どうしてこんな大袈裟な四駆を使う必要があるのか全く持つて理解不能であるが、これが男のロマンだと言わわれれば、何も言い返せない。

凜香の父親も弟も同じことを言って、始終車を愛でているのだから、広海だけが特別変人なわけではないようだ。

今夜は室内着にスニーカーだからいいようなものの、スーツを着てパンプスなんぞを履いている日には必ず靴を落としそうになる。乗り込む時には細心の注意が必要だ。

後部座席のドアを開けた広海が、シートにトートバッグを投げるよに置いた。

そしてその乱暴な扱いとは正反対に、まるで生まれたての赤ん坊を扱うがごとく、さつき凜香が渡した冷酒のビンをそーっとバッグとシートの間に忍び込ませた。

「よし。これで準備は完了だ。さて、我が家に向かうとするか」満足げに運転席に座った広海がエンジンをかけると同時にオーディオが鳴り出す。

スピーカーにもこだわっているのか、やたら音がいい。

もちろんBGMはクラシックで、モーツアルトのシンフォニーが流れている。

これほどの車に似合わない選曲があるのかと思つくらい、奇妙な取り合せだ。

信号を一つ過ぎると、隣町に入る。ニアコンが効いてきた頃、7の数字が輝くコンビニが姿を現わした。

トラックも停められるように広めにとつてある駐車場のど真ん中で、広海が車を停車させる。

ここで降りるとでも？ 凜香はいぶかしげに広海の顔を見た。

「つまみビールを買つた

やう言つて、こつと白い歯を見せた広海がシートベルトをはずし、おまえも降りると田配せをする。

そりゃあ、凛香が広海に渡した冷酒だけでは足りないのはわかる。でも家にビールの数本くらいはあるだろ?」、それでもまだ足りないと呟つづりうか。

そう言えば……。見かけによらず、物事を理路整然と考えるタイプの広海は、部屋のインテリアだけでなく、冷蔵庫内もすっきりと、というのがモットーだったような……。

余計なものは一切溜め込まない主義なのだ。必要な時に必要な分だけ買い、物がなくなつてから補充する。

部屋に物があふれないためにはいい方法かもしれないが、もしもの時を想定して安心を得ることを選択している凛香は、食材のストックは欠かせない派に属する。

なのでビールは必ず常備してある。

それに、コンビニで単発買いする酒類やつまみは高い。

今夜は多分広海の支払いになるだろ?から大目にみるとしても、徐々に教育していかなければならぬなど、いつしか今後の策を練つていた。が……。

でもどうして? なんで広海の懐具合にまで首を突っ込まなければいけないのだろう。

ここにところどころも調子がおかしい。世の中の事象を、すべて広海フィルターを通して見ていくような気がするのだ。

凛香はこの夏休みに急激に彼女のテリトリーを侵し始めたこの男の顔をまじまじと見つめてしまった。

「凛香。どうした? 行かないのか? おつ。もしかして、俺に見惚れていたか? そうか、そうか。うちに帰つてからゆっくり見せてやるから。な? 凛香、行くぞ」

ドアを半分開けた状態で、広海が茶化すようにして言った。
あの頃より少し肉付きが薄くなつた頬に、くつきりとしたライン
の一重まぶたの田は昔のままだ。

ともすれば冷ややかな人物だと思われがちだったグレーがかつた
ブランの瞳は、今や慈しむよつた柔らかい眼差しに変貌しつつある。

今度この田に見つめられたら、もう逃げられないと思った。

「ほら、早くしり」

助手席側にやつて来た広海がドアを開け、凛香の手を取つた。
やつぱりどきどきして、息をするのも苦しい。
どうやら天使の放つた矢は、再び凛香の心臓にピタッと命中した
ようだつた。

店員さんのマーコアルドおりのこらっしゃこませがしんとした店内に虚しく響く。

さすがに明日は始業式。いつも雑誌コーナーにあふれている青少年がやけに少ない。

問題集の解答丸写し作業も佳境に入つてているのだろう。

広海は片手にカゴを持ち、500ml缶のビールを六本と、スルメ、サラミ、パッケージに入った焼きそばを素早く入れる。

一人暮らしのプロが選ぶ品は、無駄がなく、的確だ。だがやつぱり値が張る。

ならば発泡酒か次世代ビールでもいいのに、迷うことなくロングセラーのビール缶を選ぶのだ。

まったくこうこうが何年たつても広海らしい。

「おい、凜香。明日の朝のおこりも買つとくか？ それともパンの方がいい？」

そうだった。今夜は広海の部屋で夜を明かすわけだから、必然的に朝ごはんも一緒に食べることになる。

学生時代は菓子パン一個で済ませていた朝食も、最近はもっぱら和食中心のメニューだ。

いくら料理に見放されている凜香であっても、『飯くらい』は炊ける、というか炊飯器が炊いてくれる。ならば……。

「え？ 『飯くらい』炊けば？ あとインスタント味噌汁でもあれば充分だけど。それに目玉焼きなら作れるぞ。それくらいなら私にも出来る」

私にまかしておけとでも言つよつて、凜香は胸を張る。アルコールが入る前に炊飯器に米をセットして置けばいい。卵くらいなら広海のすつきりした冷蔵庫にあるだひつ。とたんに広海が形相を崩す。彼女に手料理を期待しないとか言っておきながら、舌の根も乾かぬうちにこれだから男と言つものは、信用ならない。

「おおっ、それいいね。じゃあ夜明けのコーヒーは俺にまかせておけ！」

よ、夜明けのコーヒーだつて？ 凜香は咄嗟に辺りを見回してしまう。

こんなきわどい会話を誰かに聞かれてみる。激しく誤解されるではないか。

「それよりピスタチオ。これがないと飲んだ気がしない。広海も一緒にさがしてくれよ」

これ以上朝食の話は」法度だ。凜香はこの縁がかつたひとりっ子のかわいいナツツの話題を持ち出し、ほつと一息つく。
だいたいどの店でも、ピーナツツの横にぶらさがっているはずだが。……ない。品切れだろうか？

店頭にピスタチオのありが話をねよひじ、レジに向かってつかつ
かと歩き出したその時だつた。

「せ、先生……」

どこかで見たことがある制服を身につけた女子高生らしき人物が、隣の陳列棚からぬつと現れて、凛香の前で驚いたように口をパクパクさせて突っ立っている。

「ん
？
えつ
？
も、
森口
？」

凛香は目の前の生徒が東高美術部の生徒であることに気付き、上ずつた声を上げてしまう。

なり、心臓が超高速でバクバクと鳴り響く。

「おい、凛香。どうしたんだ？」

く、来るな！ ここから逃げる！ と心中で叫ぶも、夜明けの
コーヒーに浮かれている男にそんな声が届くはずもなく。

背後にたたずむお氣楽音楽教師の気配に、凛香の心臓は再び凍りついた。

「あつ……」

「あつ……」

凛香の前に立ちすくむ制服姿の女子生徒が見えたのだろつ。広海は押し殺したような驚きの声を響かせ、女子生徒の森口は微動だにせず少くとも呻いた。

「森口。何？ 何があつたんだ？」

すると今度は、制服姿の男子が森口の真後ろにやつて来て、彼女に訊ねる。

凛香の後にはビールやつまみ類が入ったかごを下げた広海が。そして森口の後ろには、やはり東高の男子生徒の姿が……。

四人とも、めいっぱい目を見開き、お互ひの視線を交差させた。

「つ、鶴本先生。こんばんは」

先に沈黙を破ったのは、ひょろりと背の高い男子生徒だ。森口の後ろでぴょいひとつ頭を下げる。

「すながわ……。あ、ああ。こんばんは」

今にも消え入りそうな声で広海が生徒の名を呼ぶ。

砂川？ 凛香はどこかで聞いたような名まだなと首を傾げ、記憶を思い起こしながら、急に仕事顔になつた広海の横にゆっくりと

後ずたる。

「おまえたち、なんでこんな時間にこりこりいるんだ？ 明日は始業式だぞ」

精一杯威厳を保ちながら、広海が生徒に対峙する。ただし、皺の寄ったTシャツとハーフパンツが見事にそれを半減させているのが残念なのが。

「あ、あのう……。今、予備校の帰りなんです。あそここの角のところの……」

砂川が窓ガラス越しに指をさす。

そこには大手予備校の看板がライトアップされているのがくっきりと見えた。

現役大学受験コースに通つていて、今が帰りだと言つ。

「そうか。勉強がんばっているんだな。それで、君は？」

こつもの気迫をどこかに置き去りにしたような広海が森口に訊ねる。

森口は三年生だが、一年、二年と美術を選択していたので、広海は彼女を知らないのだろう。

「わたしも、そ、その。砂川君と、同じ予備校で。えっと、ルーズリーフが、なくなつたので、ここにあるかな、と思つて……」

余程緊張しているのだろう。今にも倒れそうになりながら小柄な森口が一生懸命弁明を唱える。

「よし、わかつた。さつさと用を済ませて、帰れ。なあ、砂川。おまえたち、家は近いのか？ よければ俺が家まで送るぞ」

「あ、いえ。大丈夫です。ここから近いんで。俺、責任持つて、こいつを送つて行きますんで。大丈夫です」

「そうか？ 遠慮はいらんぞ。夏の夜は物騒だからな」

「先生。ありがとうございます。でも、そ、その。邪魔しちゃ、悪いんで」

「はあ？」

「あっ、いや、何でもないです。ただ……」

急に頬を赤らめた砂川が頭をかきながら、何か言いたげに広海の様子を伺う。

「なんだ、砂川。言いたいことがあるならさつさと言えよ

広海が少しイラつき始めている。

早くこの場を収めたくて口走つてしまつたのだろうが、ますます雲行きが怪しくなつてくる。

「は、はい。あの、どこかで聞いたことがある声が、突然隣の陳列棚の方から聞こえてきて。夜明けのコーヒーがどうのとか、ピスタチオだとか……。その声の人と話してる様子だつたんで、やっぱり知らない人だつたのかなと思って。でも女人の声も聞いたことがあるよな、なんて思つていたら、急に森口の様子が変になつて……。覗きに来てみれば、やっぱり鶴本先生と鷺野先生だつた

「どうわけで。す、すみません。先生たちの話、全部聞いてしました」

「砂川、お、おまえ……。あ、いや。別に聞かれてますことは、その、言つてないと思つが……つて、言つてたか？」

顔を引き攣らせながら広海が凛香に訊ねる。

次第に落ち着きを取り戻してきた凛香は、さあと首を振つてみせた。

たまにはあわてふためく広海を見るのもいいものだ。

「どうしたの、その、あれだな。別におまえたちのことを邪魔だなんて思つてないからな。いつでも送つてやる。でもな、今夜鷺野先生と一緒にいるのにはわけがあつて……。前におまえに頼まれてただろ？ 文化祭の出し物のことだ。鷺野先生にもいろいろと相談しないといけないからな。今から一人で話し合いをすると、何時に終わるかわからないだろ？ だから、朝メシの心配もだなあ、その必要じやないかと……。とまあ、そういうことだ」

完全にじぶらもじぶらになつてこる。しつかりしてくれよと、凛香は広海に励ましの視線を送る。

すると、助けてくれと言わんばかりの情けない目をひきり向けてくる。

広海の嘘も、これが限界ということなのだろう。

ついれつかもまで、『テレーテレとまとわりついていたのは、どこのどいつだと言つたいのをぐつと堪え、凛香はあえて広海にべつたりと寄り添つようにして横に並んで立ち、砂川を真っ直ぐに見据えた。

「砂川君。君が文化祭の実行委員長だったんだな」

「あつ、はい。そうです」

「今、鶴本先生が言つたことも、間違いないじゃないが。まあ、見ての通りといつことで。今夜のことのはんまりみんなに公言しないでくれる？ 君ももう高三なんだし、その辺のところ、わかるよね？」

凜香は低く落ち着いた声で、砂川に言い聞かせるように話した。レジ担当のバイトらしき店員が時折こちらをちらちらと見ているが、声は潜めているつもりだ。迷惑はかけていない……と思つ。それに、幸い、他の客はいない。

「は、はい。もちろん。俺だってこいつ見えても、もう十八だし、その辺はわきまえてるつもりですか。まさか鶴本先生と鷺野先生が……。いや、けなしているわけじゃないですよ。学校ではそんな風に見えなかつたから。どっちかと言えば、犬猿の仲かと思つてました」

「それも当たり。まあ、急展開つてことだな。大人には大人の事情があるから、こいつは見逃してくれ」

「あの……。凜香ちゃん」

森口が控えめに凜香を呼んだ。美術部の女子やクラスの生徒から、なぜか凜香はこう呼ばれている。

気持ち悪い気がしないでもないが、生徒がせつかく親しみを込めて呼んでくれるのだ。

凜香は許容範囲内として、これを受け入れている。

「気を付けて下さいね。鶴本先生のファンです」「へへへこんです。

美術部にも熱狂的なファンのグループがあつて、誰もが先生と結婚できると思ってるんです。だから凛香ちゃん、彼女たちにはくれぐれもバレないようにした方が……」

森口が凛香を気遣う。

「わかった。そうするよ。」親切にじぶつも

そんなこと、言われなくてもわかつてると聞こやつになるのを我慢して、淡々と答える。

そんな女子軍団より強烈なのがいるのだ。その名も里見栄子。彼女の執拗さに勝るものはない。何を隠そつ、栄子にこの状況を知られるのが一番怖いというのに。

「あの……。鶴本先生も、用心した方がいいですよ」

砂川が真顔で話に割り込む。

「鷺野先生のファンもすっごく多いんです。生徒会にも熱狂的なファンがいて、先生のクラスの子としょっちゅうコンタクトを取つて、情報収集してますよ。鷺野先生ファンも女子が圧倒的に多いですかね」

「そうか、わかった。気をつけるよ……って、おまえにそこまで心配してもらう必要はないから。俺は大丈夫だ。それと、文化祭の件は彼女を説得中なんで、もう少し待つてくれ」

高二なのに文化祭の実行委員長も引き受け、それなりに苦労もあるのだろう。

やはりこの好青年に報いてやるべきなんだろうか。凛香の心が大

やく揺ゆぐべ。

「砂川君。文化祭の事だけど。鶴本先生から詳しく述べて聞いていたよ。そうだな……」

凜香は腕を組み、天井の蛍光灯を仰ぎ見る。そして頷いた。

「よしつ。力になれるよう、がんばってみるよ。君には借りができることだし……ね？ 実は私、学生のころ、ストリートでキー・ボーダ弾きながらボーカルやってたんだ。鶴本先生と組んでね。先生と相談しながらなんとか形にしてみるから、文化祭、楽しみにしてて」

「うわーー。すっげえ！ いいんすか？ ほんとうにいいんすか？ やつたあー。これで他の委員も安心しますよ。ありがとうございます。あの、これ、実行委員会のサプライズなんで、生徒や他の先生には口外しないようにお願いしますね」

砂川が興奮のあまり、大きな声を出しそうため、バイトの店員がぎろりとこちらを睨む。

「しーーー。砂川君。声が大きい」

砂川がペロッと舌を出し、恥ずかしそうに肩をすくめる。

「もちろん、誰にも言わないぞ。お互い、口外無用ってことで」

「わかつてますつて。まかしててください……。それじゃあ、俺たちはこれで失礼します。……末永くお幸せに！」

「末永くつて……。砂川君、あんた取引つまじよ、将来大物だわと

実行委員長のしたたかさに凜香は田を見張つたが、言われっぱなしで終わる彼女ではない。

「砂川君こそ、森口のこと頼んだぞ。いつだつたかな？ 夏休みに君たちが幸せそうにしてるところ、音楽室から見たんだよね。森口がキャンバスを抱えて歩いていた時……。森口、よかつたな。いや、砂川君がよかつたのかな？」

田を丸くした砂川と森口が、逃げるよつこしてコンビニから出で行く。

ルーズリーフは買わなくて良かつたのだろうか。

そんな若い二人の後姿を見て、凜香はクスッと笑つた。

「よいよ店員の視線が痛い。この辺で、とつとと店を出たほうがよさそうだ。」

ピスタチオをあきらめた凜香は、早く支払いを済ませよつと広海の持つている力引を引っ張つた。ところが動かないのだ。広海が。

「ちょっと、広海？」

広海はぽかんと口を開けたまま、凜香をじっと見てくる。やつきの森口のように、ぴくとも動かずに。

そして、やつと広海の口からぼれ出した言葉は。

「おまえ、ホントにホントなのか？ さつき砂川に言つたこと……。また歌つてくれるって。夢じゃないよな？ 嘘じゃないよな？ 信じいいんだな？」

凛香は放心状態の広海から力任せにカゴを奪い取り、一人さっさとレジに向かつた。

その時、やつとバイトの店員の肩の力が抜け、顔がほころんだよう見えた。

「お、おい、待てよ！」

凛香が財布を出す直前にレジカウンターに滑り込んだ広海は、支払いを終えた後、すたすたと足早にコンビニから出て行く凛香を追いかける。

「おまえ、砂川にあんなこと言つて、本当に大丈夫なのか？」

腕を掴まれた凛香は、歩みを止め、広海の方に振り向いた。

「あたりまえだ。私が今まで嘘をついたことがあるか？ 広海、どうなんだ！」

凛香は片手を腰に当て、何か文句あるのかと、きれいなラインをした顎を気持ち前方に突き出す。

「ない……」

冷えた缶ビールが透けて見えるコンビニの袋を提げながら力なくうな垂れる広海に、凛香は余裕の笑みを浮かべる。

「だろ？ 言つたことは守る。砂川君のあんなに喜んでる姿を見てしまったんだ。それで約束を反故に出来るか？ 私、そこまで悪人じゃないから。生徒のためだと思えば、なんでも出来そうな気がする」

あくまでもこの決断は生徒のためだ。広海のためではないことを

凛香は自分自身にもしつかりと言ひ聞かせた。

「やつら……。やつとその気になつてくれたか。なら、俺がドラムをやるとして、ギターを誰かに頼まないとな。そうだ、教頭はどうだ？ 黄、有能じいの『ペーパーバンド』やつてたらしこぞ！」

「えつ？ あの教頭が？」

「ああ。おまえだけでなく教頭まで抱き出したら、とんでもなくビッグなサプライズになるんじゃないか？ どう思つ？」

「そりやあ、いいと思つ。けど……。教頭が首を縦に振ると思つか？ いつも忙しそうだし。無理だよ、きっと」

「そうか？ 僕は脈ありだと思つ。前に教頭が言つたこと、覚えてるだろ？」

「なんだ、それ」

凛香は広海がいつの話を持ち出しているのか、全く見当がつかなかつた。

教頭が前に言つたこと……。凛香はつーーんと唸りながら、記憶の糸をたぐり寄せる。

「ほら、一学期の最後の飲み会で。おまえが補習講座を断るなら自分が手伝つて……」

「ああ、思い出した。そんなこと言つてたなあ」

「ピアノが弾けるかどうかは知らないが、楽譜も読めるし、コード

も全部理解している。俺が授業で使った曲にも時々反応してくれて、専門的なことにも踏み込んでくるぞ。ああ見えてあの教頭、結構音楽マニアだ。絶対に話に乗つてくれる

真面目そうな顔しながら、教頭も若い時はそれなりに青春していたのだと思つと、勝手に口元が緩み、微笑ましい気持になる。

「じゃあ、広海から教頭に頼んでみて。ということは、私がボーカルとキーボードを担当すればいいのか？」

「いや。おまえはボーカルだけでいい。ブランクも長いし、さすがに両方はキツイだろ？ キーボードは誰か他の先生に頼んでみるよ。俺がキーボードで、誰かにドラムをやつてもらつて手もあるからな」

広海がいとも簡単に自分の担当楽器をあれこれ唱えるが、これは口から出任せでも何でもない。

広海は大概の楽器は全部そこそここなす。

キーボードはもちろんのこと、ギターとドラムもプロ級だ。

サックスにバイオリン、大学の音楽棟の片隅に眠っていたハープまで艶やかに奏でた日には、凜香は音楽のことで広海と張り合つのは絶対にやめようとした誓つたほどだった。

「でも、キーボードやつてくれる人、今から見つかるのか？ 夏の補習講座に誰も名乗りを上げなかつたんだぞ。いないと思うけどな。ましてやドラムなんて、ますます無理だろ」

凜香は職員一人一人の顔を思い浮かべて、出来そうな人をピックアップしてみるものの、どれも望みが薄そうだ。

こつたいて誰が出来ると言つただろう。だからこそ夏休みの補習講座は凜香が餌食になつたのではないかと、苦々しく振り返る。

「いや、こゆよ」

「広海が自信たっぷりに頷く。

「みんな、自分の仕事が忙しいのと、ブランクが長いのとで、昔のよつには弾けないと想い込んでいただけだと思つ。俺たちよりずっと上の世代は、フォークやニューミュージックの全盛期に青春してたんだぜ。十代の頃にギター やドラムに嵌った人口は、きっと俺やおまえの想像以上いるはずだ。俺がなんとかするから、任せておけ。おまえはとにかく、ボーカル一本でがんばってくれたらいい」

「えらい自信満々だな。でもまあ、確かに広海の言つとおりな気もする。私の父親もギター やるし」

「そつだろ？ まあ、俺を信じて吉報を待つてくれ。で、曲はもちろん、あの当時のオリジナルでいいよな。なんなら新曲もプラスしようか？ 今風のアレンジも加えて、しつとりしたのも一曲くらいは欲しいよな。アカペラなんかもいいかも。でも、やっぱ、迫力のある方が……」

「ひーうーみー。全く、あんたって人は……」

凜香はあきれたよつて、首を左右に振つた。生徒に頼まれたとか言いながら、広海本人が一番楽しんでいるように見える。

この生き生きとした表情。誕生日とクリスマスと正月が三つ同時に来たみたいに無邪気に喜ぶ姿は、昔とちつとも変わっていない。こ

「うこのを進歩がなことうのだわ」。

「なんだよ。俺、なんか変なこと言つたか？」

「つたく、でれでれと嬉しそうな顔しやがつて……。あんたが楽しんでどうするんだ」

「別にいいだろ？ だつて、考へてもみろよ。おまえの歌が聴けるんだぞ。それもあの頃みたいに、俺と一緒にステージに立つて、拍手喝采を浴びて……。これのどいが楽しくないつて？ 楽しげに決まってるだろ？ なあ、凛香」

「はん。勝手に言つてろ。それより、早くあなたの家に行こうよ。遅くなつたら、ピアノ、弾けなくなるだ。それに、ビールもねるくなつてしまつ」

「くら停車してゐる車が少ないから」と言つて、こつまでも駐車場の真ん中で立ち止まつて話していくわけにもいかないのだ。
時は刻々と過ぎていく。凛香はすぐそこに停めてある広海の車に向かつて再び歩き始めた。
そして、助手席のドアに手を掛けた時、広海がそつと肩を揺すった。

「凛香。俺達が一緒に東高で働けるのも、もしかしたら今年度で最後かもしないな……」

急に何を言つ出すのかと思えば……。

意味不明なことを口走る広海など、この際無視することにして、
凛香はドアを開けようとするのだが。

広海がそれを許さなかつた。

「ちよ、ちよっと。なんで閉めるんだよ。車に乗らないのか？ それには、今年度で最後つてどうこいつ意味だ。高校の統廃合があるとでも？ そんなの聞いてないぞ」

車を背にして、閉まつたドアにもたれかかるよひになつた凜香に向かって、広海がありえないほど接近して顔を覗きこむ。
誰が見ても知れない公共の場で、それはないだひつと凜香はくねくねと身をよじつた。

「ほり、くにやくにや動くな。ちゃんと聞けよ。なあ、凜香。同じ職場に鶴本先生が一人いたら、どうする？ 困るだろ？」

「はあ？ 鶴本先生が一人？ あなたの親戚でも来るのか？」

「おまえなあ……。俺の言いたい」とへりへり、わざと気付け。いいか、これから言つことを、よく聞くんだぞ。おまえんちは弟がいるだろ？ 僕んちはとりあえず俺が長男。つまり、おまえには鶴本になつてもらう」とになる。だから、どちらかが別の高校に移動しないとまずこいつわけだ。でもつて、俺の方が東高勤めが長いから、あそこから出る可能性が高い。やつこいつことだよ

「鶴本になる？ ほの私が？ それって……」

「だーかーらー。夫婦になるつて言つてるんだよ。俺とおまえがつ！」

今なんて言った？

だーかーらー。夫婦になるって言つてるんだよ。俺とおまえがつ……。

凛香は、広海がたつた今口走つたことを、脳内で繰り返してみる。この目の前の男に、夫婦になるぞと宣言されてしまったのだ。それもあらうことが、夜のコンビニの駐車場で一方的に。そしてはつきりとした求婚の言葉がないままに……。

……こいつ、いくらなんでも先走りすぎだろ。誰がいつ、結婚するなどと言つた？

凛香はまだこの男に、付き合つという返事すらしていない。なんておめでたい奴なんだろうと、フフンと鼻で笑つたあと、至近距離に迫つてくる広海を両手で押しのけた。

が、その瞬間、押しのけた手をぎゅっと掴まれ、広海が有無を言わせぬ手を凛香に向けるのだ。

すっかりプロポーズでもした気持ちになつていいのだろうか。なあ凛香、俺と結婚してくれるんだろう？ と何もしゃべらない無言の広海が、暗がりの中で、そう手で訴えていくように見える。

だからと言つて、ここで甘い顔を見せては女がすたる。

凛香はその名の通り、凛とした面持ちで、広海に真っ向から対峙する。

「いいか、広海。あんたが誰と夫婦になるかは知らないけど……。

そんな大切なことを、自分勝手にあれこれ決めるな。私はまだ、あんたと付き合つてもいいって返事すらしてないけど？」

凜香は心を落ち着け、子ビも口に言ひ聞かせるよひし、広海に今の氣持を伝える。

「おこ、返事も何も。もう十分に付き合つてゐだり？ 違つのか？」

「違つ……と思ひ」

わざぱり違つと言い切れないといひが辛いが、やはしきの広海は、勇み足が過ぎやしないかと思ひ。誰が見ても順序が滅茶苦茶だ。

「あ。。。おまえ、さぞさん俺の氣持を弄んでおいて、それはないだろ？ なあ、凜香」

「へんなことなあ」

凜香は広海に拘束された手を振りほどいたが、解けるどころか、ますます強く握り返される。

「広海。まずは文化祭を成功させること。すべてはそれからだろ？ それと、里見さん対策も考えてるのか？ 彼女、どういうわけか広海にぞつこんだよな。あんたがあれほどあからさまに彼女を嫌つているにもかかわらず……だ。これ以上面倒なことに巻き込まれるのは御免だから。きちんと決着つけてくれよー。それでないと、広海とは……」

そうだ。とにかく里見栄子の件だけは、今すぐにでもなんとかし

て欲しい。

このままではまた修羅場に出くわしそうで、落ち着かないつたらありやしない。

ああいつたタイプの女性には、態度だけでなくバシッと言つて突っぱねなければわかつてもらえない。

彼女が望みを抱いてしまうのも、すべて広海の優柔不斷さゆえの結果ではないのか。凜香の不安は一向に治まらない

「決着？ それは無理だ。俺たちのことと彼女は関係ないだろ？ 里見さんが勝手に騒いでいるだけだからな。デートもしたことないりや、一人でメシすら食つたこともない。それでもダメなのか？」

「ダメだ！ あんたが期待を持たせるような態度を取るからだろ？ ホント、広海は自覚なさすぎ。なんだかんだ言いながらも女子生徒に一番もてるるのは広海なんだぞ。里見さんだけでなく、あんたを慕つてる生徒にも卒業生にも何をされるかわかつたもんじやない。あんたとの恋愛は、ある意味命がけなんだ。大学の時だつて、あんたと一緒にいるつてだけで、いつたい何人の女子学生に嫌味を言われたか……。ということで。いい加減、この手、離してくれないか？」

？

凜香は広海からすり抜けるように手を引き離し、田舎町に留まらぬ早業で助手席側のドアを開けてよじ登るようにしてシートに座り、これみよがしにパタンと勢い良くドアを閉めた。

何がそんなにおかしいのか、クッククッと肩を小刻みに震わせながら、ぐるっと車の前方を回つて運転席に座った広海が、すかさず身体を助手席側に傾けてきた。
「、これは、いつたい……。

「スキ有り！ どうだ、まいつたか」

凛香は頬に手をあて、目を見開いた。

それは頬というより、田尻とこめかみの中間あたりだつたと思つ。柔らかいものがそこに触れ、びっくりして広海の方を向いてしまつたものだから、最後は目蓋にまでかすつてしまつた。広海の唇が……。

「俺、アホだな。いちいちおまえにお伺いを立てるから、事がややこしくなるんだ。今、それに気がついた。不意打ちってのもいいもんだろ？ 今夜の凛香は、いつも増してかわいすげ。これくらい、許せ」

「な、なんて」と、するんだよ。広海の、ばか……」

本当はもつと大声でののしるべきだったのに。
そして、いつものようにバカバカと連呼してやればよかつたのに。

今の凛香に言えるのはそれだけで。耳まで真っ赤になつているに違いない顔を、広海に知られたくないて、反対側に顔を叛ける。
ほんとうに、油断も隙もあつたもんじやない。

「なあ、凛香」

明らかに機嫌を取りひつとするような広海の猫なで声が、音楽の止
まった車内に響く。

「里見さんのことば、きちんとするよ。確かに、俺の態度が曖昧だつたのもしれないしな。里見さん、校長の奥さんの遠縁なんだ。

まだ教師になつて日も浅いし、慣れないことも多い。心配した校長が、年も近いし面倒を見てやつてくれないかつて俺に頼んできたんだ。俺はまあ、それを常識の範囲内で、実行したつてわけなんだが……。彼女、それを誤解したのかもしないな

凛香は初めて聞く話に驚きながらも、広海が常識の範囲内で栄子の世話をしていたと言つ点に、反論はなかつた。

いや、校長に頼まれていたにしては、なかなか冷たい対応だつたのではないかと思えるくらい、あつさりとした関係に見えた。そこは及第点をやつてもいい。

「近いうちにちやんと誤解を解くから心配するな。校長にも、おまえの了解を取り次第、俺たちのことを報告するつもりだ。そうすれば、里見さんもそれ以上は無理難題を言つてこないはずだ。これなら、いいだろ？」

「うん。それならいい。でも、私も思い出したんだが……」

「何だ。まだ何かあるのか？」

「うん。私、この前、里見先生に言つてしまつたんだ。広海に差し入れする時は『一ラで機嫌を取るといいぞ、健闘を祈つてるつて……』

先輩風を吹かせて、栄子の後押しをしたのはまぎれもなく自分だつたと、凛香は後悔の念に苛まれる。

「おいおい。そりゃあ、まづいな。おまえ、そんな心にもないこと言つちまつたのか？ あはははー。」

広海がシートベルトを締めて、エンジンをかける。エアコンが作動し、シートベルトに手を掛けた凜香の左半身に、ザーッと冷気が当たる。

気まずい話の内容であるにもかかわらず、広海ときたら、さも愉快そうに鼻歌交じりでハンドルに上半身を預け、凜香を伺い見るのだ。

「笑い事じゃないだろ？ だつて、その時はこんなことになるなんて、思つてもみなかつたから……」

「じゃあ、俺が彼女に話をする時、おまえも正直に言えぱいいだろ？ 俺も正直に言つぞ。大学の時から、おまえのことが忘れられなかつたつてな。だから里見さんの気持には、これから先、一生応えることは出来ないつて釘を刺す。おまえは、やつと今頃になつて俺の魅力に気がついたんだつて彼女に言えぱいいんだ。な？ 嘘じやないだろ？」

「つたぐ、あんたつて人は……。そんなんで、簡単に済むのなら、誰も苦労はしないから」

事の重大さに少しも気付いていないこの男にはもう何を言つても無駄だと、凜香はあきらめのため息をつき、うな垂れた。

「おまえ、自分のことわかつてゐのか？ 里見さんのことをあれこれ思い悩んでいるだろ？ それを何て言つか知つてゐ？」

「……」

まだとやかく言つてくる広海を適当にあしらおうと、凜香は無視を決めこんだのだが。

「あのな、それを嫉妬と言うんだ。おまえが俺のことを思つてくれている証拠。いいねえ。おまえに嫉妬されるなんて、本望だな。ではそろそろ、うちへと参りましょうか?」

何が嫉妬だ——! 広海がアクセルを踏むと同時に、凜香の身体の中の怒りの炎がマックスに燃え上がる。

だがそれも長くは続かない。急激に勢いを失くし、燃えさかつていたはずの炎が跡形もなく消え去つていく。

確かに広海の言ひとおり、それが嫉妬といつものなものかもしれないと気付く。

彼を取り巻くすべてのものが憎い。里見も、そして、広海を取り巻く女子生徒も、憎らしくて仕方ない。
もうこれは、嫉妬以外の何ものでもないのだ。

広海が自分以外の女性と話をするのも嫌だ。こんなことで、同じ職場でやつていけるのだろうか。

職場には職員と生徒を合わせると、いつたい何人の女性がいるのだろう。五百人? それとも六百人? とても管理できる人数じゃない。

来栖とて同じ状況だつたはずなのに、全く気にならなかつたのは、これまたどういうわけなのか。

凜香は自分の変わりように、ただただ首を傾げるばかりだ。

相当重症な恋の病に陥つたことを自覚しなければならないのは、やはり自分の方なのかもしない。

凛香はさつきの広海の不意打ちのキスを思い出しながら、再び頬を染め、彼への思いをめぐらせる。

そして、ちらりと広海の横顔を視野に収めると、そのまま目をつぶり、そっと俯いた。

「入れよ」

広海が閉まるひつとする玄関ドアを背中で押さえて、凛香を先に部屋の中に通す。

その部屋は相変わらず美しく整頓され、モテルルームのようにすつきりと片付いていた。

どうしたら常にこのよつたな状態が維持できるのか、凛香はいまだ不思議でならない。

昔一緒にいた頃も、それはずっと謎だった。

だからと言って、いつもせかせかと動き回って、雑巾片手に掃除をしているというわけでもない。

凛香の雑然とした室内でも平氣で横になるし、それを執拗に咎めることもなかつた。

ただひとつ言えることは、広海の集中力が他に類を見ないほどすじ」ということだ。

普段はズボラに見えるのだが、一旦目標が定まると、短時間で完璧に物事をやり遂げることができる。

常に完璧な部屋の掃除や整理整頓も、その超越した能力の賜物なのかもしぬれない。

凛香は先日ベッド代わりにして身体を横たえていた白いソファにドサッと腰を沈めた。

「じゃあ、夜が更ける前に、おまえのリクエストどおり、ピアノを弾ひつか?」

ソファの後に回り込んだ広海が、凛香の肩をポンと叩く。

「うん。 までは聽かせてもらわなことな」

凛香は振り返り、広海に答えた。

「おまえがここに泊まつてこつた晩、ずっと弾いてくれつて呴つてからな。おまえに頼まれると、弱いんだ」

「やうか。それはいじとを聞いた。これからもよろしくな

凛香はこつと笑つてみせる。

「おこ、俺の愛情を悪用するなよ」

「わざわざ、悪用はしない。どんどん活用させてもらひ

「ひら、凛香。それが悪用つて言つんだ」

「広海。そんなこと、びつちだつていいだろ？ いつだつて感謝してるかい。でも、この前のことはよく覚えていないんだ。どうか、そう言へば、あの日ひに泊まつたんだよな？ 迷惑かけたな…

…

「迷惑？ でもまあ、あの時期にくらべりやあ、最近は顔色もよくなつたし、病院に行くほどでもなくてよかつた。いろいろと無理強いて悪かったな。あの仕事はおまえにしか頼めなくて、というか、おまえとやつたかったんだ。里見さんがピアノを弾けるのは知つていたが、あの人はそういうた器の持ち主じやないだろ？ おまえな

ら任せられると思つたから……。おまえの看病くらい、どつてことないよ。さて、前置きはこれくらいにして。ではお聞かせしますよ。あれから毎日三時間くらい練習してる。こんなに弾き込むのも、学生の時以来だな。多分、技術的にはこれまでの最高の演奏ができると思う。ただ、気持の面で、どれだけショーマンに近づけるか……。凜香、おいで

広海にソファの背もたれ越しに手を掴まれ、ピアノの部屋に連れ込まれる。

「よーーし。じゃあいくか。おまえはそのワグの上にでも座つてさ。また前みたいに倒れられたら、たまらんからな」

広海はやつ言つて、防音室の戸を閉め切り、エアコンの電源を入れる。

そして、例の“”とく腕時計を外し、凜香は黙つてそれを受け取つた。

一重壁構造になつた狭い密室に、凜香は俄かピアニスト男と二人きりになる。

本当に大丈夫なんだろうか。

でも、もう、ここまで来てしまつたのだ。嫌ならば途中で引き返すことも出来たはず。

それをしなかつた凜香は、広海にすべてを委ねているも同然だとすでに気付いていた。

お互に想い合つているいい歳した男女の行く末など、火を見るより明らかだ。

とにかく今は、彼の導き出す音に集中しよう。凜香は、壁にもた

れるようにしてラグの上に座り、ハーフサイズのチームを履いた足を投げ出した。

ラグの上には、ト音記号とヘ音記号がステッチしてある大きなクッショングが無造作に置かれているのが目に入る。

これはいつたい……。

凛香の胸中にもやもやがよぎる。

以前の彼女にでも作ってもらつたのだろうか。いかにも手作りと言つたそのクッショングを掴み、ラグに投げつける。

クソッ！ 女々しいのはどつちだ。来栖にもらつたネックレスをさんざんこき下ろしておいて、自分は昔の戦利品を大事に残してつてわけか？ 「うう、腹が立つ。

今凛香の心はどす黒い嫉妬心で乱れていた。
仕返しに生地を引き裂いて中の綿を出し、このクッショングをめちゃくちゃにしてやろうか、などと辛らつなシナリオすら組み立てる始末だ。

凛香の殺氣にも似た空気が伝わったのだろうか。ピアノの椅子に腰掛けた広海が突如振り向く。

「おまえ、何やってるんだ？ そうだ。そのクッショング使えよ。それを壁と背中の間に挟んでもたれると楽だぞ。去年の吹奏楽部の卒業生が、記念に手作りしてプレゼントしてくれたんだ。男子七名込みの二十人の合作だぞ。曲がったステッチも一生懸命さが伝わってきて味があるだろ？」

「そ、そうなのか？」

「ああ……。で、どうした？ 何があるのか？」

広海が怪訝そうに、斜め上から凛香を伺い見る。

「あつ、いや、何でもない。あつはつはつはつ……！ そいつか、卒業記念か。じゃあ、このクッシュン、遠慮なく借りるのだ」

「なあ、凛香。おまえ、本当に大丈夫か？」

広海の腕が伸び、凛香の額を押さえる。熱があるとしても思つていいのだらう。心配そうに何度も額に手をかざす。

「だから、大丈夫だつてば。私のことはいいから、早く弾いてくれよ」

凛香は慌てて、クッシュンの一つを抱き寄せる。もう一つは広海の言つたとおり背もたれにして。

生徒たちが恩師のためにと心をこめて作ったこのクッシュンを、あらうことか、めちゃくちゃにしてやるなどと思つてしまつたのだ。

このことは、絶対に広海に知られてはいけない。

凛香は広海を少しでも疑つた自分が恥ずかしく、どうしようもないほど後ろめたい気持になつた。

肩を左右交互に上下した後、首をぐるぐる回す。

簡単なストレッチを終えた広海の手が鍵盤の上に静かに据えられる。

彼の演奏は昔からダイナミックだった。フォルテはより強く、ピアノはより纖細に。

メリハリの効いた彼の演奏が、今また、凛香の耳の前で始まるつ

としていた。

「シャツとハーフパンツ姿の一見どにでもいそうな大柄な兄ちゃんが、突然真顔でピアノに向ひ。

クライスレリアーナ第一番、二短調アジター・ティッシュモ。広海の指が鍵盤の上を低音部から高音部に向けて一気に駆け上がる。

そして縦横無尽にシユーマンの世界を紡ぎ出していくのだ。

広海が奏でるメロディーは、大胆でかつビート哀しい。

終楽章第8番、ト短調ヴィヴィアーチェ・エ・スケルツァンドの付点のリズムが、いつまでも余韻を残しながら、全て弾き終わつたことを凛香に告げる。

どうしたのだろう。広海の指が空中からそっと膝の上に下ろされ、もうそれ以上の演奏はないといつこのこと、これで終わつてしまつのが悲しくて。

涙が次から次へと溢れて止まらないのだ。頬を伝つた涙が、膝の上に抱えたクッションの上に、ポタリ、ポタリと落ちていく。

クライスレリアーナ。この曲って、こんなに悲しい曲だったのだろうか。

いや、決してここまで泣くような曲ではなかつたはずだ。じつで好きなピアニストが弾いているの何度も聴いた。

ところどころでポツと浮かび上がる珠玉のメロディーラインに魅せられることはあっても、涙を流したことなどこれまで一度もない。

決して認めたくはないが、広海の奏でる音色に感動してしまった

に違いない。

いつも憎たらしく」とばかり言ひて、氣に食わない奴だけ。

そして、そんな彼の言葉に一喜一憂して、心がときめいて、誰よりも気になる人……ではあるけれど。

ピアノを弾いている彼の姿は切ないほどの標準高で、その音色と相まって、一瞬たりとも目を離すことが出来なかつた。

泣いてる顔なんか見られたくな。クッシュョンを抱えてうつむいたまま、ト音記号のステッヂ部分を出来るだけ避けるようにして、こつそり涙をぬぐつ。

このままだと、涙の後が染みになるかもしれない。許せ、卒業生諸君。

凜香はクッシュョンに顔を埋めたまま、二十人の生徒に向けて、密かに詫びの言葉を口にした。

「凛香……。おー、凛香？」

ペダルから右足を離した広海が振り返り、凜香に声をかける。

「泣いてるのか？ なあ、凜香。顔を上げろよ」

凜香は頭頂部を広海に向けたまま、顔をクッシュョンにこすり付けるようにして、首を横に振つた。

「おまえ、いったいどうしたんだよ。やつぱり、泣いてるんだろう？ 俺のピアノ、そんなによかったのか？」

凜香は一瞬ためらつたが、そのままの体勢で、こくこくと頷いた。広海から見れば、頭のてっぺんだけが小さく上下して見えている

はすだ。

「そりゃか。よかつたか。でも、残念だったな。もうちょっと前だつたら、もっと感情をこめて生々しい演奏ができたのにな。凛香への叶わぬ想いを、この曲に重ねて、苦しい心の内を鍵盤にぶつける……。そしたらおまえ、こんなもんですまないぞ。もつともつと激しく号泣すること間違いないしだな。……つて、もしかして、おまえをピアノで泣かせたの、初めてじゃないか？ マジすぎえ。それではもう一曲。おまえが前に弾いてくれた作品⁹の1のお返しに、ショパンのノクターン作品15の2を、おまえだけに捧げる」

凛香はますます顔を上げることが不可能になつた。

このノクターンは広海の十八番でもあり、学生時代に何度もねだつて弾いてもらつた曲なのだ。

装飾音符とは思えないほどの纖細なメロディーに何度も心が震えたことか。

中間部分に左と右のリズムが数学的に合致しない難解なところがあるのだが、広海の手にかかると、何事もなかつたかのようにいつも簡単になめらかに音が流れていぐ。

もうそれは人間のなし得る業をとつへに越えていくとしか思えまいほどの表現力だった。

凛香の全身に心地よいメロディーが滲みこんで行く。

そのまま命の終焉を迎えてもいいと思えるくらい、至福の時だった。

最後の六連符がだんだん小さくなり、ゆっくりと消えていく。広海と過ごした過去が走馬灯のよつて蘇り、そして音と共に、今またゆっくりと消えていった。

「凛香。またいつでも弾いてやるぞ。今夜はこれくらいにしておこうか。そうだな、次はリストのメフィストワルツなんかどうだろ。これもきっと気に入ると思つた。今すぐ弾けないこともないが、ノクターンに比べりゃ、ちと長い曲だしな。今夜はもう時間がないから、また今度とこいつとで。さあ、そろそろ飲みましょうか？ お嬢さん」

グラスを持つような手をして、おどけながらクイッと酒を飲むマネをする。

上機嫌でピアノの部屋を出ようとある広海を追つみつて、凛香もその場に立ち上がった。

そして。

「広海、待つて……」

凛香は呼び止めると同時に、先を歩く広海の背中にしがみついていた。

渾身の演奏の結果、広海のTシャツは汗で濡れているけれど、そのまますぐに回こうにある彼の背中は……温かい。

「広海から離れないよ」と、Tシャツの袖の辺りをぎゅっと握る。

「凛香……」

ペタッと立ち上った広海のくぐもった声が、彼の背中に密着した凛香の耳に元に戻って響いた。

「…………」
凛香は咄嗟に取つた自分の行動になす術もなく、そのままびくす

る」ことも出来なかつた。

凜香の一一番好きな曲を届けてくれた広海から離れたくなくて。もちろん、泣き顔も見られたくなくて。

そのまま広海のぬくもりを確かめていたかつただけなのだけど。

黙つてないで、なんとか言えよ。暑苦しいとか、わざと離れる、とか。

なんならこのまま、一本背負いで決めてくれてもいいからうりだ。

凜香に亀の甲羅のようになに貼り付かれた広海が、そのままの姿勢でつぶやく。

「凜香。それはOKサインとみなしますが……。いいのか？ 後悔するなよ」

広海の袖を掴んでいた手を引かれ、するつと前に抱き寄せられる。そして見上げた先には、目を細めてじっと凜香を見ている広海がいた。

頸の先に指をかけられ首筋がすつと伸びる。

次の瞬間、広海の唇がそつと噛わさり、何度も何度も啄ばまれる。

そう。これが広海の口付けだ。いつやつて軽く唇を吸われ、徐々にじつとじつと馴染んでいくのだ。

それと同時に、身体の力も抜けていく。凜香は必死で広海にしがみついた。

首に手を回し、より一層身体を密着させる。

ずっと凜香の背中を撫でていた広海の手が腰に降りてくるのを合

図に、そのままラグの上に一人して倒れこんだ。

その時、ピアノの脚に自分の足をぶつけた広海が、痛つてえーと言つて、凛香の上で苦笑いを浮かべる。

その表情が何とも言えずかわいく思えて、胸の奥がきゅっと痛んだ。

じつと見つめる彼が愛おしく、その頬を慈しむようにそっと指でなぞる。

どうしたのだろう。もう止まつたはずの涙が、また溢れ出る。ひと筋、ふた筋と、田じりを伝つて、ラグの上に流れ落ちた。

好きだ。広海が好き。凛香は「なんにも広海を愛していたのだと気付き、湧き上がる想いに打ち震える。

「広海……」

「うん？ なんだ」

頬に、額に、小さく口付けながら、広海が訊ねる

「好き……。広海が……好きだ」

凛香から顔を離した広海が、田を丸く見開く。

「う、凛香……。俺も好きだよ。ずっと好きだった。愛して……。
だから、泣くなよ。な？ もう泣くな

広海の唇が流れ落ちる涙を拭つようと、優しく凛香の頬に触れていく。

そして広海の吐息が耳たぶから首すじに到達した時、凛香は纏つていた理性をすっかり手放した。

30・過去を乗り越え、そして今

防音室に掛かっているアナログ時計が、深夜の零時過ぎを指し、それはかれこれ一時間近くもこの狭い部屋にいることを証明する……。最初はピアノを聴いていただけだったのに。

汗ばんだ広海の胸に顔を埋めるように抱かれながら、凛香は彼の肩にそっと口付けた。

するとすくぐそれに応えるように、凛香の額に彼の柔らかい唇がかかる。すめる。

そして彼女の上に覆いかぶさるように身体を動かした広海が、凛香を覗き見る。

「ああ……。このままずっとおまえといつていい

広海がそう言つて目を細める。

「私だって……」

広海の頭が軽く重なり、すぐには離れていく。

「シャワーに行くけど……。おまえは？」

ようやく身体を起こした広海が凛香の頬を撫でながら掠れた声で言つた。

「えつ？ あ、ああ……。広海が先に行つて。私はあとにする」

「俺は別におまえと一緒にいんだぜ」

薄明かりの中、再び広海の視線が凜香の全身を舐め回すように追いかけた。

凜香は反射的に身をよじり、手で身体を覆い隠した。

広海と一緒にシャワーだって？ いくらなんでもそれは無理だ。無理に決まってる。

もちろん来栖と付き合っている時も、そんな大胆なふるまいを敢行した記憶はない。

「うつこい」とは躊躇ひいつわざと……というのが凜香のモットーだ。

「な、なにを言つてるんだよ。……だから、そんなに見るなつてば！ もうこいから、わつと行けよ！」

「今さら、何恥ずかしがつてるんだ。もう手遅れだよ。ははは…。わかったわかった。じゃあお先に」

広海は、凜香の慌てる様子を楽しんでいるかのような余裕のある態度で豪快に笑い、引き締まつた体躯を惜しげもなく晒しながら、部屋を出て行った。

凜香は大急ぎで辺りに撒き散らした衣服をかき集め、身繕いを整えて隣のリビングルームのソファに腰を下ろした。

まさか今夜、広海とこんなことになろうとは……。

アルコールを口にしないうちにまた起につけた数々の行為は、どれも広海の真つ直ぐな想いが込められているようで、ゆっくりと凜香の心のわだかまりを解きほぐしていくた。

嘘偽りのない広海の気持ちをしっかりと受け止め、彼女自身も想いのすべてを彼に注ぎきった有意義なひと時だったと思う。

広海といつなるのは時間の問題だといつのはすでにわかっていた。声を大にして言つようなどでもないが、もちろん凛香は男性と身体を重ねるのは今回が初めてではない。それは広海も同じだろう。

でも……。来栖にも、そして遠い田の記憶の中に薄っすらと残る初めてだつた人にも感じたことの無かつた苦しいほどの胸の高鳴りと広海への愛しい気持ちが、ずっと彼女を取り巻いていたのだ。

広海がささやく言葉の数々も、口付けも、その先にあるものも。すべてが凛香の心を震わせ、魂までも揺すぶられたように感じたのは決して言ひ過ぎではない。

幸せだった。この人とこれからもずっと一緒にいたい、もう離れたくないと思った。

バスルームの折り戸がガタツと鳴ると同時に、キッチンの食器棚のガラス戸がガシャッと音を立てて共鳴する。

広海がシャワーを終えて出てきたのだ。

タオルを腰に巻いただけの広海が凛香の前に現れ、交代だと書いて嬉しそうにタッチをする。

凛香は田のやり場に困りながらも意識をしっかりと持つて、着替えの入ったトートバッグをむんずと掴み、バスルームに逃げ込んだ。

広海がシャワーをしながら準備してくれたのだろう。

団地サイズの小さな四角い湯船には、湯がたっぷりと入っていた。凛香はゆっくりと身を沈めると淵に手を掛け、そこに顔を載せて、広海と初めて口づけを交わした大学一年のクリスマスの日を思い出していた。

前年の秋にストリートミュージシャンの仲間入りをして、広海の誘いでユニットを組むようになって一年経った頃、彼の音楽仲間にライブハウスでの演奏の助つ人を頼まれたのだ。

インディーズで活躍中の音楽グループが、キーボード担当メンバーの突然の脱退で困っていると言つ。

つまりその日一日だけ、凛香にキーボードを変わりにやって欲しいといふことだった。

が、しかし。凛香はストリートの活動はそれなりに楽しんでやつていたのだが、それ以上のことはあまり乗り気ではなかつた。

もともと人見知りの激しい方であるし、人と接するのが苦手なこともあり、そろそろ広海とのユニットも辞め時なのではないかとまで思い始めていた時期でもあつた。

それを知った広海がしきりに凛香を引きとめ、なんとか一年持ちこたえたという部分もあり、この演奏依頼もできることなら断りつかつたというのが凛香の本音だつたのだ。

でも、どうしても助けてやつてくれという広海の願いを結局断りきれず、彼の言つことをそのまま信じてライブを引き受け、リハーサルにもしぶしぶながら参加した。

ところが……。ライブ当日にとんでもない事実が判明するのだ。

凛香のために用意されていた派手な衣装と、プログラムの変更。そして……。

そのグループを脱退したキーボードのメンバーなんて、元々存在しないと突然知らされる。

そもそもそのライブは凛香と広海のために企画されたもので、広海の音楽仲間と、ある有名なレーベルのレコード会社が仕立てた、インディーズとしてのデビューライブだったというわけだ。

その先には、メジャー・デビューへの道も開けていたらしい。

あまりの仕打ちに驚いた凛香は、広海に説明を求めたが、広海も知らなかつたとシラを切る。

そんなはずはないと想いながらも、満員の観客が今か今かと凛香と広海の出番を待つてている状況で、へソを曲げてステージを放棄するわけにもいかず……。

とりあえずこの場をこなそと、すでに用意されていた超ミニのレザースカートに膝上までのロングブーツ、へソ出しで、ラメ入りのド派手なタンクトップという、目を覆つぶつな奇抜な格好で観客の前に立ち、ステージが始まった。

もちろん恥ずかしさのあまり何度も卒倒しそうになつたのは言うまでもないが、どういうわけか、曲が進むごとに照れの皮が一枚ずつ剥がれていき、広海のギターとサイドボーカル、そして他の仲間たちのドラムやベースに乗せられて、いつになく楽しいステージになつてしまつたのだ。

ライブ会場の最前列には、いつもストリートで陣取つて応援してくれている馴染みの女子高生の顔もあり、彼女たちから力をもらつ

たおかげで、一層盛り上がったステージになつたのかもしれない。

無事出番が終わり、楽屋で仲間から労いの言葉をかけてもらひ。この間にか、開演前の怒りもどこかに消え去り、興奮冷めやらぬまま廊下の隅で広海に抱きしめられ、そのまま告白せられるのだ。

そして、天にも昇る気持ちで交わした口づけの後、通りかかった仲間がニヤニヤしながら広海に言つたひと言が、凛香に真実を突きつける。

「鶴本。やっぱ、おまえの言つたとおりだつたよ。レコード会社の人も手応え感じてたみたいだぞ。凛香ちゃん、すげえな。もうデビュー間違いなしだよ。俺らはバックバンドで支えるから、おまえはもっと曲を書いてこれからもがんばってくれ。それにしても鶴本つて、プロデュースの才能もあるんだな。衣装もプログラムもバッチリだつたぜ」

そう言つて、広海の肩をパンと叩いて、消えていった仲間の男。

凛香は広海を睨んだ。多分、怒りに燃えさかる目で。

広海はしまつたと言つのような顔をして、申し訳なさそうに眉を顰め、凛香を窺い見る。

「めん、いつもしないと、おまえはここに来ないだろ、などと言つて。

広海はすべて知っていたのだ。それも、凛香に内緒で全てのことを行び、おまけに彼女の心まで奪い取つとした。

凛香の手のひらが広海の頬を捉え、周囲一帯にパシッと乾いた音を響かせる。

衣装を着たままコートを羽織り、荷物を抱えて即座にそこを飛び出した凛香は、その日から広海とのコンタクトを一切拒絶したのだった。

あの日以来、彼から顔を背け続けたにもかかわらず、神様は再び凛香を広海に引き合わせた。

あの時はらわたの煮えくり返るような激しい怒りも、今では嘘のように鳴りを潜めてしまった。

凛香自身が教師になつてみて、当時の広海の気持ちが理解できるよくなつたのかもしれない。

凛香も常々、生徒の才能の芽をビビリとかして伸ばしてやりたいと思つてゐる。

有り余るほどの感性をきらめかせている生徒に、その才能を伸ばすため、あの手この手の助言を惜しまない。

あの時の広海が凛香にしたのと同じことを、彼女自身もやつているのだ。

凛香のミコージシャンとしての将来を、彼なりに後押ししてくれていただけなのに。

それを裏切り行為だと思い込んだ凛香は、ずっと彼のことを恨み、自分も彼を愛しているのにその気持にわざと蓋をして、つい最近まで彼を拒否し続けて…… また。

「おい、大丈夫か？」

バスルームの折り戸がガバッと開き、広海が中を覗きこむ。

凛香は突然の広海の出現に、声も出ない。

上半身を隠すことも忘れて、手に載せていた顔をはっと上げ、過去に戻っていた意識を現在に引き戻す。

「おお、生きてるな。よかつたよかつた。眠りこけて、溺れちまつたんじやないかと思つたぞ。早く上がって来いよ。ビールがよく冷えて、うますうだぞ」

広海に手を引っ張られて無理やり湯船から出された凛香は、彼の手で広げられたバスタオルにふわりと包まれ、その上から再び力いつぱい抱きしめられた。

31・派手好きな彼氏

凛香は、あれから明け方まで広海と飲み続けた。

砂川の期待に応えるため、あれこれ策を練つたのだが、不思議な物で、ついさっきまでのところけそうなほどの恋人モードが、瞬時に昔の音楽仲間モードに切り替わり、時に激しく議論を交わしたりもした。

かと思えば、ギターを取り出してきた広海がゆっくりとアルペジオを奏で始めると、いつしか一緒になつかしい曲を口ずさみ、長年のブランクなど微塵も感じさせないくらい息の合つたハーモニーが、室内に響く。

いくら住人が少ない富舎とはいえ、真夜中だ。近隣から苦情が舞い込む可能性もある。

歌い終わつたあと、凛香は広海と顔を見合させて、いたずらをした後の子どものように首をすくめてクスッと笑つた。

そしてその先は、以前の一人には決してなかつたこと……。
そう。見つめ合ひ、顔を寄せ、そつと唇を重ねるのだ。

初めビール味だった口づけは、凛香の父親お気に入りの冷酒味に変わり、広海のとつておきの白ワイン味で締めくられる。

一晩の間に交わした口づけの数は……。もつ途中から数えるのを放棄してしまうくらい、何度も何度も唇を合わせた。

六時半に携帯のアラームで田が覚めた時、凛香はソファの上に行儀よく横たわっていたが、広海は凛香の真下、リビングの床で、ビルの空き缶を枕にソファとテーブルの細いすき間にはまり込むよ

うにして眠っていた。

確か、一人で抱き合ひついでソファに身体を横たえたはずだつたのだが……。

凛香も知らないうちに、広海が自然落丁したということだろう。いくら北欧製で大きめのソファだと言つても、大人が一人で寝るのには到底無理があると、今さらになつて氣付くのだ。

凛香は、床に転がつて氣持よさそうに眠つている広海をそのままに、本日の始業式のために持参した麻のパンツスースに着替え、朝食の準備に取り掛かつた。

ピカピカに磨きこまれたシンクの下からフライパンを取り出し、これまた新品同様のコンロの上にそれを載せて、田玉焼きを作る。初めて使う他人のキッチンなのに、凛香のイメージどおりの場所に使いたい物が収納してあり、とてもスマーズに事が運ぶ。

半熟卵が好きな広海のために、黄身が固まらないうちに皿に移し、冷蔵庫の野菜室に入つていたトマトを切つて添え、リビングのテーブルに運んだ。

「広海、ひーるーみー。起きる。朝ごはん、出来たぞ」

凛香はしゃがみこみ、まだ寝ている広海を揺り動かす。

田を開けた後もしばらく微動だにしなかつた広海が、ようやくいつもと違う朝の状況を認識したのか、慌てて身を起こし、極上の笑顔を振りまいて凛香を抱きしめた。

田玉焼きと湯を注いだだけのインスタント味噌汁の朝ごはんを、

恋人になつたばかりの男性と向かい合つて食べる。

凛香にとつてそれは、生まれて初めての経験だった。

今まで付き合つた相手とは、一緒に朝を迎えたことなど一度もなかつたのだ。

広海の淹れてくれたコーヒーも最高においしい。

いい香りが部屋中を包み、満たされた気持になる。

毎朝広海のコーヒーが飲めたなら、どんなに幸せだらうと今まで思つてしまつ。

田の前の愛しい人は、いつも増して田じりを垂らし、じつとこつちを見つめた後、微笑みかけたりする。ちょっと薄氣味悪い。

「広海。へらへらしてないで、早くコーヒーを飲めよ。や、仕事に行くぞ。忘れ物はないか？」

凛香は食器を片付けながら、部屋をぐるりと見回す。

「ある。大事なもの……」

そう言つて、コーヒー カップを手にした広海がぬつと立ち上がり、シンクの前に立つ凛香の脣を、これまで器用に瞬時に奪う。

どんな忘れ物だ。朝からキスとか。もう本当に信じられない……。凛香は広海のありえない行動に耳まで真っ赤にして、ふいと顔を背けた。

タベはアルコールも入つていたし、自然とそういうことも出来た。でも今は太陽の光が燦々と窓越しに降り注ぐ朝だ。恥ずかしくて、どんな顔をすればいいのかわからない。

万が一、学校内でそんなことをやってみる。即、別れてやる。凛香は鼻息も荒く、広海をギロリとひと睨みし、身支度を整えた。

ほんの数時間前まであれだけ飲んでいたにもかかわらず、一日酔いにはほど遠い凛香は、まだまだ飲み足りない気分だった。それは広海も同じで、凛香に対してもテレテレする以外は、至つてまともだ。

けれど、さすがに車で通勤するには無理があるので、最寄駅から電車を使うことに決めた。

となると、別々の車両に乗る必用がある。生徒達も乗ってくるので、そのあたりは細心の注意を払わなければならない。

広海との新たな人生の幕開けでもある新学期が、とうとう今日からスタートしたのだ。

美術教室は中館一階の東の端にある。準備室にも机があり、三十代の男性教師と一緒に、第一の職員室としてこの部屋を使っているのだが。

本日は始業式だったため、平常の授業がない。

ホームルームを終え、クラス業務から解放された凛香は、提出されたばかりの山のような宿題を抱え、美術準備室にやって来た。

三時からは定例の職員会議が始まる。それまでに提出物のチェックを済ませようと、かさ高い荷物を胸の辺りで抱え込みながら、準備室のドアを開けようと手探りで鍵を差し込む最中だった。

荷物を下ろせば、もっと簡単に開けられるのはわかっているのだが。

半ば、鍵開けゲーム的な感覚で、凛香はいつもその状況を楽しんでもいた。なのに……。

「おい、何やつてるんだよ。鍵、貸してみ?」

そう言つて凛香の手から有無を言わせず鍵を奪い取ると、片手でいつも簡単にガチャッと準備室のドアを開錠し、さあ、中くじ引きと凛香を部屋に押し込むスース姿の男……。

まるで高級ホテルの接客係のように、しなやかで卒のない身のこなし……って、そんなことではなくて。

なんでこいつは、わざやかな人の楽しみを、そんなに簡単に奪うんだ!

「あと少しで開きそうだつたのに!」Jの、K・Y野郎!」

凛香の怒りは収まらない。

「おい、何怒つてんだよ。おまえが困つてんだつと思つて、人がせつかく親切に開けてやつたのにさ。広海さん、どうもありがとうつて、どうして素直に言えないんだ?」

「はあ? 何で礼を言わなきゃいけないんだよ。私はね、いつもこうやって抱えきれないくらいの大荷物持つて、鍵開けてんの。一発で鍵穴にささつたときの嬉しさといつたら、ホールインワンビンゴの騒ぎじゃないんだぞ。あと少しだつたのに……。つたくタイミングの悪い奴め。で、なんで南館三階の主がここにいるんだ?」

机の上にドサッと荷物を置いた凛香が腕を組み、広海を問いただす。

「おまえに会いに来たに決まってるじゃないか。昼休みくらい、一緒に居てもいいだろ？ なあ……」

なあ、凛香……と猫なで声で擦り寄つてくる。凛香は呆れ果てて、横に立つ広海を軽蔑の眼差しで睨みつけた。

こいつは今、何か体内の部品が外れかかっているのだ。理性を保つネジをどこかに落としてしまったに違いないと思うけれど、気持を落ち着ける。

だが、このまま野放しにしておくわけにはいかない。

はつきりと言つておく必要がありそうだ。凛香は心を鬼にして、広海に向かつて言つた。

「一緒にいていいわけがないだろ？ いいか、広海。ここは学校だぞ。始業式で、授業が早く終わつたといつても部活はある。ここだって、誰が来るかわからないんだぞ？」

「別に変なことするなんて言つてないし。今朝駅で買ったパンを食べながら、例の件の相談でも……と思つてね」

広海はパンが入つた白いレジ袋を持ち上げ、にっこり笑う。
例の件て……。ま、まさか、結婚のことだろつか？ 凛香は急に焦りを覚える。

タベは一応、関係の進歩はあつたわけだし、氣の早い広海は、結婚後のお互いの仕事の話にも触れていた。

けれど、まだきちんとしたプロポーズの言葉を聞いたわけではな

い。

セニのところは、きつたりけじめをつけてもらわないと困る。

広海ときたら、まるで我が物顔で向かいの男性教師の席に腰を下ろし、ペットボトルのキャップをぐるぐると取りはずして、「一ラゴクゴクと飲んだ。とてもおいしそう。」

そして三角パックに入ったサンドイッチを、食パン四枚分の厚みのままかぶりついて満足げな笑みを浮かべ、愉快そうに話し始めるのだ。もちろん、例の件について。

「(レ)のカツサンドは結構いけるな。ソースがいい味出しててうまい。……で、教頭に頼んだら、一つ返事で引き受けてくれたぞ」

つて、もうそんなことまで頼んだのか？　それはきっと仲人のことだろ？

広海の手回しの良さに、呆れて物も言えない。最近は仲人なしの式が主流と聞くのだが、広海の考え方が案外古風なのかもしない。

それとも広海の実家が旧家で、結婚にあたつていろいろややこしいしきたりが待ち受けているともいは?

だが凜香は今まで一度だってそんな話を聞いたことがない。

学生時代に何度も招かれた広海の実家は、ごく普通的一般家庭だった。

ただし、父親は広海が高校生の時に亡くなつたと言つていたので、母子家庭なのだ。

「衣装はどうする？　俺はどうにでもなるけど、おまえはこだわりがあるだろ？　レンタルという手もあるけど、手持ちのをリサイク

ルといつのも……」

「レ、レ、レ、レンタル？ それって、もしかして、ウエディングドレスのか？ ま、まあ、どうちでもいいけど……。」

凛香はあまりにも進みすぎた結婚話に、段々ついて行けなくなってきた。

手持ちのをリサイクルといつのも引っかかる。

広海の母親がその昔に結婚式で着た思い出の一着があるとでも言うのだろうか。

だとすれば、これは相当手ごこことなりそうだ。

「おまえ、なんか顔が赤いぞ。どうしたんだ？ そつか……。タベのこと、思い出したんだな。なんなら、今夜も、俺はいつでもオッケーだが……」

「ば、馬鹿！ だから、学校でそんなこと言つなって、やつさから言つてるだろ！」

「」に広海以外誰もいないとわかつていても、室内をきょろきょろと見回してしまう。

「こんなところを誰かに見られたらどうするんだと、気になつて仕方ないのだ。

それにいつでもオッケーとか、大声で言つことじやないだろ？

凛香は昨夜の一部始終を思い出し、再び赤面する。

「えつ？ オイおい、凛香。なにか勘違いしてませんか？ 俺はただ。今夜もおまえのために、ピアノを弾いてあげましょうかと言つてるだけなんですけどねえ……。いや、もちろん、おまえのリクエ

ストとあります。ピアノ以外でもお応えする所存ではありますか

「……おちよくりやがつて。凛香の怒りとも恥ずかしさとも取れる行き場のない感情が溢れそつになる。夕べ広海のかもし出すフローロモンにしきり呑まれてしまつた結果がこれだ。

こんな奴に心を許してしまつた自分が情けなくなる。

またもや、この恋は失敗なのだろうか……と思わせぬのに十分な証拠がこんなにも出でるつた。

「凛香、まあ落ち着けよ。」この話の続きは家に帰つてからとこつことで。今夜はきちんと布団で寝よう。もうソファはこりごりだ。落ちた瞬間は、あまりの背中の痛さに田から星が飛び散つたんだぞ。なにおまえは爆睡中だし。で、舞台なんだけビ……」

今夜もまた一緒に過ぐすことを命ぜられた凛香は、この男にはもう何を言つても無駄だと悟る。

おまけに披露宴の舞台のことまで言われても、今の凛香にはこれ以上何も考えられなかつた。

相当派手な結婚披露宴をお望みの田の前の恋人に我慢ができなくなつた凛香は、じぶしで机をドンと叩き、立ち上がつた。

「広海！ どうしてそんなに先々のことを、あんた一人で勝手に決めるんだ。芸能人もあるまいし、結婚式に舞台なんかいらないだろー。ウェディングドレスだつて、そんなもの、今から決めてどうするんだ。そんな話をする前に、やることがあるんじゃないのか？ いつ私があんたと結婚するつて言つた？」

広海がサンデイッチを口に頬張つたまま、ピタリと動きを止める。

きょとんとした顔で。目を丸く見開いて。

そして、次の瞬間、何かを察知したかのように彼の目にキラリと光が宿り、再びもぐもぐと口を動かし始めるのだ。

伏目がちになつた広海がふつと息を漏らし、不敵な笑みを浮かべてゆつくりと顔を上げ、凛香を見た。

32・告白は突然に

「おまえ……。何か勘違してるだろ?」

食べかけのサンドイッチを机に置き、腕を組んだ広海が訊ねる。
「はあ?だから、なんで教頭に仲人なんか頼んだって言つて
るんだ。いくらなんでも、気が早すぎるだろ?」

「な、仲人だつて? ははん、やつぱりな……」

広海がこれみよがしにふんぞり返り、ますます傲慢な態度を露わ
にする。

「なんだよ、言いたいことがあるならはつきり言えよ。この、自信
過剰のせつかち野郎!」

もう我慢ならない凜香は、恋人である日の前の男に、とんでもな
い暴言を吐いてしまつ。

「おまえなあ、ちょっとは慎めよ。その口」

広海が身を起こし、片肘を突いて手の甲に顔を載せ、もう一方の
手で凜香の額をツンと突いた。

もちろんその顔は少しも怒つてなどいなくて。凜香の暴走を楽し
んでモニルかのように余裕たっぷりにほくそ笑む。

凜香は広海のそのポーズを以前どこかで見たような気がしてなら
なかつた。

音楽室の逆像画、だつたかな……。そつだ。フォスターだ。

「凛香……。言っちゃあ悪いが。それは激しい誤解だぞ。俺が教頭に頼んだのは仲人のことなんかじゃなくて」

「へ？ 仲人じゃない？」

「ああ。ギターのことなんだけど」

「ギター？」

凛香は目の前の和製フォスターを、しばしじっと見つめた。
もしかして、それって、あれのことだろうか。そう、タベ砂川と約束した文化祭のサプライズ企画……。

凛香は内心焦りだす。つまり、広海が言っていたのは、決して結婚のことではなかったということだ。

衣装というのもウエディングドレスなんかではない。ステージ衣装のことなのだろう。

ならば、もちろん家にある派手目の服をリサイクルすればいい。
スパンコールくらいなら縫い付けることは出来る。舞台もしかり。
すべて、文化祭の話だったのだ。

「ははは……！ おまえさ、人の話をちゃんと聞かないから、こ
うなるんだよ。俺たちの結婚式のことだと誤解してしまったんだろ
？」

「う、うん。まあ……ね」

早合点しすぎた自分が恥ずかしくて、馬鹿みたいで。顔なんか上げられるはずもなく。

さつさまでの勢いははどうやら。凛香は俯いたまま、じつそり広海の姿を上田遣いに盗み見ることしか出来ない。

「でも、そんなおまえのフライングも、間違っちゃいないぞ。結婚の話もいろいろ決めなければならないことが山積みだしな。住む家のことやそれぞれの親へのあこがれもまだだしな」

広海がはつきりと文化祭のことだと言わないものだから、早とちりしてしまったのだ。

広海との結婚を待ち焦がれていると思われなかつただろ?つか。プロポーズの言葉もあやふやな今、このままズルズルと結婚まで話が進んでしまうのは、凛香としては納得がいかない。

以前も来栖とは職場恋愛だつたはずなのに、こんなにやりにくかつただろ?か?

学校では一人つきりになることもほとんどうなかつたし、もつと普通に過ごしていたと記憶している。

周りの誰も一人の異変に気付くことはなく、非常に静かな恋愛だった。

なのに今は……。

昨夜、身も心も一つになつた時の広海の甘い囁きや切ない表情が、何度も凛香の脳裏に蘇る。

広海から滴り落ちるおびただしい数の汗の零すら愛しいと思つた。

いくら毎の休憩中だとはいって、職場でそんなことを思い出してしまつ自分が許せないのだが、それでも尚、恥ずかしさとありえないほどの胸のときめきで、もうどうにかなりそうだった。

こんな状況で文化祭の話など、初めから無理だったのだ。

「ちーて、ちつきの続きだが……」

広海が文化祭のサプライズ企画を進めていく。額くだけの凛香は到底何も考えられなくて。広海の声が、目が、口が。その手の指も、髪の毛一本一本も。すべてが凛香の心に新たに上書きされていく。

これが人を好きになるということ?

広海との距離が急激に縮まつたこの夏以降、凛香は自分自身の内面の変化にただただ驚くばかりだつた。

「……凛香?　おい。聞いてる?　なんだ、おまえ。パンも食つてないじゃないか。なんなら俺がもうひとつだ。」「ちつき、やる」

広海が置いてくれた焼きそばパンをポンと差し出す。

「おまえ、やつぱり変だ。本当に大丈夫なのか?　タベ、飲みすぎたか?　おまえならあれくらいじや、びくともしないはずだが。熱でもある?」

にゅっと伸びてきた広海の手のひらが凛香の額を覆う。もちろん中腰になつた広海が、机をはさんで上半身「じ」と「ひ」で近付いてくる。

グレーがかつたブラウンの瞳が、凛香のすぐそばで瞬きもせず、彼女の額の辺りを心配そうに見つめていた。

「熱は……ないか。びっただんだりつな」

広海が何か言葉を発するたびに心が震え、鼓動が早まる。そのまままづつと額に触れていて欲しかったと思ひませう。

「今夜は早めに休もうな」

再び腰を下ろした広海の手が、すっと凛香から離れる。そして凛香と田が合ったとたん、自然に広海の口元がほころび、ほつとしたような笑顔を浮かべる。

凛香はその瞬間、心中で何かがはじけた音を聞いた。このまま沈黙し続けて、広海への想いを閉じ込めておくのはもう不可能だ。

「す、好き……」

耳を疑つよつた凛香の突然の告白に、ほころんでいた広海の口元が急激に強張る。

いつたい何を言ったんだと、彼の田がその真意を探るように凛香を見据える。

「広海が……好き」

言つてしまつた。真つ眞間に。それも学校で……。

広海はさあよつとしたように田を見開き、口をパクパクさせてくる。

それでも凛香はやめなかつた。

「なんでこんなに広海のことが好きなんだろう。広海は？ 広海は私のこと……」

「う、凛香……。俺もおまえのことが大好きだよ。でもな、ここ、学校だから。これ以上は……な？」

慌てて室内をぐるりと見渡した広海が声を潜めて言つ。凛香はようやく広海が焦つている理由に気が付いた。そうだ、ここは学校だった。

グラウンドでは部活中の生徒が掛け声を轟かせている。

何でことだらけ。凛香ともあろう人物が、場をわきまえずに好きだなどと思いのままを口走ってしまったのだ。

自分の無防備さにあきれ、茫然自失状態になつている凛香の手を、広海が包み込むようにして握つた。

そう言つてもらえて嬉しいと田を細めながら。

その時だった。ガラガラと音を立てて美術準備室のドアが開いたのは。

「あつ鷺野先生。ここにいたんだ。夏休みに伊勢方面にスケッチ旅行に行つてね。これ、おみやげ……つて。な、な、な、なんで鶴本先生がいるんだ？ 俺、教室間違えた？」

ノックもせずに準備室に入つて来たもう一人の美術教師が、再び廊下に出て、場所を確認している。

「さ、佐々木先生。間違つてないですから。ここ、美術準備室です」

広海とほぼ同時に大慌てで手を引っ込めた凛香は、佐々木瑛太といつ美術教師に、やや上ずつた声でそう言った。

もう一度準備室に入ってきた佐々木は、にやりと意味ありげな笑顔を向ける。

「もしかして、お一人。今、手、握ってなかつた？　あれ？　あれれれ？　おいおい、これつてもしかして……。取り込み中だつたつてこと？　いやはや、邪魔して悪いっ。そうだ、俺、職員室に用があつたんだ。つてなわけで、どうぞじゅつくり」

「佐々木先生！　違うんです。待つてください！」

凛香は椅子から立ち上がり、必死になつて叫んでいた。
ロターンして廊下に出て行つた身体をまたもやロターンさせて、にかつと白い歯を見せながら佐々木が振り向く。

「あ、いいんだよ、君たちはそのまで。気にすることないつて。あはは……。ここに入ってきたのが俺で良かったってことで。それじゃあ、邪魔者はさつさと失せますね。……そうか、そうだったのか。あははは。いや、参ったな……」

不可解な笑い声を上げながら、佐々木が準備室から遠ざかっていく。

ただしこの人は、むやみに噂を広めたりしないし、職員間のいざこざに首を突っ込むようなタイプでもない。

だがこの人のいい隣人に、これからどんな顔をして会えればいいのか。

凛香は広海と顔を見合させ、冷や汗と共に思わず苦笑いを浮かべ

てしまった。

こんな状態でこれから先、まつといで仕事を続けていいけるのだろうか。不安が募る。

佐々木の靴音と笑い声が聞こえなくなると、広海がのつそりと立ち上がった。

「んじゃ、俺もそろそろ行くわ。でもまあ、見られたのが佐々木先生で良かつたんじゃないの？ あの人なら俺達のこと、悪く言わんでしよう」「う

などと、のん気なことを言いながら準備室のドアを開け、廊下の左右を確認し……。

あつと血の間にその場から姿を消しおつた。

あなたは忍者の末裔か……。

凜香の辛らつなぼやきが、誰もいなくなつた準備室に虚しく響く。いなくなつてほつとするやら、どこか寂しいやら。せっかく広海にやると言つたのに、机の上にポシンと置き去つてされた焼きそばパンが妙にわびしい。

凜香は袋を開け、ひと口そのパンを頬張つた。結構つまい。

世界で最初にパンに焼きそばを挟んだ人は天才だと賞賛することも忘れない。

そして不幸中の幸いがひとつあることに気がつく。

さつきの美術教師のことなのだが、実はこの人。里見栄子のことが好きらしい。

彼女と広海が付き合っているのかと凜香は幾度となく佐々木に訊ねられたことがあったが、これまで知らないとしか言いようが無かつた。

栄子が広海にぞつこんなのは佐々木も承知していたので、いつ広海が落ちるのかとは「らはら」していたのだ。

あの意味不明な佐々木の高笑いが再び凜香の耳に蘇る。ずつとライバルだと思っていた広海がそうでないとわかり、湧き上がる喜びを抑えることが出来なかつたのだろう。

さつと今「」の学校内のどこか片隅で、やつたーと声高らかに叫び、小躍りしているのはもう間違いない。

「佐々木先生、よかつたな……」

凜香は「」つぶやき、また一口。ぱくつと焼きそばパンにかぶりついた。

33・アポロの横顔

その日、凛香がおたふくについたのは夜の九時前だった。

職員会議が長引き、そのあと書類を片付けて教室の戸締りを確認し、広海と一緒に学校を出た時、すでに八時半を回っていた。

昼に食べた焼きそばパンなんてとつべの昔に跡形もなく消化してしまったのだろう。

凛香のお腹は五時くらいからグーグー鳴りつ放しで、会議中突如訪れる沈黙に冷や汗をかいだ。

早く何か食べたい。そして……眠い。

凛香が何を注文するのかあらかじめわかっていたとしても言ひよつに、オーダーするや否や、瞬く間にきのこパスタがテーブルに運ばれてくる。

このスピーディーさがあたふくの人気の所以でもある。

待つていきましたとばかりに、喜び勇んでフォークにパスタをくるくると巻きつけ、パクッと食べる。

きのことオリーブオイルと醤油の絶妙なバランスが凛香の喉をうならせるのだ。

しめじとHリンギの歯ハサミたえがたまらない。上に散りばめられた海苔がよりいっそう全体の風味を引き立てている。

あまりのおいしさに、すべてを独り占めしたくなつた凛香は、隣に座る広海のフォークがこちらに伸びてこないことを密かに祈つた。

「なあ、凛香……」

ドキッとして広海を見る。が、彼のフォークは自分の皿の上でチキンのグリル焼きを突き刺している真っ最中だった。

パスタが狙われているのではないかとわかつたとたん、凛香は安堵のため息を漏らし、心置きなく彼の話に耳を傾けることが出来た。

「今夜の予定なんだが」

一口大に切ったチキンを口に頬張りながら、広海が「さうをちらつと見て言った。

「ここから俺の官舎まで、歩いても一十分くらいだ。メシが終わったら一緒に車を取りに帰つて、おまえのマンションまで送つて行く。そしておまえは着替えや仕事道具を準備して、また俺の官舎に舞い戻るつてのはどうだ？ それとも、ここで待つてるか？ 僕だけで車を取りに帰つてもいいだ。おまえ、やつと体調が戻ってきたばかりだものな。これ以上、無理はさせられないから。そうだ、ありつたけの着替えを持って来るといい。いちいち取りに帰るの、面倒くさいだろ？ そうすりやあ、週末までうちこなられるじゃないか」

今度はチキンの横に添えてあるプロッコリーをフォークで刺し、凛香の口の前に鮮やかな緑色の物体をちらつかせるのだ。おまえも味見するかと言つて。

「つて、私にくれるのは野菜ばかりかよ」

凛香は放り込まれる直前に口を閉じた。

「あたりまえさ。女性はこうするのが好きなんだろ？ 現におまえ、

きのこばかり食つてゐるじゃないか。……って、えつ？ 鶏が食いたかつたのか？ なら、そつと聞えよ。よし、一切れおまえにやつらう」「

広海が凜香の口に無理やりブロッコリーを押し込んだあと、チキンの小さな一切れをパスタの横にひょいと置く。そして……。

「お、おい。誰がパスタを食べていいつて言つた！ あーあ。なくなつてしまつたぢゃないか。私の大事なきのこパスタが……」

フォークに巻きつく限り何重にも巻きつけたパスタを奪い取つた広海が、皿にも留まらぬ早業で食べてしまい、満足げな笑みを浮かべる。うめえうめえ、と何度も言つて。

「つたく、油断も隙もあつたもんぢゃないな。で、この後、うちまで送つてくれるのはいいが、また広海んちに戻るつて、なんか面倒くさいな。今日はいのまま帰ろつかな……」

食べ物の恨みは、愛よりも深し。凜香は空になつた皿にフォークを置き、パスタ泥棒にチクリと先制攻撃を仕掛ける。

「その選択肢はなし。おまえは今夜も俺と一緒にだ。いいな」

「勝手に言つてる」

「じゃあ、勝手ついでに言わせてもらつが。実は、提案があるんだ……。おまえも官舎に移つて来ないか？ 俺の部屋の隣、空いてるだろ？ 希望すればそこに入れてもらえると思うんだ。ただ数年後には、あの官舎は民間に売却するつて噂もある。県も財政難だからな。この時勢、建て替えるより、いつそ売つぱらつて、資金を調達する方がいいことなんだろう。立ち退きまで取りあえずあそ

「にいて、将来は、俺がおまえの転勤先に合せて新居を選ぶといつ段取りでどうだ」

凛香は目がテンになつた。付き合い始めてまだわずかの時間しか経っていないところ、元のいづの居候の話だった。

それに、まだ広海との結婚を承諾した覚えは、一切……ない。

「なんで私が富舎に移らないといけないんだ。今ままでも不都合はないと思ひけど？」

毎日職場で顔を合わせてこむし、いつも夜も一緒に過ごせり
のだ。

凛香はそれで十分だと思つてこむのだが。

「毎回荷物を取りに帰るのも大変だし。俺の部屋に一人一緒に住むには狭すぎるし。じゃあ、俺がおまえのマンションの近くに引っ越せばいいんだろ? ピアノを動かすとなると、いろいろ問題もあるしな。だから、おまえが富舎に来て、おまえの借りた方を寝室とアトリエとして使えば、ちよつどいいこと思つんだけ? 2DK 一戸で4DDKKだ」

「はあ? なんだよ、その4DDKKってのは、意味がわからない
ー。」

「だから……。隣なら、ベランダの境界板を取つてもらえ、行き来も簡単に出来て、部屋が繋がるつてことだよ」

そんなこと、いきいき説明してもうわなべてもわかる。だから、
凛香が言いたいのはそりぢやなくて……。

「おまえ、嫌なのか？　いいアイデアだと思ったんだが……」

凛香は答える気力すら残つていなかつた。もう、疲れた。これ以上広海と話していくもらちが明かない。

凛香は今すぐにでも家に帰つて、一人で自分のベッドに横になりたいと思つた。

「おまえ、怒つてるだろ？　何が気に食わないんだ。パスタの味見のひと口が多かつたからか？　もう一品、何か追加しようか？　ピザもうまやうだぞ。あつ、それとも……。今日の晩、佐々木先生に俺たちのことがバレちまつたのが心配なのか？」

本当にわからないのだろうか？　首を左右にかしげ、不機嫌さの理由をあれこれ詮索する広海に、凛香は呆れ返つていた。

ここまで鈍感とあれば、今までの彼女もさぞかしこの男には苦労させられたことだらうと同情する。

今ならまだ間に合ひ。ただちに広海と別れて、この際この男に立派なしでも付けて里見栄子に差し出した方が身のためではないかとさえ思つ。

広海へのイライラがピークに達してきた。

「あー！　んもうつー！　グタグタうるさい奴だなあ。味見のことも、佐々木先生のことも。どれも気にしてない。あのなあ、はつきりと言つておくけど……。私、あんたと結婚するなんて、ひとつ言も言つてないですか？　勝手にほざくな！」

言つてやつた。そうだ、そうだ。ちゃんとプロポーズもしていいないくせに、一人勝手に盛り上がるな、と言いたいのだ。

凛香は柄にも無くぷーっと頬を膨らませ、広海の皿に残つている

一番大きなチキンのグリル焼きに垂直にフォークを突き刺し、素早く口に放り込んだ。

「なんだ。そういうことが。俺、ちゃんと言わなかつたつけ？　おまえも了解済みだと思ってたけどな。俺の前で、そんなにかわいくすねるなよ。なあ、凛香。……って、俺の、俺の、俺の！　とつておきのチキンのグリル焼きが！」

「はいはい、そうですよ、すねてますけど何か？　だから私、今夜はあんたんちに行かないから。うちまで歩いて帰るし。広海も『自由に！　……にしてもこのチキン、うまいな』

凛香は柔らかくてジューシーなチキンのグリル焼きを堪能した後、グラスの水をクイッと飲み干した。

「わ、わかったよ。じゃあ、一緒に歩いておまえんちに行こう。今夜は月がきれいだしな。そうだな、四十分もあれば着くだろう。おまえをマンションまで送り届けたら、俺はとつとと退散するから。それならいいだろ？　さ、メシも済んだし、もう出よう」

広海がすくっと立ち上がる。その隙に、今夜こそ自分が支払いをしようと伝票ホルダーに手を伸ばすが、結局、広海に奪い取られてしまつた。

いつものことだが、もし今夜限りで別れる……なんてことになれば、このまま甘えっぱなしになつてしまつ。なぜかすつきりしない。

凛香はつり銭をポケットに入れる広海に、仕方なく、いつもありがとうとボソッと礼を言つ。

ほとんど収入も変わらないのに、男だからというだけで、一方ばかりが支払うのはおかしいと常々思つていたからだ。

すでに凛香の気持を察していたのか、広海が店を出たところで振り返り、特上の笑みを見せる。

「おれがそうしたいだけなんだから、おまえは何も気にするな。おまえのために支払う金は、惜しくもなんともない。俺の全財産をおまえにやつてもいいとさえ思つてこる……と言つても、貯金はほんのわずかしかないけどな。あははははははー」

などと囁つて……。

「おい、どうしたんだ？ 凛香？ おいー！」

惱殺。

凛香は立ち止まつたまま、一歩たりとも動けなくなつてしまつた。いつたい何事だらうと、歩道の真ん中で立ち止まる凛香を避けるようにして道行く人が迂回していく。

凛香の心臓がますます早鐘を打ち始める。

広海の笑顔に、声に、そして、その優しさに触れたら最後、彼に見つめられるだけで、身体中が蕩けそうになるのだ。立つていられないほどだ。

やつぱり広海は自分だけのもの。里見栄子に渡してなるものかと、

凛香は自分自身に言い聞かせる。

「いめん。ちよつと、その……」

凛香は口もつながら、下を向いた。

「変なやつだな。まあいい。さあ、凛香。行こう。もたもたしてると明日になっちゃうわ」

広海がぬつと手を出してくる。彼の手に引き込まれるよつて、凛香は自分の手を重ねる。

重ねたはずなのに、広海の手はそのままぱりかに消えてしまふ。そして……。

広海の腕が凛香の肩をぎゅっと抱き寄せるのだ。

そつと横を見ると……。広海の横顔が月に照らされて、輪郭がはつきりと映し出されていた。

それがあまりにも明瞭に浮かび上がつてゐるよつて見えたので、驚きのあまり声もでない。

すつと通つた鼻筋とぱつちつとした目元が、石膏像のアポロの横顔にぴつたりと重なつてしまう。

何度も何度もデッサンしたアポロ像の輪郭は、目をつぶついても形作ることが出来るのだから。

こんなにも似ているだなんて、今まで全く気付かなかつた。

ヘルメスでもない。ブルータスでもない。

凛香が他の何よりもアポロ像のデッサンを好んだのは、広海の面影をそこに追い求めていたからなのだろうか。

「なあ、凛香……」

口を開いたとたん、アポロが広海に生まれ変わる。

「なに？」

広海が照れたように口元を緩め、ふっと息を漏らした。

「今日の僕、嬉しかったよ。俺のこと、好きだと黙ってくれただろ？」

「あ、ああ……」

凛香は頷く。確かにそう言つたと。

「俺、あの時、ホントにどうしようかと迷つた。真剣に悩んだんだぞ。そのまま学校を抜け出して、おまえを連れて帰るところだつたんだ。誰に何を言われてもいい、免職になつても後悔しないとまで思つた」

「広海……」

「佐々木先生が来てくれたおかげで、目が醒めたけどな」

髪の上から、広海の柔らかい口付けが、一度、三度と舞い降りてくる。

耳たぶに彼の熱い吐息を感じた時、凛香の心臓がぐくっと鳴つた。肩にあつた広海の手が、髪を梳ぐように上から下へと撫でる。そして動きを止めた次の瞬間。

「凛香。……結婚しよう。なあ、凛香。俺と結婚してくれる？」

アポロの求婚は、突然だつた。

34・月夜のプロポーズ

結婚しよう。

広海の田代が凜香だけを見て、はつきりとそう言ったのだ。声が少し上ずつてこるむづむづ感じたのは決して氣のせいではないだろう。

プロポーズを切り出すタイミングを彼なりに吟味し、断られる可能性も踏まえながら、腹をくくつて挑んだ結果に違いない。

ところがどうだらう。いや言われてみると、まるで夜空にひつそりと浮かぶ月のように、あくまでも冷静で落ち着き払っている自分がいるのに驚く。

それはもつと神々しく感動的瞬間で、ああロハナ……と、ショイクスピアの悲劇さながらに、感極まって涙を流すほどの場面だと思つていた。

無上の喜びに包まれ、溢れんばかりの幸福感に酔いしれて。

この先、どんな人生が待つてしようとも、この人と一緒に立ち向かっていくのだという使命感に燃え、ひとと抱き合って、お互いを慈しむ……はずだったのに。

その気配のカケラすらどこにも見当たらぬのは、ビックリしただろう……。

来栖にプロポーズされた時は、ただびくつして、なんど、ビックリして、と疑問符ばかりが凜香の脳裏を埋め尽くした。ありえないことだと思った。

今度こそ巷ちまたで語らわれてゐるよつな、ロマンチックな経験ができるのではないかと心のどこかで広海のプロポーズに期待していた凜香は、あまりにも普通すぎるこの流れに、肩透かしを食らつた気分になる。

それもこれも、全部広海が悪いのだ。

プロポーズの前から、結婚を前提にした話ばかりするから、ここぞと言う時に喜びと感動が薄れてしまったのだろう。

でも……。世間で繰り広げられるプロポーズは、案外こんなものなのかも知れない。
映画や小説のようにはいけないといつのは薄々気付いていたではないか。

結婚してくれの言葉もないまま、いつの間にか結婚していくいう人もいると聞く。

それに比べれば今夜の広海の姿勢は好ましい部類に入るのではないか。

凜香は広海の勇気を讃え、生真面目に彼を見つめ返した。
そして、うん、わかつたとこれまで生真面目に返事をする。

「凜香……。本当にいいのか？」

広海が少し眉を下げる、心配そうに凜香を覗き込む。

そうなのだ。凜香は愛想を振りまくのが大の苦手ときている。
そのせいか、いつも澄ましていてお高くとまっているとか、つんつんしていると言われることが多い。

こんな時くらい、にっこりと優しい笑みを返せたらいいのだが、広海の緊張が伝染している今、それは凜香にとって無理な相談だつた。

「だから、いひつて言つてゐるだろ?」

幸せな気分をうまく表現できない凛香の口から出る言葉は、いつ
だって勇ましい。

「俺で……いいんだな?」

あれほど自信満々に引越しや結婚後の勤務のことまでも話してい
たくせに、いやとなると情けないほど弱腰になる。

つべこべ言わず黙つて俺について来いと胸を張つて言つてくれれ
ばいいのに……。

凛香はふとそんな考えを持つてしまつた自分にびっくりしていた。
自分の意見を持たない優柔不斷な男も嫌いだが、強引で封建的な
男はそれよりも嫌いだつたはずなのに。

だが、自分をリードしてくれる男性像を無意識のうちに広海に期
待している自分がいるのを知つた今、凛香は自身の心境の変化にと
まどつ。

「つたぐ……。広海がいひつて、何度も言つてゐるじゃないか。広海
以外の男とは……結婚しない」

凛香は自分の言動が恥ずかしくなつて目を逸らし、密着しながら
隣をゆつくりと歩く広海のスーツのボタンを、紺色の生地ごときゆ
つと握り締めた。

「そつかそつか。それを聞いて安心したよ。つて、今夜のおまえ。
かわいすぎないか? ああ、俺。マジでヤバイくらい、おまえがか

わいいく思えるんだが

凛香の頭をがばつと抱え込んだ広海が、もう一方の手で、ボタンを握っている彼女の手をがっしりと捉えた。
知らない人が見たら、広海が誘拐犯だと疑われるくらい、がんじがらめになっているのだ。

「ひ、広海。このままじゃあ、歩きにくいくらいだけど……」

そうされるのが決して嫌ではないのだが、広海の腕が凛香の視界を妨げ、足元がおぼつかなくなるのだから仕方ない。

「あ　ごめん」

広海が腕の力を緩め、凛香の頭にあつた手が、肩に下りてくる。

「よし。やうとなつたら式は早いほうがいいな。冬休みに式を挙げるつてのはどうだ？」

凛香はひとつとくつこてきた広海の顔を押しのけて言った。それはあまりにも早すぎやしないかと。

「冬休みに……なんて、無理だよ。いろいろ準備もあるし、間に合わないつて。それに寒いぞ。家族や招待客にも気の毒な気がする。
来年の春休みじゃダメなのか？　それか、夏休み

「な、夏休み？　夏休みはいくらなんでも遅すぎるだろ。俺は待てないね。それなら先に籍だけ入れて、明日からおまえに同居してもらう」

「明日から同居？ なんでそうなるんだ。信じられない。本気で言つてるのか？」

「あたりまえだ。今だつてそれに近い状況なんだし。おまえは嫌なのか？」

「嫌とか、そんなんじゃなくて。非現実的だろ？ 生徒になんて説明するんだ。内緒にするには無理があるし。校長だつていい顔はない」

「籍はちゃんと入れるんだ。別に誰にも咎められないと思つ……けど。やっぱり、ちょっとまずいか……」

「ああ。まずい」

「じゃあ……。百歩譲つて、春休みに式を挙げるのなら。それで手を打つてもいい。それが限界。それ以上引き伸ばすのは絶対にダメだ」

凜香の肩を抱いていた広海の手に力が入った。

でも凜香の本心は、春休みでも早すぎるのではないかと思っていた。
それは、結婚を先延ばしにしようとか、広海との生活に不安があるとか、そういう理由ではなかった。

問題は来栖の存在だ。

つい先日別れたばかりなのに、もう次の相手と結婚が決まったとなると、一股疑惑は避けられない。

栄子にも言つてしまつたのだ。自分には前任校に彼氏がいるので広海とは付き合つてないと……。

あれは夏休みに入つてすぐのことだった。それなのに、もう広海と結婚するなどと、いつたいどんな顔をして言えといつのだらう。これが一股でなくて何？

だが、待てよ。来栖の方が先にルール違反を犯したのではなかつただろうか。

凛香という相手がいながら、勝手に見合いをして新しい相手に出会ってしまったのは、来栖だった。もうすでに冷え切つた関係ではあつたが、彼と別れていたわけではない。

凛香が広海に身も心も許したのは、昨夜のこと。来栖とはそれ以前に話し合い、きつちり別れている。

栄子には広海からきつぱりと言つてもうれば、なんとなるだろう。

う。

凛香は自分に非がないとわかると、幾分気持が楽になつた。

「おまえさあ、また何か一人で考えて、勝手に結論出してるだろ？」

「ええっ？ あつ、い、いや、その……」

広海に急に顔を覗きこまれ、じどうもじうになる。

この頃、このよつなパターンがあつ。

顔を見られているだけなのに、心の中まで見透かされているような感覚に陥るのだ。

凛香は脳内に駆け巡つていた一股疑惑を消し去り、遠慮がちに広

海と田を合わせる。

「や、それじゃあ、その……。結婚式は春休みで」

「よしひ。これで決まりだな。今月中にでもおまえの実家に行って、
ご両親にあいさつするよ」

「あいさつ？　ああ、そうか。そうだよな。結婚つて一人だけの問題
ではないんだもんな」

凛香は結婚へのあまりにも早い展開に気持ちがついていかない。
そうだった。親にはまだ何も知らせていないので。

来栖と別れたことすら言つていないとこに、昔の友人と結婚
することになつたと言えば、なかなかしごくつするだらう。

凛香の両親は共働きだ。それも自営業なので多忙を極めている。
急にあいさつと言つても、家にいないのであれば話にならない。

「なあ、広海。多分うちの親、今月中に会うのは無理だと思つ。両
親そろつて、北海道に転勤中なんだ。文化祭が終わつてからでもいい
か？」

「俺は別にいいけど……。それにしても、北海道つて。えらい遠い
な。札幌か？」

「いや、違う。函館だ」

「函館？　へえ～。そなんだ。でも、夫婦揃つて北海道に転勤つ
て、なんか、すごいなあ。昔からおまえの親父さん、忙しそうだつ
たのは知つてるけど。でもおまえんち、自営つて言つてなかつたか

? なのに転勤って、どうこうことだ? 「

「あ。私も詳しいことはわからないが、とにかく今は函館にいる。運送業だから、何か利便性があるんじゃないかな?」

「ふうん。そうか。じゃあ、『両親がこっちに帰つて来た時、おまえの実家にお邪魔させてもいい』ことにするよ」

「そうしてくれ。それはさておき、うちの両親は私たちの結婚に反対はしないだろうから、はつきり言って、事後報告でも問題はない。っていうか、これまでにもちゃんと見合い写真を押し付けられて、結婚をせつつかれていたからな。結婚が決まったって言えば、大喜びすると思う。それに広海のことよく知ってるし」

「見合い? それは聞き捨てならないな。来栖さんといい、見合い相手といい。おまえを取られなくてよかつたよ」

「広海、私だつて広海が一人でいてくれてよかつたと思つてゐるぞ。はあ……。それにしても、結婚つて大変だな。他にも決めなければならぬことがいろいろあるし。式場のことや、住む家のことも」

ついでつきまではプロポーズの言葉が嬉しくて気分も高揚していたのだが。突如、現実という大きな壁に阻まれ、何から手をつけていいのかわからなくなる。

今までは、なんでも自分で決断して自分の思うようにやってきて、何も後悔はなかつたはずなのに。ここ一番の人生の分岐点でどうしようもないほど不安な気持ちになる。

「そうだな。いろいろ大変そうだけど、順番に決めていくしかない。

学校にも早めに結婚のことを言った方がいいだらう」

「学校にも？」

「そうだ。あまりギリギリに知らせると迷惑かけるだろ？ 勤務地の移動のこともあるし」

「そ、そだつたな。ねえ、広海。私、どうしたらいいんだろ？ こんな経験は生まれて初めてだから、先が見えなくて、なんだか怖い。本当にうまく結婚にたどり着けるのかな……」

「あはははー、凛香ともあるう人が、どうしてこれくらいのこと怖気づいてるんだよ。まだ何も始まつていない。全ではこれからだつていつのに……。でも安心しな。なんとかなるつて。俺にまかせておけよ。な？」

凛香ははつとして広海を見る。

俺にまかせておけ……か。凛香は心の中で、広海が今言った言葉をかみしめる。

そうなのだ。結婚というのは一人の共同作業だ。

ひつやつて励まし合い、互いを補い合つて、一步ずつ目標に向かつて進んでいく作業なのだ。

なんだか今夜は、広海が頼もしく思える。

九月といつても、まだまだ夏の名残があちこちに残つている月夜の晩。

広海と触れ合つている右肩が少し汗ばんできたけれど、もう少しのまま一緒にいたいと思つた。

「広海……」

凛香は前方に自分の住むマンションが見えて来たのを確認しながらつぶやいた。

「なんだ、凛香」

広海が前を見たまま答える。

「今夜……。うちに泊まっていく?」

凛香を見た広海の目が、一瞬、大きく見開かれる。とても不思議そうな顔をして。

自分の耳を疑っているのだらつか。

でも瞬く間に目を細め、微笑み、そして……。
凛香の脣にそっと口づけを落として、イエスと小さく呟きやいた。

35・順番抜かし

今週は田の回るような忙しさだった。もちろん仕事そのものの忙しさもあるが理由はそれだけではないと、水垢ひとつついていないピカピカの洗面所で、凛香は思考を巡らせる。

今日は土曜日。ただし午前中は凛香も広海も部活の顧問としての仕事があるので早朝から出勤準備に余念がない。

今朝も一人揃って広海の部屋から職場に向かうのだ。

プロポーズを受けた晩、一度だけ凛香のマンションから一人で出勤したが、シングルベッドの狭さと近所の住民の興味本位の視線がネックになつて、それ以来広海の官舎が一人の拠点として定着した。

広海の車で一緒に出勤するにあたつて、凛香の提案した作戦が今のことろ順調に遂行されている。

つまり……。毎朝、三人で出勤しているのだ。

同じ官舎に住む同僚の美術教師を巻き込み、広海の車に同乗してもらつことで、事なきを得ている……というわけだ。

美術教師の佐々木は、広海が凛香狙いであるとわかつた日からすこぶる上機嫌だ。

栄子を振り向かせたい佐々木と、なんとしても栄子を遠ざけたい広海の利害関係は見事に一致している。

凛香は広海と半同棲状態であることを佐々木に告げ、学校で怪しまれないために、是非とも一緒に出勤して欲しいと願つたといふ、喜んで聞き届けてくれたのだ。

「コンビニでばったり出会った生徒とも、今のところ非常に友好的な関係を保っている。

凛香と広海の結婚も次第に外堀が固められつつあった。

午後は市内の音楽スタジオに広海と一緒に出向く予定になつている。

というのもそれには教頭が一役買つてゐるのだ。

広海が文化祭のステージのことを話したところ、予想通り一つ返事で話に乗ってきた教頭は、昔の音楽仲間が経営している音楽スタジオを早速練習に使えるよう押さえてくれて、今日初めて、ドラムとエレキギター、そして凛香のボーカルを合せることになった。

昔使つていたエレキはとっくに処分してしまつたので、先日息子を伴つて四半世紀ぶりに楽器店を巡つたなどと田じりにたっぷりしわを刻ませて笑みを浮かべる教頭は、間違いなく自分たちと同類であると凛香は確信した。

そして残すところはキーボードの担当者だが……。まだ決まっていない。

広海に心当たつはあるらしきのだが、もう少し待つてくれと叫うばかりで、凛香には誰であるのかはまだ知らされていなかつた。

文化祭までに本当に間に合つただろうか？

実行委員の生徒たちも、水面下でどんどん準備を進めていく。もう後には引けない。

こぞと叫つ時のために、凛香は弾き語りをする覚悟も出来ていた。

午後の一時を過ぎて、ようやく美術部員の生徒達が全員帰宅した。美術室に誰もいないのを確認して戸締りをする。

そして広海の待つ駐車場に向かおうと、階段を降りかけたその時

だった。

階段の途中で、凛香の進行方向にすつと誰かが立ちはだかるのだ。ぐるぐるカールした巻き毛が肩の下で揺れるその人は……。

そう。社会科教師歴三年田、粗皮うらゆ広海にじだつこの里見栄子だった。

身動きの取れない凛香を威嚇するかのよつて下の段から睨みつけた栄子の形相は、まるで般若の面のじとく、怒りと嫉妬にまみれていた。

「鷺野先生。お話があつます。ちよつとよひじこでしようか…」

アイラインでくつさりと縁取られた田をざわつと見開いて、早口でまくし立てる。

よひしいわけがない。今からスタジオに音合せに行くところに、栄子にかまっている時間などあるはずもなく。でも栄子はいつも彼女ではなかつた。

有無を言わせぬ毅然としたその態度に圧倒され、凛香はいつの間にか手を引かれて女子職員更衣室に引きずり込まれた。

「お、おい。私は、時間がないと言つてゐるだろ？ なのに……」

「なのにも、だのにもありません！ いいですか、鷺野先生。今日と並ぶ今日は、はつきりとわからりますから…」

愛らしき顔の真ん中にあるこれまた上品でちょこんとした鼻から、栄子らしからぬ荒い息が漏れる。

出勤義務のない土曜日ではあるが、半分以上の教師が所用で学校に出てきている。

部活をしている生徒もいる。そんな中で、いつたい何を話すといふのだらう。

凜香は更衣室の奥に設置してある和室で、テーブルをはさんで栄子と向き合つて座つた。

「今日出勤してる女性職員は、あたしと鷺野先生だけなんです。なのでここには誰も入つて来ません！」

凜香の手をじっと見据えながら、栄子がきつぱりと言つた。
そりやあそつだ。ここは女子更衣室なので、男性教師は誰も入室できない。

と言つことは、このまま誰に引き止められることもなく、延々、栄子との気まずい対面が続くことになるのだろうか。

凜香は腕時計に目をやり、広海との待ち合わせ時刻が迫っていることに焦りを感じ始めていた。

「鷺野先生、前にもおつしゃつていきましたよね。鶴本先生とは付き合つてないって。でも、それって、ホントなんですか？ 補習講座以降、いつも鶴本先生と一緒に帰つてるみたいだし。朝だつて……」

「ああ、それは……まあ、あれだ。夏以降、私の体の調子が悪かつたのと、文化祭に向けて私物の荷物も多いので、佐々木先生共々、鶴本先生の世話をなつてゐるんだけど」

「それはそうですが。でも、鷺野先生にはちゃんと付き合つてゐる彼氏さんがいるんだし。そんな無責任な行動は慎むべきだと思います。違いますか？」

「む、無責任つて……。

凛香はこの期に及んで、栄子に嘘を突き通すつもりはなかつた。きちんと本当のことを話すのが筋だと思つていた。だがこんなに急に本人に責め立てられるなどとは想定外だつたので、戸惑いを隠せない。

凛香は姿勢を正して、コホンとひとつ咳払いをした。そして、壁にかけてある、山里の風景が描かれたカレンダーに目をやり、落ち着け落ち着くんだと自分自身に言い聞かせる。いよいよ何もかもぶちまける時が来たのだ。

「里見先生」

「あ……。は、はい」

凛香の気合の入った眼差しに栄子が一瞬たじろぐ。

「前に先生に言つた時、あの時は確かに鶴本先生と付き合つていなかつた。けど、ちょっと事態が変わつてね。前の彼とも別れだし。まあ、今は、その……。付き合つている。鶴本先生と」

「えつ……？ つ、付き合つていいんですか？ 鶴本先生と？」

「やうだ」

田の前の栄子の顔色がまるまる青ざめていく。

「そんなの、嘘です。絶対に嘘です！　だって、鷺野先生と鶴本先生は、一学期まではほとんど話もししないし、田も合わさないし。鷺野先生は、鶴本先生のタイプじゃないです」

「あ……。私もそう思つ。なんで鶴本先生の相手が私なのは、今でも謎なんだが……。でもまあ、嘘言つても仕方ないし。これは事実だから」

その点に関しては、凛香も栄子に深く同調した。

「こんな女らしさのカケラもない自分に、どうして広海が心を寄せてくれるのかは、凛香にとつてもいまだ七不思議のままなのだ。

「」、困ります。どうして鶴本先生が鷺野先生を選んだんですか？絶対におかしいです。つり合わないです。そりやあ、二人ともとても背が高くて、見かけだけはお似合いだと思いますけど……。でも鶴本先生は、女の子らしい、かわいい人が好みなんですね！」

「つて、なんで里見先生があいつの好みまで知ってるんだ？」

「鶴本先生のこと、あいつだなんて……。やつぱり鶴本先生のお相手は鷺野先生じゃないです。なんであたしが先生の好みまで知つてるかつて、訊かれましたよね？　それは前の彼女さんが、とても優しそうで、控え目で。きれいな人だったんですね。だから……」

「ほつ……。なるほどね。里見先生は、あいつ……じゃなくて、広海の前の彼女のことも知つてるんだ。私は知らないけど」

「やだ。鷺野先生、知らないんですか？　よくそんなんで、付き合

つてるつて言えますね。前の職場の同僚だつたらしいです。彼女から告白されて、周囲にも応援されて付き合つたらしいですけど。週末になるたびに彼女が遠路はるばる会いに来てたみたいで。でも今年になつてもう別れたつて聞いて、今度こそあたしの番だつて、そう思つたのに……」

「今度こそつて、広海がそつと話つたのか？ 今度は里見先生と付き合つて？」

凜香は耳を疑つた。もし広海が期待を持たせることを言つていたのなら、栄子の言い分もわかる。

「そうです。鷺野先生は、順番抜かしです。次に鶴本先生と付き合うのは私なんです。だつて、去年のバレンタインデーの時、チョコを渡してあたしと付き合つて下さいと言つたら、今はダメつておつしゃたんです。もちろん彼女がいるのは知つてました。でも遠距離だし、もしかしたらつていう期待もあつて告白しました。もちろん、先生の返事はノーです。彼女がいるから付き合えないつて。でも今年は違います。もう彼女と別れてるんだし、チャンス到来だと思つたんです。だから私、今年のバレンタインデーに言ついました。次こそは私と付き合つて下さいつて」

順番抜かしつて、いつたい……。ブランドの順番待ちもあるまいし。

凜香はあきれながらも、栄子の話に耳を傾けた。

「でも鶴本先生つたら、彼女と別れているにもかかわらず、今はまだ誰とも付き合えないとかうまく言い逃ればかりするんです……。だって今年のバレンタインデーのお返しに、すつごくかわいい小物入れを下さつたんですよ。あれはきっと、将来アクセサリーをプレ

ゼントしてくれた時に入れためのものだつてわかりました。絶対そうです。なのになんで鷺野先生があたしの前に割り込むんですか？ よ～く考えてみてくださいよ。鶴本先生が鷺野先生みたいな人を彼女にするわけないじゃありませんか。補習講座の時に仕事を手伝うのと引き換えに、鷺野先生が鶴本先生を脅迫したに決まつてます。ひどすぎます。あんまりです。鶴本先生が、かわいそう……

脅迫？

凛香はこの言葉を聞くや否や、ブツッと何かが切れたような気がした。栄子の言いたい放題に、凛香もついに黙つていられなくなつただ。

「里見先生。それはあんまりじゃないですか？ なんで私がそこまでして、広海と付き合わなきやいけないのか、理由がさっぱりわからない。それに考へてもみなさい。もし私が里見先生の言うように、脅迫したとして……。鶴本先生が脅迫されて黙つているような人物だと思うのか？ ええ、どうなんだ！」

凛香はテーブル越しに、栄子に詰め寄つた。

「そ、それは、確かにそうですけど。鶴本先生は、正義感の強い方だし……。でも、鷺野先生のおっしゃることなんて、到底、信じられません。優しい鶴本先生は、前の彼と別れた鷺野先生が不憫だつただけです。きっとそうです」

凛香は栄子のあまりの悪態ぶりに反論する気力も失せてしまつた。だが、この勘違いお嬢様をこのまま放つておくわけにもいくまい。

凜香はおもむろに立ち上がった。

「わかった。それじゃあ、今から私について来て。広海も交えて、きちんと決着をつけよう」

凜香は栄子を横目で睨みながら、投げ捨てるよじに言った。

「ええつ？　あの、あたし、そんなつもりじゃ……」

突如威勢を失った栄子が狼狽し、落ち着きをなくす。

「つべこべ言うな！　言いたいことがあるなら、広海本人にはつきりと言つてくれ。いいな！」

鷺野先生、待つてください、と叫びながら追いかけてくる栄子を後方に従えて、凜香は鼻息も荒く、広海の待つ駐車場へと急いだ。

35・順番抜かし（後書き）

1/11 00:11 にコメントを下さった方。

そして、始まるをお読みいただき、ありがとうございます。
コメントをいただき、とても嬉しかったです。一いちを覗いて下さ
つてるといいな。

続きが早く更新できるよう、がんばりますね。

これからもよろしくお願いいたします。まゆり

「凛香、遅かつたじゃないか……って、おいーなんで、里見さんも一緒になんだ？」

すでに駐車場で待機していた広海が運転席の窓から顔をのぞかせ、田をまるくしてくる。

一人のただならぬ空氣を読み取ったのだろう。慌てて車から降り、いつたいこれはどうこうことだと言わんばかりの訝しげな視線を凛香に投げかけてくる。

「広海。あなたに話があるそうだ」

凛香は振り返つてすぐ後ろにいる栄子の腕を掴み、広海の前にひとと突き出した。

「痛いっ！ や、鷺野先生。乱暴はやめて下さって、いつも言つてるじゃないですか！ あ、あの、鶴本先生。あたしは、その……」

力任せに凛香の手を振りほどいた栄子は、とも痛そうに掴まれた腕をわすりながら、訴えかけるような田を広海に向けた。

「あ、あの、鶴本先生。あたしは、その……」

「話とは、いつたい何でしょう……」

「いや、あの、それが……」

せつ きまでの勢いはどじくやう。広海を前にしたとたん、栄子はまるで借りてきた猫のよひこじゅんとなつてしまつた。もじもじしながら、次第に声も消え入りそつになる。

一部始終を見る限り、栄子の態度は計算された演出ではない……といつのはわかる。

栄子は、本当に広海のことだが好きなのだらう。その声も、その表情も。すべてが彼を好きだと物語つてこるよひに思えた。

しかし、だからと云つて同情は禁物だ。凛香の広海への想いは、もつ後へは引けないとこひまできていのだから。

「里見先生。状況がいまいちよくわからないんだが……。とにかく学校内でこの状況はまずい。場所を変えよう。里見先生。隣町のローハー、知つてゐる?」

広海が東高の生徒の学区外にあるローハーショップの店名を挙げる。

「し、知つてます。先日オープンしたばかりのチューン店……ですよね?」

「そうだ。なうで話を持ちこつ。それでいいかな?」

「あつ、はい。わかりました。あの……」

まだその場から動いたとしない栄子が、上田遣いで広海を見上げる。

「何?」

運転席のドアに手を掛けながら、広海が怪訝そうに訊ねた。

「一緒に……」

「一緒に?」

「あの、一緒に乗せて行つてもうつてもいいですか?」

そう言つて助手席側に回り込もうとした栄子を、広海が俊敏な動きで阻止する。彼女の前にバリケードの「J」とく立ちはだかったのだ。

「凜香、早く乗れ」

「う、うん」

広海の田配せに応じるように頷き、凜香は促されるままに素早く助手席に乗り込んだ。

「そ、そんなあ……。鶴本先生。あたしはどうすれば

行く手を阻まれて身動きが取れない栄子が、顔を引き攣らせながらも広海に懇願の眼差しを向ける。

「ああ、申し訳ない。話が終わつたら、もう学校には戻らないのですね。帰りの足がないと、里見先生は困るんじゃないかな? 君は自分の車で行った方がいいと思うけど」

腕を組んだ広海が、並んだ車の端の方に停めてある赤いセダンに

視線を移す。

「や、そうですね。わかりました。なら、自分の車で行きます。でも……」

「まだ何か？」

「これって、鷺野先生もあたしたちの話しえに同席されるってことですか？」

栄子がドア越しに、助手席に座る凜香を睨みつけて言った。

「そのつもりだが。何か不都合でも？」

「あっ、べ、別に……」

「では、お先に」

広海が栄子に背を向け運転席のドアを開けると、するりとシートに腰を沈めた。

みるみる栄子の顔が歪む。立ち止まつたまま、何か言いたそうに一瞬口を開きかけたが、結局何も発することなくそのまま踵を返し、校舎に戻つて行った。

凜香は広海と顔を見合わせ、ふうっとため息をつく。

今までに一度も経験したことのないような超重量級の疲労感が、凜香の両肩から背中にかけて、ずつしりとのしかかってくる。

広海の気持を受け入れることが、こんなに重く苦しいものだと夢にも思わなかつたのだ。

「広海。お願いだから、これ以上モテないでくれ……。私の身が持たない」

凛香のつぶやきをかき消すように車がエンジン音を発して、ゆっくりと動き始めた。

車の流れは良好だつた。秋の気配などまだ微塵も感じられない幹線道路沿いの街路樹は、九月の陽射しをたっぷりと浴びて、緑の葉を誇らしげに風に揺らしていた。

初めての赤信号で停止したとたん、広海がハンドルを叩き、声を上げて笑い出したのだ。

「何がそんなにおかしいんだ！」

意味不明な広海の笑い声が凛香の瘤に障る。

「ヒトの苦労も知らないくせに……。そもそも、広海が里見栄子に毅然とした態度を取らないから、こうこう結果になるんだろう？」

凛香の行き場のない怒りは收まりそうにない。

「だつて……いっひつひつひつ……。まさかおまえが、里見さんを連れてくるなんて思いもしなかったし……あははははははは……」

「だーかーらー。あんたは笑いすぎなんだよー。ムカつくやつめ……」

…

凛香の頬が無意識にふりふりと震る。

「はいはい、わかりました。おまえの言ひ方通りです。だからこそ、そんなに怒るなよ」

「怒つてなんかいない！　ふん！」

凛香は鼻息も荒く、そっぽを向いた。

「俺は、今まで一度だって里見さんに甘い顔を見せたことはないし、口説いたこともない。それだけは信じてくれよな。なあ凛香。もしかして、俺とおまえが付き合つてることが彼女に完全にバレちましたのか？」

「……」

外の景色を見ながら、無視を決め込む。

「わづか……まあ、こずれわかることだしな」

返事もしていらないのに肯定されたと受け止めるあたりが、ますます腹立たしい。言い返すのも馬鹿らしくなった凛香は、ひたすら沈黙を守り続ける。

「彼女になんか言われたのか？」

「……」

「やつぱつやうか」

何がやつぱりそなのか……。広海の一人よがりもここまでくればたいしたものだと、凜香は抵抗する自分がむなしくなる。

「いつだつたかな。一学期の期末テストが終わって、答案を返し終わった頃だつたと思うんだけど。音楽準備室に突然彼女が押しかけてきて、そろそろ私と付き合つて下さること言われたことがあつたんだ」

「ええつ？」

「これには凜香も黙つてはいられない。あまりにも衝撃的すぎるではないか。

「バレンタインの時にあれだけきつちり断つたのに、なんでもまだそんなことを言つてくるんだりひとつ、マジでうざかった。でも職場の同僚だし、大学の後輩だし……。あとあと氣まずくなるのも嫌だろ？今はまだ彼女は作らないんだと言つて、きつぱりと断つたんだけどな。そのことを彼女の都合のいいように解釈されたんだと思つ

「つたぐ、広海ときたら……」

「なんのことはない。凜香との新しい恋がスタートする直前に、広海はちやつかり彼女に何度もかの告白をされていた……というわけだ。油断も隙もあつたもんじゃない。

「広海、頼むから、それ以上話をややこしくしないでくれ。彼女は相当あんたに期待してるみたいだぞ。それに今年のバレンタインのお返しに素敵な物をもらつたとか言つてたし。いつたい何をあげたんだ。その気のない奴に思わせぶりな贈り物なんかするからこうい

「う」とになるんだ！ ベーーーー！」

怒りの虫が収まらない凜香は、小さく子守もがするよつと田の下に人差し指を充てて引っ張り、おもいつきつ舌を伸ばしてあかんべをした。

「あはは。ひつでえ顔。でも、おまえのその憎たらしくて変てこな顔も、やつぱり好きだなあ。ああ、キスしてえ」

次第に上半身を傾けてくる広海の肩を容赦なく押し返す。

「ふ、ふざかるなつ！ ちやんと前見て運転しやー。」

おまけに、せつからもせもせと凜香の膝の上を節操なく動き回る広海の左手を、払いのけるようにパシッと引つ叩いた。

「痛つてえー。ちゅうとくらー、いじやないか……」

怒りに震える瞳で凜香に睨みつけられた広海は、とたん肩をすぼめ、おとなしくなる。

「わ、悪かった。もうしません、『めんなさい』

凜香のエアギターならぬ、エア鬼のツノをひしひしと感じ取った広海は、ようやく正面にハンドルを握り直した。

「で、話はもどるけど……。俺、里見さんにそんなもの贈つたつけ？ 何も記憶にないんだけどな」

本当に憶えていないのだろうか。まさかそんなことはないだろ？
と思いつながらも、しきりに首を捻る哀れな広海にヒントを告げる。

「アクセサリーを入れる何か……とか言ってたぞ」

「ああ、思い出した！ ホワイトデーの時に、ギフトショップで適当に見繕つてもらつた陶器の入れ物に飴を入れて、チョコのお返しにしたんだ。一個五百円くらいだったかな……。もしかして、それのことか？」

「……なるほど、そうかもしれない。里見栄子ときたら、その入れ物をめつちやくちや大事にしてるみたいに言つてたな」

「えつ？ そんなに？」

「うん。きっとその入れ物が、彼女には何ものにも変え難い素敵な物に見えたんだろうな。ああ……。彼女がちょっとかわいそうになつてきたかも……」

好きな人からもう一つ品物なんてものは、決して値段では量れない。何をどんな理由でもらつても、嬉しことに変わりないだろう。

それを広海の自分への気持ちだとプラス思考で受け止めた里見栄子なわけだが。

実は彼女、見かけとは違つて、今どき珍しいくらい純情で一途な心を持つた女性なのかもしれない……。

凛香は俯いたまま、今日も胸元でひつそりと輝くダイヤのネックレスを指先でなぞり、その手を広海の膝の上にそっと載せた。

37・今でも大好きです

心配していた渋滞もなく、一十分ほどで順調に隣町に入る。ドライブスルーもある郊外型の「コーヒーは、カップルや男性の一人客で半分ほどの席が埋まっていた。

だがいくらここが隣町で、店内が空いているとはいっても、生徒がないとは限らない。

凜香は席を決めるフリをしながら、高校生チェックも怠らなかつた。

カウンターでコーヒーを受け取り、奥の円形テーブルの席を陣取る。

椅子はちょうど四脚。凜香はなるべく広海のそばに椅子を移動させて、彼の真横に密着ぎみに座った。

すると五分もしないうちに、カールした髪を弾ませながら、栄子がトレーを手にこちらに向かってくる。

新聞を見ていた中年男性が栄子をちらりと横目で見た。

カップルで来店中の青年も、さりげなく彼女を目で追っているのがわかる。

栄子の登場で、店内が一瞬華やいだように思えた。

「お待たせしました……」

そう言ってふとテーブルの前に立ち止った栄子は、残り二つの椅子を見て、困惑の表情を浮かべた。

椅子は円形テーブルを囲むように等間隔に並んでいるのではなく、

あきらかに凜香と広海から離れた場所にあつたからだ。

もちろん初めからそうなつていたのではなく、凜香が広海のそばに椅子をくつつけた時に、残りを引き離しておいたのだ。

凜香の栄子に対するわざやかな抵抗と嫉妬心。これくらいなら許せる範囲内だらう。

「意外に早かつたね。さあ、座つて」

「あつ、はい」

広海に促され、栄子がしぶしぶ片方の椅子に腰を下ろす。

向かいに座つた栄子は、時間的にあれからすぐに学校を出たはずなのに、化粧直しは完璧だった。

マスカラもしっかりと増量され、唇はまばゆいほどにグロスがきらめいている。

まさしく、女の魅力全開だ。広海争奪戦へのただならぬ意気込みが感じられるではないか。

凜香は決戦に備えて、コーヒーを一口飲んだ。

くせのない柔らかい味だ。が、しかし。広海の淹れてくれるコーヒーの方が何倍もおいしいような気がした。

彼と一緒に過(ご)した日の翌朝は、必ずコーヒーを淹れてもらつている。

彼がたてたコーヒーの香りで田覚める幸せは何物にも代え難い。もう誰にも譲れない、広海の淹れてくれるコーヒーは自分だけのものだと、凜香は栄子を前に決意を新たにする。

「で、用件は何？ 里見先生」

いきなりだつた。広海のストレートな問いかけに緊張が走る。おもむろにスーツの上着を脱いだ広海が、それを凜香の膝に預けるように載せた。とても自然な流れだった。

栄子の視線が広海の一挙手一投足を追う。彼女の口元が少し歪んだように見えた。

凜香の膝にある広海の上着から一瞬鼻先をかすめる匂いに、軽くめまいを覚える。

それは大人の男の匂い。抱きしめられた時に感じる広海の匂いだつた。

そして彼がネクタイの結び目に片手をあてがい、左右に揺すつて緩めるしぐさに、凜香はもはやノックアウト寸前にまで追い込まれる。

恋敵を前にしながらも、隣の恋人にときめいてしまつ凜香は、もはや手の付けようがないほど恋の病が重症化してしまったのだ。

「あ、あの……」

栄子がしきりに膝の上の手を組み替えて、落ち着きのない様子で話し始める。

「鶴本先生は、前の彼女さんと、その……年末に別れたとお聞きしました」

「そのとおりだが」

広海は栄子を真っ直ぐに見て、答えた。

「じゃあ、なぜ。どうしてあたしの申し出を断つたんですか？　あたしのこと、そんなに嫌いなんでしょうが？」

早速栄子が囁み付いてくる。でも、どうしてそんな短絡的な理由になるのか。

栄子が嫌いだから付き合わないとするならば、広海が付き合わない人間は皆、彼が嫌っている……ということになってしまつ。

「ははは……。それはまた極論だな。里見さんのこと、別にそんなに嫌いじゃないよ。国語の米倉先生も、数学の井本先生も。体育の弓削先生も嫌いじゃない。でも、彼女らとは付き合つてはいけない」

国語科の米倉は、近々定年を迎える年齢ながら、すこぶるパワー溢れる独身女性教師の筆頭だ。

同性の職員の中で凜香が一番尊敬する先輩教師もある。

数学科の井本は離婚経験がある四十代の美人教師だ。

家庭内別居中の三年の学年主任が、どうも彼女に言い寄っているらしい……という噂もある。

体育科の弓削は、器械体操をしていたというだけのことはあって、小柄だがきびきびした動きで仕事にも真面目に取り組み、生徒からの信頼も勝ち得ている将来有望な新卒教師だ。

栄子も含めて、この四人が東高の独身女性カルテットと言いたい

所だが、凛香も正真正銘まだ独身だ。

なので五人合わせてクインテットになる……などとのん気なことを考えている場合ではない。

栄子が鼻息も荒く、身を乗り出して反撃を始めた。

「鶴本先生！ そんなへりくつは聞きたくありません。あたしは、あたしは……。せっかく先生がフリーになるのを待ってたのに、どうしてあたしと付き合つて下さらなかつたんですかつて言つてるんです！ 実際に付き合つてみないと、あたしのこと、何もわからないじゃないですか。それにあたし、鷺野先生より若いし、女らしいし。誰が見たつて、あたしの方が先生と似合つてゐるはずです！ 違いますか？」

栄子のあからさまな言い分に、怒りが込み上げてくる。凛香のこめかみにギリギリと青い血管が浮き出た。

「里見さん、まさしくそのとおりだと俺も思つよ」

にもかかわらず広海が含み笑いをしながら、凛香をひりつと見るのである。もちろん凛香が穢やかでいられるはずもなく。

「な、なんだつて！ なんであんたまで一緒にになつて、そんなひどいことを……」

凛香の怒りは到底収まらない。

「こんな私でいいつて言つたのは、どこのどつだー」

まあまあまあ……と広海がなだめるように凛香の肩をさすった後、テーブルの上の一点を見つめながら、ゆっくりと口を開いた。

「里見さん。少し、俺の話を聞いてくれますか？」

栄子は口元を引き結んで頷いた。

「世の中には男女の数だけ恋愛の形もいろいろあると思つんだ。里見さんの言つようこ、まずは付き合つてみてお互いの良さを知り、その結果実る恋もある……。ところが俺の場合、すでに愛する人が決まつていたから、そうする必要がなかつただけなんだ。凛香とはかれこれ十年来の知り合いで、そして、ずっとあこがれ続けた人だ。今やつと俺の気持ちに応えてくれて、一緒に生きていくつと決心したばかりなんだ。もう迷いはない。だから里見さん、君とは……」

「ふはっ！ ゴホッ、ゴホッ！」

凛香は突然の告白に、口元をぐんぐんとコーヒーを思わずふき出してしまつたのだ。

あわててハンカチで口を押さえる。それでも咳は止まらず、むせ続ける凛香の背中を広海の大きな手がいたわるように上下していた。栄子がその光景をじっと見たあと、目を伏せた。そして、消え入るような声で話し始めた。

「そ、ですか……。それが、先生の、鶴本先生の本当の気持ちなんですね。よく、わかりました。あたしだってこう見えても教師の端くれです。引き際は心得ているつもりです。先生を困らせるのは本望ではありません。でも、信じてください。あたし、ほんとうに鶴本先生が好きだったんです。今でも……。今でも先生のこと、

大好きです

「里見先生……」

突然の告白劇に広海も驚きを隠せない。

「音楽室でピアノを弾きながら生徒を指導していらっしゃるといろも、職員室でパソコンに向かっていらっしゃるとこりも、響きのある魅力的な声も、顔も……。全部好きなんです。うすうすは気付いてました。鶴本先生が誰を見ているのかって。先生の視線の先に鷺野先生がいるってこと、悔しいけどわかつっていました。鷺野先生、あなたが本当にうひゅましい」

「あ……」

栄子が顔を上げ、凜香と目が合ひ。

でもこればかりは、どうしようもないのだ。
後輩だから、彼女がかわいそつだから……。そんな理由で簡単に譲り合う類のものでもない。

「はつきりと言つて、どうして鶴本先生のお相手があなたなのか、未だに理解できません。でも鶴本先生が鷺野先生を選ぶとおっしゃるなら、あたしは、もうどうすることもできない……」

「里見先生……」

声を震わせながら自分の思いを話し続ける栄子に掛ける言葉が見つからない。

「鶴本先生、鷺野先生。どうぞ、お幸せに。それと、あの話のことですけど。もう少し考えさせて下さい。では今日はこれで。失礼……します」

栄子は田にいつぱい涙を溜めながら立ち上がり、トレーを手にして誰とも田を含わさずに出て行ってしまった。

一口も飲まなかつたコーヒーも、彼女と共に去つていく。

見事な引き際だとしか言ひようがない。彼女の広海への想いは、やはり本物だつたのだ。

ところがさすがの栄子も広海のあの宣言には、手も足も出なかつたのだろう。

それにしておどりだ。凜香の隣に座る男の、この余裕綽々（ゆゆうじやくしやく）な態度。

今までやつやつて、いつたい何人の女性を泣かせてきたのだろう。

ちよつと予定より遅くなつたが、今から広海と一緒にスタジオに向かつ。

教頭とは夕方に合流することになつてるので、迷惑はかけていない。

修羅場も思いのほかあつせつとぐづぬけ、さあスタジオに行こうかと腰を上げたその時だつた。

凜香は広海のただならぬ様子に気付く。

「凜香……。俺、大丈夫かな」

「広海。どうしたんだ。どこか具合でも悪いのか？」

広海が青ざめた顔をして、すがりつゝような田で凜香を見るのだ。

「俺さあ、せつかひどこと言つたよな？…。里見さん、きっと俺を恨んでるだろ？…俺のことが好きだつて、あんなに一生懸命告白してくれたのに…。俺、人として最低なこと、やつちまつたんだろ？…」

「広海……。あなたもしかして、今まで自分から振つたりしたこと、ないとか……？」

「ない……かも。それとなく遠ざけるようなことは言つたけど、あそこまできつぱりと断つたのは……初めてかもしない。いつもこっちが振る前に振られていたから、そこまで言つ必要がなかつた、ってのもある」

「……ったく、あんたって人は。優しさの安売りもほどほどにしないと、これからも苦労するぞ。でも私は嬉しかつた。広海がきつぱりと言つてくれて、嬉しかつたよ」

「やうか。おまえがそう言つてくれるなら、俺も自分のしたこと自信を持つていいんだな。でも彼女、来週ちゃんと学校に来るかな？ なあ、どう思つ？ 思いつめて……なんことにならないだろうか。ああ、どうしよう、どうしよう……」

広海は低く唸りながら頭を抱え込み、何度も何度も大きなため息をついた。

凜香は男の隣に黙つて寄り添い、ガクガクと小刻みに震える彼の肩に、スーツの上着をそつと着せ掛けた。

37・今でも大好きです（後書き）

2010年12月5日21:54 にメッセージを送つて下さった
方へ。

そして、始まる気に入つてください、とても嬉しいです。
今更新が滞つておりますこと、本当に申し訳なく思つております。
最後まで書き続ける予定ですので、もうしばらくお待ち下さいね。
メッセージを残していただき、ありがとうございました。
これからも頑張りま～す

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8783e/>

そして、始まる

2010年12月9日19時18分発行